

この素晴らしい世界にApo組を!(一部のみ)

食卓の英雄

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

Fate/Apocryphaの主人公、ジークに転生した主人公。

おおそ原作通りに進んで邪竜と化した彼は突然異世界に転移する。

そこにはかつての敵と死んだ筈の者までやってきていたのだった！

聖杯戦争では無いと分かった一同はかつての事を水に流し休戦を結ぶ。

だが転生者はジークだけではないらしく、

右も左も分からない、何ならこの世界の常識はもっと分からない！

そんな状態だけど何とかやってける！…筈

悩んだって仕方がない！

彼等の物語は、今始まる!!

「と、いうかこのモンスター弱すぎなんじゃけど」

「ノッブは出てこないんですから引っ込んで下さい！

あ、モチロン沖田さんは出ますから全国8千万の沖田さんファンは楽しみにしてて下さいね〜」

「バカタレ！出るのは儂じゃ！」

（出る可能性なんて微塵も）ないです

注) 6話くらいまで無駄に字数多いので地の文は、詳しく見たい方、又は暇を持って余している方、ぐだぐだでも見たいよ。という方のみ読んで下さい。この条件に当てはまらない方は会話文だけお読みになった方がよろしいかもしれません

## 目次

く幕間の物語く	
その頃のG Oライオンさん	1
く変人多発都市アクセルく	
外典：異世界転移	13
邪竜の出立	27
最初の一步	38
初スキル習得く不死王を添えてく	50
初めてのクエスト	63
邂逅、不屈の英雄	73
このチート無しの二人に交流を！	86
天翔けるキャベツは何処へ行く	94
赤剣従者の装備ショッピング／（頭のおかしくない）ウイザードの	
会合	102
森の調査クエストくカワイイ？怖い！より怖いく	110
魔笛と疑問と友達と	118
報酬金と魔王軍幹部？	126
この鍛錬と遭遇に祝福を！	136
この変態に痛撃を！（前編）	141
この変態に痛撃を！（後編）	146
ある堕天使の受難1	151
ある堕天使の受難2	158

## 〜幕間の物語〜

### その頃のGOライオンさん



#### アクセル共同墓地

「おい、止まれ。両手を上に上げて頭の後ろで組め。何もするな。怪しい動き、詠唱や魔力を使ったら即座に撃つ。そうしたほうがあなたの為だ。あんたは何者だ？何が目的でこんなところにいやがる」

獅子刼界離は真夜中の墓地にて、ある人物へと忠告をかける。

忠告といっても、ここから先には入ってはいけない、そこは危ない等の日常的なものではない。手に持つのは己が魔術礼装であるソードオフの水平二連式のショットガン。先の言葉通り、相手が少しでも怪しいと思える行動をしたのならば、躊躇なく頭蓋に向けてその魔弾をめり込ませたことだろう。

しかし獅子刼の覚悟は、いい意味で裏切られる。元々こんな脅しは魔術師相手には殆ど効果的ではない。

こんな脅しに屈するのはどうしても死にたくない者や、ただの未熟者位であり、真つ当な魔術師ならば何らかの方法で脱出せんとしただろう。

だが今回の相手は例外のようで、その警告には両手を上げ、ゆつくりと振り返る。

「は、はいっ、すみません！誤解なんです！」

「はあ？」

驚くのも無理はない。その相手の見た目は若く、おっとりとした優しい目つきの美人であったからだ。

勿論それだけで驚く獅子刼ではない。

まず、こちらは今来たばかりで、なおかつ何かしらの儀式をしていたのだから、ここら一带の、あるいはその魔法陣内の工房化、あるいはこれ程の実力者であれば神殿化も考えられなくもない。そして恐らくの実力は相手が上。常識的に考えて、こんな事に大人しく従う訳

も無いのだ。

尤も、この常識は一般的な魔術師のものであって、まともな感性を持つ人物には当てはまらないのだが。

そしてもう一つ、その女は余りにも魔術師なんてものとは真反対に位置するであろうからだ。無論、魔術師なのだから見た目を変えたり演技をしているかもしれない。

しかし獅子劫はそんな輩は腐る程見て来たが、目の前の人物にはそれらしさが感じられない。それが間違っていたとしたら、それは騙された獅子劫が悪いのだ。

魔術師然としたローブを纏いこそすれ、涙目で弁解する女は迷子になった子供を思い起こさせるだろう。

しかし、今あげたものとは比較にならない衝撃が襲っていた。

「…アンデッドだと…?」

そう、彼は戦闘特化な為、世間一般の思い描く死霊術師とはかけ離れている。が、それでも死霊術師。目の前の相手がアンデッドかそうでないかくらいは見分けがつく。

というか、ろくに隠されてすらいないのだから暴けて当然だろう。

獅子劫は、自分の感覚を疑った。彼が知るアンデッドとは生者の血肉を貪る心無き悪鬼。あるいは死徒のような存在。だが目の前の恐らくアンデッドからは血の匂いはせず、それどころかこちらへの敵意すら感じられない。

先程感じた魔力が嘘かのようなこの姿勢には、警戒を超えて呆れるしかない。

「へっ!? な、何で分かったんですか!?!」

「いや、だってそりゃあ…お前さん。隠されてすらいないからなあ…」

何故だろう。ちよつとぐだぐだになった気がする。ぐだぐだはコハエース時空だけで十分です。

「それで、アンタは何者で、何の目的があつてこんな事を?」

いくら拍子抜けとはいえ警戒は忘れない。その証拠に今まで一度たりとも銃口は下ろしていない。

「えーと、はい。私、この街で魔道具店を営んでいます。ウイズ、とい  
います」

アンデッドのやっている店。想像できない。死肉か飛び血でも瓶  
詰めにしてあるのだろうか。あるいは己の礼装の様に屍体を使った  
道具だろうか…。いや、かつて日本で起こった人間パイプオルガンな  
んて悪趣味極まりない物かも知れない。

「違います！何ですかその人間パイプオルガンって!?!ちゃん  
とした魔道具店ですよ！……それで、何故私がアンデッドだと?」

心底不思議そうな顔で尋ねる。

(本気でそんな事思ってたのか? 隠蔽すらしなくて……いや、コッチ  
じゃその辺も違うんだろう。うん、でなきやあんな格好の奴等はいな  
いわな)

「あー、まあ経験上似たような事はあったしな。それに、こんな真夜中  
で死体を呼び起こしてるのなんて、俺が知る限りでは限られてるから  
な」

自らが死霊術師だとは告げず、当たり障りのない言葉ではぐらか  
す。騙し合いや智謀が跋扈する魔術師相手ならば、このような言い訳  
は下の下の下。だからその見極めの為にも曖昧にぼかしたが、件の相  
手はそれで納得したらしく、後に言葉を繋げる。

「そうだったんですか。あの、すみませんが、この事はどうか内密にし  
て貰えると……」

(この目……本気で信じてるな。まったく、どんなお人好しなんだか……)  
流石にここまでくると信じざるを得ない。これも全て含めた演技  
だったら大したものだ。多分サーヴァントでも騙されるだろう。

「あの……聞いてますか?」

先程の困ったようなおどおどとした表情ではなく、キリリとした  
咎める様な視線で、それでも尚威圧感や敵意は微塵も感じられな  
い。

「あ、ああ。すまんすまん。で? 黙っついて欲しいんだろ?」

「はい。私も今は死ねない理由がありまして……その後でしたら好きに  
して良いんですけど」

何やら懐かしげに語るその表情は、何か邪悪な野望を秘めたアンデッドのものではなく、ただ過去を誇るような、それでいて強い意志を感じられる一人の人間の顔だった。

獅子却は、この顔を知っている。32年の人生において酸いも甘いも、人間のきれいな部分と醜悪な部分を見てきた己は知っている。

この顔をする者は総じて悪辣を良しとせず理不尽に抗い、そして人を善しとする者だ。

(何でこういう奴がアンデッドなんて道を選んじまったのかねえ……)

きつとそこには見ず知らずの己が踏み込めぬ壁が存在するのであろう。

「まあ、条件付きなら黙っててもいい」

嘘である。条件を付けなきゃバラすかの様な言い様だが、条件無しでも決してバラすことは無いだろう。バラすメリットも無いし、むしろアンデッドとなった貴重な例として付き合っていきたいことだろう。

「条件、ですか……。……いい、一応言っておきますが、食料もお金もあ、ありませんからね！私だってここ一ヶ月砂糖水で凌いでいるんですから」

堂々と宣言するが、それは経営者として如何なものか。というか、食生活が絶望的すぎる。食に拘らない魔術師然とした魔術師でもここまで酷くない。

「あー、うん。まあ、後で飯は奢ってやる。条件っていうのも、俺は仲間と最近この国に来たもんでね。こっちでの常識とか、まあ色々聞きたいんだけど、いいか？」

「…それだけ、ですか？」

「何だ？もつと色々頼んだ方がいいか？なら追加するが…」

「いえー！いえー！それで大丈夫ですー…コホン、ええと、その程度でよろしければ、私の知る限りの事はお答えします」

そう言われるとタバコを口に含み、火をつける。これは何の魔術効



果はないが、これは物好きな職人がダンボール一箱だけ作ったものらしく、希少価値という意味では普通ではないのかもしれない。

「よし、契約成立だ。さて、ここで立ち話も何だ。何処か落ち着ける場所は無いかね」

「それでしたら私の店にいらしてください。お水くらいならお出しできますので…」

「……着いたらだまし討ちとかじゃあないよな」

「もう…そんな事はしませんから!」

未だ警戒を続ける様な発言をする獅子劫に、流石のウイズもぷんぷんと怒り出す。

「悪い悪い」

「と、取り敢えず着いてきてください…えつと…お名前を聞いていませんでしたね」

「ああ、獅子劫界離だ。獅子劫が姓で界離が名、好きな様に呼んでくれ」

「では…カイリさんと」

いきなりのファーストネーム呼び。

「ふむ……まあいいか」

さあ行きますよと先を進み始める彼女に対して、獅子劫はやれやれと墓地の土を踏み出した。

「やっぱ不味いな…。あの人形師サマは一体何でこんな愛飲してるんだか…」

しかもタバコが原因で動死体に囲まれた。ウイズの言葉を信じるならこのゾンビどもは彼女が術などで生み出した訳ではないと言う。つまり何か大きい音を立てたら他のが寄ってくるかもしれない、銃器は使えない。

「出だしでこれかよ…」

ナイフで殺したが、後が最悪だった。

文明の未発達なこの地では、水道が無いのか中々血を流せず、住民から畏怖の視線でもって迎えられることとなったのだ。一度衛兵を呼ばれてしまい、事情説明に時間を費やすこととなった。

尚、直接的でこそないが間接的な要因を作っていたと知ると、流石の彼も僅かに苛ついたようである。



「そ、それではぼぼ、冒険者登録をお、お願いします」

ギルドの一角、茶髪でやや小柄な受付嬢はその身をガタガタと震わせていた。

理由は目の前の人物。逞しい筋肉といくつもの傷跡、威圧感を与えるかのような革のジャケット。明らかにカタギではない。

これがベテランの者なら話は違ったのだろうが、生憎とこの少女はこれが初の受付仕事なのだ。間が悪かったとしか言いようがあるまい。

代表として受付を済ませようと獅子却が前に出たのが悪かった。自らに怯えていることも勿論気がついており、失敗したなという思いつつも「そんなにか？」という疑問が渦巻いている。

ともかく、さっさと終わらせたい女帝がいるので、そちらに先を譲る。

出てきたのが見目麗しい美女と優しげな好青年だからか、目に見えて気分が戻っていく。

「はい、登録料は一人につき千エリスになります」

ギクシヤクと慣れない様子で紙を取り出す彼女。そこからは隣であっている説明とぼぼぼ同じようなことを告げられ、二人がペンをとる。

「ではこの書類に身長、年齢、身体的特徴等の記入を」

差し出された書類をすらすらと書く二人。その画は中々様になっている。

「随分と慣れた様子だったな。サーヴァントだからこういうのは慣れてないと思っただが」

「いえ、これでも長い間神父をしていたのでその程度は」

「貴様は王がただ玉座に跨がるだけの存在とでも思っていたのか？」

フンと鼻を鳴らし見下すセミラミス。

そういう事かと納得したが、素朴な疑問がふと脳裏に思い浮かぶ。

「なあ、年齢はどうしたんだ？」

そう、サーヴァントは例外を除き、その殆どが全盛期である姿で召喚される。若い外見だが実際の年齢とは違うこともあるので、外見からの享年の予測は非常に難しく、召喚時の外見に精神も引っ張られるので、性格も当時のままだ。

つまりは記入した年齢が実年齢か、召喚時の姿なのかが気になった。

実年齢ならば永く生きた者は怪しまれ、後者ならば嘘をついている事になる。

前者の方が信じられるとはいえ、何かしら嘘を見抜くものでもあつたら多少は疑問に思われるだろう。

そしてその答えは直ぐに明かされる。

「申し訳ありません。記入に不備がございます。書き直して下さい」

そこには「天草四郎（益田時貞）……77歳」「セミラミス……62歳」と書かれていた。

どうやら実年齢をとつた様だ。だが天草は17で死んだ筈……と思つたが、受肉していた期間も含めているらしい。彼にとってはその時間も生きていた事に入るのだろう。

「いえ、それであつていますよ。ねえセミラミス」

「ああ、それであつている。…それにしても我がマスターは人をからかうのが好きと見える」

「ふふ、貴女程ではありませんよ」

仲睦まじいその様子は本当に家族と言われても一応納得は出来る。

「え、あの、とてもそうは見えないのですが……か、仮にそうだととしても高齢の方は危険なので……」

だがしかし彼らを見て老人だと思ふ者はいまい。

より一層困惑する受付嬢に天草四郎は自らの口元に指を置き

「すみませんが、了承してくれないでしょうか。ほら、体は全盛期と同然に動きますし。熟年夫婦の我がままだとも思つて下さい」

「そう、熟年夫婦の……」

（さて、こやつは何と言つた？熟年夫婦……誰が……？我と？こやつが？）

それに気づいた途端、みるみるうちに顔が赤くなつていき

「き……き……おま……お……お……おぬ……お……!?」

動揺を隠せない様子のセミラミスとそれを見てくすくすと笑う天草。お互いに本気では無いのだが満更でも無さげ、ベタベタとくついている訳でも無いのに何故かピンク色の空間が出来上がっていた。

「マスター、俺達何見せられてんだろうな……。…ペツ」

「言うな…俺もイメージと違いすぎて困惑してるんだ…。あと唾を吐くな、普通に汚い」

その後、ステータスを計り終えた二人。そのステータスは受付が思わず3度見し、魔道具の不調を疑うほど。ややあつてそれが本当のステータスであると理解すると大声を上げて驚き、今までどんな事をしてきたのかを問いただしてくる。それはのらりくらりと躲して登録を終える。

「良かったのですか？あなたはアサシンよりもキャスターの方がより実力を発揮できるのでは…」

「よい、我は現界した時点でこの身はアサシン、サーヴァント故な。それよりも我はマスターが裁定者でないことに驚きだ。何故わざわざ<sup>偉大な</sup>アークプリースト<sup>祭</sup>なぞにしたのか理解に苦しむ」

それもそうだろう。天草四郎は信仰に生きた結果領民を殺され、自らの人生にも幕を下ろした。

勿論、セミラミスも本気で聞いているわけではない。彼の中では既に恨み等とうに消え去つている。しかしそれでもまた同じ様な選択、それも訳のわからない職業として。散々振り回された挙げ句の選択が逆戻り、問いたくなるのも仕方ないだろう。これの他にも選択肢はあつただけから。

それでもこの天草四郎は、いや、きつと他の世界でも天草四郎はこ

う言うだろう。

「それでも私は聖職者。神を信仰していますから」

「フンツ：そう言うやつだったな、我がマスターは」

「すみません。ですがこれが私ですのぞ」

「なあ、アイツらに燦然と輝く王剣ブチ込んでもいいか？」

「やめろ！俺が死ぬ！！」

忘れてはいけないのが、これは白昼堂々、ギルドの中の公衆の面前で行われているのである。正直二人でやって欲しい。

さて、少し遅れたが剣主従も登録に乗り出す。

天草四郎とセミラミスという、魔力が最高クラス（他も人間と比べると余りに規格外。魔力はぶつちぎり度トップ）の二人を前にしたせいか、彼女の頭では疑問符が飛び交っている。

「あー、悪いが俺達も頼む」

既に顔面への恐怖は消えており、一体どんなに恐ろしいステータスをしているのか…と戦々恐々としている。

モードレッド  
コイツはともかく俺は人間なんだがなあ…

「モードレッドさんと、シシゴウさん…ですぞ。ではこちらのカードに触れてくださ…下さい。」

外面こそ平静を装っているが口調で台無しだ。

手渡されたカードは見たところ何の変哲もないカードだが、これで能力値を測れるという。念を込めて解析魔術を使用するが、構成は読み取れるも、その材質は獅子劫の知る物のいずれにも当てはまらない。やはりこの世界特有の素材だろう。

「はい。モードレッドさんは…えええ…？」

モードレッドのステータスを見るや引きつった顔になる。もれなく目のハイライトさんはお亡くなりになっている模様。正直客に見えるべき顔では無いのだが、そこは非常識の塊の英雄たちのステータスだけあって仕方が無いのだ。

「モードレッドさんのステータスは運が低い以外はものすごく高いぞ

す。筋力、耐久力、生命力がとりわけ高く、それに比べると見劣りしますが魔力と敏捷性も文字通り桁違いです。はい」

「お、おう……良かったな。モードレッド……」

早口に告げられる言葉は何故だが呪詛のようにも聞こえてきて、ギルド内からも奇異の目で遠巻きに見られている。

「おう！俺がスゲーってことだろ！」

そんなことはお構いなしに豪快に笑うモードレッド。それには納得だが、やはりそういう所はマスターとは違ったのだろう。

そして獅子劫の順番になった。厳つい顔だが特に何もしていないと分かると怯えが消え去り、ようやく目にもハイライトが戻った。

「はい。筋力、魔力に知力、生命力が優れていて、運がかなりいいですね。他のステータスも共に平均よりも大幅に高い……高いです……よね？」

「いや、俺に聞かれても知らんが。……一応言っとくが、俺はどっちかといえど普通の人間だからな」

普通かと問われれば間違いなく万人が否定するであろう。

ゴリゴリの武闘派死霊術師とかほぼ居らず、あげく成り立ちや地球での行動からすると、明らかに普通ではないどころかかなり特殊なのだが。

数多いる魔術師や人類史に名を刻んだ英霊と比べると彼も異常では無いのだろう。

「そうですね……これが普通なんですよね！良かった……私が可笑しいのかと思つてました……」

「あー、まあ、気持ちはお察しするが……客の俺に言うのはどうなんだ？」

やはり慣れていないからだろう。受付の最中にもこうした私語を使う。

指摘されて初めて気づいたのか頬を染めた。

コホンと咳払いをし、元の営業口調に戻る。

「そ、それでは職業を選んで下さい。おや？モードレッドさんには剣士セイバーという職業がありますね。何でしょうか？名前からしてソード

マスターやソードマンと似た職業という事は分かるのですが…。すみません、私では少し分かりません。他の方にも」

「いよっし、セイバーだ！」

「え？しかし…」

「俺がいいって言ってるんだから、いいだろ？」

「はあ…」

強引に押し進め剣士セイバーとなったモードレッド。その顔はやけに晴れ晴れとしていて逆に怪しい位だ。

本人はゲームで言うところの最初の設定やステータスを決め終えた感覚なので、高揚しているだけなのだが

「マスターはどうすんだ？聖職者って顔でもねえし剣なんぞ使ったこともないだろ？死霊術師がないならやっぱりウィザードって奴か？」

「はい。確かにシシゴウさんはアークプリースト等を除く殆どの職業の適正がありますが、ステータスから考えるとアークウィザードがおすすめですよ」

「アークウィザード、ねえ…」

自分も、魔術師タイプだというのは分かっているが、妙にしっくりこない。その事で悩んでいると、一つの職業が目に残る。

「なあ、この『冒険者』って職業は何なんだ？」

すると受付嬢は少し苦い顔で語りだす。

「その…冒険者というのはですね…。全てのスキルを習得出来るのですが、そのポイントはより多く必要になってしまいます。更にはクラス補正も無いので、あらゆる事が本職には及ばない、いわゆる器用貧乏な職でして…余程才能のない方以外は別の職業になっていますよ」

少し悩む素振りを見せ、ヨシと声を張る

「そんじゃあ冒険者で頼む」

「はい、冒険者で…え？」

「何だ？駄目なのか？」

「いえ、別に構わないのですが、宜しいのですか？アークウィザードやソードマスターにもなれたんですよ？」

「ああ、俺にはこっちがあつてる。それに戦闘ならコイツがいる。俺は補助役としてサポート出来たらいいんだよ」

「はい、そこまでの覚悟がお有りでしたら、こちらは何も言いません」  
「すまんね」

「いえ、大丈夫です」

そんな会話もあつたりして彼ら赤の陣営の冒険者登録は終わった。  
「冒険者ギルドへようこそ！あなた方の今後の活躍を期待しています  
！」

同じく登録を終えた黒と共にギルドから去り、情報提供者である  
ウイズの元へと歩き出したのだった。

そこから先のことは、本編と同じである。

因みに、直ぐにクエストを受けると思っていたモードレッドは途中  
不貞腐れてしまっていて、兜を装着して暫くはそっぽを向いていたそ  
うな



## く変人多発都市アクセルく 外典：異世界転移

今から言うことを、きつと人は信じてはくれないだろう。

俺は転生者というやつらしい。元より体が弱く、生まれてからずっと入院していた俺はある時病であつさり死んでしまった。

ん、何？よくあるテンプレ…だって？

そうか…よくある事なのか……確かに俺以外にもいたな。

……すまない、どうやらありふれたことだったらしい。つまらないことかも知れないがどうか俺に起こった事も聞いてくれると助かる。ああ、ちゃんと理由も話す。

ある病で死んでしまった俺は目が覚めるとガラス張りの容器の中、培養液の様なものに浸かっていた。不思議と息苦しくは無く、目も開けられた。

どうやら地下らしく、俺と似たような状況が辺りにも広がっていた。

今考えてみるとよく驚きもせずに周囲を観察出来たな、と思う。

その時は死んだと分かっていたため何でもありだとも思っただのだろう。

そこで作業をしているのは皆薄い茶髪と赤い目をした人達で、何とか…皆常に無表情で黙々と働いていて少し怖かったと覚えている。

いや、大事なものはそんなところでは無いんだ。時折訪れる青マントに青と黒の縞模様が入ったピッチリとしたスーツの様な物を身に纏い、金色の仮面を被った恐ろしい程の存在感の人物と、その人物を先生と呼ぶ少年。彼らの会話は俺に多大な衝撃を与えた。

彼らの会話では『マスター』『サーヴァント』『ホムンクルス』『冬木』『聖杯大戦』これらのキーワードによりここが唯一娯楽としてのめり込んだFateの世界だと分かった。そして俺が使い捨ての魔力供給用ホムンクルスだと言うことも…。

そこで俺は死にたく無い。と人がいない時を見計らい容器を拙い魔術で破壊して逃げだした。魔術なんてやったことも無いが、その時は何故だが使えろという確信があった。

だが元々供給様に作られたらしい俺はロクに歩く事も出来ず、目の前にいたピンクの髪の少女に一か八か助けを求めた。

結果としてそれは正解で、間違いでもあった。この場合、助けを求めた相手が正解で、少女という点が間違いだが。

気絶から回復した俺はいくつかの事情を聞いた。

ただ、その人がライダーのサーヴァントだと言うのは驚いた。サーヴァントといえどもつと凄みを持っていると思っていたのだ。

もう一人、アーチャーのサーヴァント、ケイローンからは色々な事を教わった。彼のおかげで魔術の使い方やこの体での歩き方を覚えることが出来たんだ。あるとき俺を見つけたのが彼では無かったら俺はとつと二度目の死を迎えていたことだろう。

ここはルーマニアで、第3次聖杯戦争にてユグドミレニアの当主、ダーニツク・プレストーン・ユグドミレニアが奪取した冬木の大聖杯を巡って引き起こされた聖杯戦争。

それは魔術協会率いる赤の陣営とユグドミレニア一族率いる黒の陣営。それぞれ七騎ずつのサーヴァントで勝敗を争う聖杯大戦だとも教えてもらった。

一騎でも恐ろしい戦力のサーヴァントが計十四騎もいるだなんて俺ごときでは想像も出来なかった。

そして、敵のサーヴァントがこちらに攻めてきている最中に、ライダーに逃がしてもらっていたが、途中でこちらのセイバー達に見つかってしまった。

逃走の為セイバーのマスターに挑むも返り討ちに合い、殺されかけてしまう。

しかし、セイバーがマスターを気絶させ、死にかけの俺に自らの心臓を差し出し、救ってくれたらしい。

何故らしいかと言うと、俺はそのとき意識が朦朧としていて、よく覚えていない。だが、彼の言葉だけはしっかりと覚えている。

「——ああ、これで良かったのだ——」

「俺は誰かの願いを叶えるのではなく、自分の願いを叶えたかった。欲深で浅ましいと思うが、その想いを捨て切れなかった。」

一度でいい、自分の意志で誰かを助けて、それを誇りにしたかったんだ……。

乞われることがなくとも、願われることがなくとも、ただそうしたいと、前世から、ずっと思っていた……」

彼も、きつと転生者だったのだろう。だがしかし彼は英雄として生き、英雄として死んだ。

俺は彼ほど不器用で優しい戦士を知らない。

邪竜の心臓を得た俺は、体が一回り大きく成長し、まともに動くことができるようになった。

そこから俺はルーラーであるジャンヌ・ダルクと共に……何、長い？いや、だがこれでもかなり……？これを読め？……えっ、と『後は概ね原作の通りです。』？……まさか俺の体験したことにも原作があつたのか？

だが概ね同じと言うことはきつと俺と本来の俺は似ていたのだろうな……。すまない、赤のセイバー、俺はどんな立ち位置だったのだろうか？……主人公？それは……少し照れるな。

だが俺なんか主人公等似合わないだろうに。

『自分に自信を持って？』……いや、そうだな、ありがとう。

どうかしたのかセイバー？あ、彼の方だ。

どうかしたのか？……名を？ああ、すまない、伝え忘れていた。

俺の名はジーク、ただのホームンクルスであり、ただの人間だ。

時を少し遡る

あの後、天草四郎との戦いに何とか勝利したジークは大聖杯に願い、その身を邪竜と化し大聖杯を持ち、裏の世界へ旅立ち、来たるべき時を待ち続けた。

そこまでは良かった。

だが何故か彼等は何人かの見知った顔と共に何処かの平原らしき場所にいる。それもみな当時の姿で、だ。

これは明らかに異常事態だ。聖杯戦争に呼び出されたかとも思ったがそれはまずありえないし、万が一俺が召喚されることがあったとしても赤のセイバーのマスターがいる理由にはならない。

どうなっているのかを知りたいのかジークが声を掛ける。

「すまない、とりあえずこちらへ集まってくれないか、この事態について話したい」

ジークのそばにいた二人のセイバー以外の人物がやってくる。

「貴方も、参加してくれると有り難い」

その声に唯一距離をとっていた赤のセイバーのマスターも近寄る

この場に集まっているのは、

俺、<sup>ジーク</sup>黒のセイバー、<sup>アストルフォ</sup>黒のライダー、<sup>モードレッド</sup>赤のセイバーとそのマスター、それに天草四郎と赤の<sup>セミラミス</sup>アサシンまでいる。

全員が集まったところでジークは確認するように言葉を発する。

「では現状が一体「あー、その前にいいか？」…なんだ？」

が、その言葉は一人の男に遮られる。

その男の姿は顔には疵痕、剃刀のような目つき、筋骨隆々とした肉体とかなりの強面で、つけているサングラスがその厳つきに一層拍車をかけている。

彼の名は獅子刼界離。赤のセイバーのマスターでこの場で唯一の純粹な人間だ。

「俺はあの時間違い無く死んだと思ったんだが、どういう事だ？蘇生術式なんか組んでなかった筈だ。なあ、セイバー？」

獅子刼の言葉に赤のセイバー、モードレッドが肯定する。

「ああ、その認識であつてる筈だ。…ついでに言やあ、俺<sup>サーヴァント</sup>らだけならまた召喚された線があるが、マスターもいるってのはおかしいだら？」

「そうですね。敗退したはずの我々も無傷ですし、聖杯の気配も感じ無い、龍脈もルーマニアとは違って安定していない。恐らく現代の地

球では無いでしょう。どうです？ここはひとまず休戦という形でしょう？」

理由を話しながら提案する天草四郎。その時ジークは（俺はまだ大聖杯と繋がっているが…黙ってしよう。）

と思っっている。

そうした方がいい。だって古事記にもそう書いてあるパラッ

（書いて）ないです…

「そうだな、コイツの言葉に従う訳じゃあ無いが俺もそうした方がいいと思う。何故いるのか分からないうえにここが何処だか分からない。無い無いづくしの現状だ。それに…お前ら英霊の争いに今巻き込まれたらただの人間の俺は溜まったもんじゃないからな。あと、もうバレてる訳だし真名でもいいか？」

「ああ、それでいいと思う」

「この現状だ、仕方あるまい」

ジークフリートとセミラミスも休戦には賛成のようだ。

だがモードレッドは

「けっ！俺は反対だぜマスター！こんな奴等と手を組むなんぞありえねえ、第一手を組んだとしてもすぐ裏切るに決まってる！現状の調査ならこいつ等をぶっ倒してからでも十分だ！」

「ふ、弱い犬程よく吠える」

「んだとテメェ!!」

早速喧嘩腰の二人。

「まあ待てセイバー、お前の気持ちも分からんでもないが現状一切のことが不明のまままだ。お前等を信用してないって訳じゃあ無いがこいつ等には出来ないことが有利に働くこともある。それに単純な数の上でも戦力的にもこっちが上なんだ、いざとなったら全員で仕留めちまえばいい」

「だけだよお…そうだ、お前はどうかんだジーク！あんなにコイツに怒ってたんだ、コイツ等と手を組むなんて嫌だろ！なあ！」

それでも負けじとジークを味方に引き入れようと語気を強めて迫る

「いや、あの時は理由が重なり目の敵にしていたが別に天草四郎が嫌いな訳じゃ無いんだ。俺は弱き人のために立ち上がった尊敬すべき人物だとすら思っている。彼女ジャンヌとは見ているものこそ違えど人の為  
に行動していたのだから。…確かに手を組むことは複雑な心境だが、  
今は過去の事はひとまず置いて協力し合うべきだと思う」

その言葉に以外そうな顔をする一同。

「おや、存外私もそこまで嫌われている訳ではないようですね。私は  
嫌いですがね」

飄々とした表情のままに天草四郎が言葉を繋げる。というかさ  
りと毒を吐く。

「ところで赤のセイバー、モードレッド。何故あの場になかった貴  
方がそんなことを知っているのですか？」

「――！ (啞然)」

「――！！ (驚愕)」

「――！！！！ (冷や汗ダラダラ)」

「確かにそうだ。赤のセイバー、あなたは何故何故俺が怒っていたこ  
とを知っているんだ？」

そう問いかけると早口で

「い、いや、ただの予想だよ予想！ほらっ突入する前のお前の感じから  
するとそんな風だったろ！そ、そこから何と」なく予想しただけだっ  
て！な！」

怪しい、完全に怪しい。いつもの堂々とした態度が嘘のように成り  
を潜めている。顔面蒼白でもりまくり、これでは怪しむなと言う方  
が難しい。

「「「……………」」」

「な、何だよ！」

「いえ、まあ良いでしょう。」

「あー、取り敢えず協力は成ったって事でいいか？」

「ええ、元より私から持ちかけた事です。今のところは破る気はあり  
ませんよ」

「あー、クソっ！仕方ねえなっ！今回ばかりは見逃してやる！だが少

しでもおかしな動きをしてみろ、そんな時はすぐに叩き斬ってこの劍の錆にしてやるからな！」

「やれるものならばな」

「今すぐにもやってやろうか……！」

「

「まあまあ、落ち着けセイバー。陣地を失った魔術師と戦闘用じゃあないサーヴァントなんてお前にかかれればチョコイのチョコイだろ？それともお前は同盟も何もかもすつ飛ばしていつでもとれる首を狙うのかね」

取り敢えず納得した一回で話を進めようとする。とそこにジークフリートが言葉を発する。

「すまない、今から大事な話をするというのは分かってはいるが聞いてもいいだろうか？」

「あ、ああ構わない」

「すまない、そこにいる四人は一体？いや、サーヴァントとおそらくマスターだというのは分かるが、どちらも見た事が無いんだ。……それと、黒のライダーは何処にいるんだ？」

ジークフリートが四人の事を知らないのも無理はない。

何故なら彼はジークを助ける為に聖杯大戦初期にて既に脱落しているからだ。天草四郎の下から離れていたセイバー組や陣地に引きこもっていたセミラミスは勿論、第3次聖杯戦争より生き残っていた天草四郎については語るべくもない。

「あー、そーいや黒のセイバーは早めに脱落してたんだっただな……俺は獅子劫界離、赤のセイバー……いや、もう真名でいいか。モードレッドのマスターだ。んでそいつ等が赤のアサシンとそのマスター兼監督役兼ルーラーの天草四郎だ。」

獅子劫からの返答にジークフリートは驚いたように目を見開く。

「？ルーラーはあの女性なのでは無かったのか？」

ジークフリートからの純粹な疑問に

「話せば長くなるんだがな、こいつは「私は天草四郎時貞。かつて日本の冬木という地で起こった第三次聖杯戦争にてルーラーとして現界

し、その戦争で生き残り此度の聖杯大戦に赤の陣営のマスターとして参加した受肉した英霊。そしてそこにいるアサシンが私のサーヴァントです。」…まあ、そういう事だ」

説明しようとする獅子劫のセリフに割り込むような形で自分達を紹介する天草四郎。その説明にジークフリートは納得したように頷く。

だがこの説明は一見簡潔にまとめているように見えるが肝心な部分は隠し通している。

自分が何故マスターとして参加しているかや本来私的な願いの無い英霊のみが与えられる筈のルーラーというエクストラクラスでマスターとして参加しているのか、また、第三次聖杯戦争での事も『召喚』ではなく『現界』という言葉であやふやにさせようとしている。当たり前だが赤の陣営のマスター全てに幻覚を見せ、都合の良いように操っていた事など欠片も触れていないのだ。まあ、これも説明したならば多少は印象が悪くなるのでわざわざ言う訳も無いのだが…。

その説明にはジークフリートを除く全員が不服そうな顔をしている。

その空気を変えようともう一つの疑問に答えようとしたジーク。

「それで、ライダーだったか、ライダーならばすぐそ「ああああっ!!」…ここに……。」

「あの野郎、いなくなつてやがる!」

先程まで側にいた筈のライダーの姿は無い。

この場所がどんな場所なのか分かっていないのにも関わらず一人で何処かへと行つてしまったのだ。

「アイツどこ行きやがった!」

ジークは怒るモードレッドを尻目に（ライダー…相変わらずだな…）とか思つてたりする。のんきだなオイ

すると離れた所から声が聞こえてくる。

そこにはキャベツらしきものを両手で抱えてかなりの速度でこちらに向かつてくるアストルフオの姿があった。

「おい、マスター!見てみてー!キャベツ!キャベツが空飛んで



たー！」

その言葉に全員が呆れ顔になる。

「アホかお前！つくならもうちっとマシな嘘をつきやがれ！」

それはそうだ。キャベツが空を飛ぶ等他人に話したら正気を疑われるだろう。

「嘘じゃないって！本当に飛んでたし何なら鳴いてたって！」

「それこそあり得るか！現代の神秘がねえ植物だぞ！」

そこに天草四郎が何かに気付いたかの様に目尻をあげ

「ん？それは私の《真名看破》によるとそれはレタスとありますが…」

「ああ、葉が厚く球状もキレイじゃあない…こりゃレタスだな。…しかし、それよりも気になる事がある。」

「ええ、サーヴァントにしか効果が無いはずの真名看破が何故レタスにも作用されているか……。この地に来てスキルの仕様が変化したというのが一応の推測だが……。何故レタス…」

「フツ、よいではないかマスター。似ているだけの毒のある植物では無いと分かったのだからな」

獅子劫の疑問に自分の見解を交えて答える天草四郎、そしてそれを愉快そうにくつくつと笑うセミラミス。

そんな事は知らんとばかりにアストルフオは続けて報告をする。

「あ、そうそう、さつきついでに見つけたんだけどさ、バーサーカー、あ、もうみんな知ってるし名前と呼んでいいよね。フランをそこで見つけたんだ！ほーら、こっちおいでフラン！」

「…ウウウ…アア…」

アストルフオが呼びかけると木の影から一人の人物が姿を現した。

それは花嫁衣装に身を包んだか弱い少女の様に見える。だがその正体は世界中で知られる怪異中の怪異フランケンシュタイン博士の手により創り出された悲しき化け物。

フランケンシュタインの怪物その人？である。彼女は天草四郎に對してかなり敵愾心を持っているようで少し離れた位置で鋭く睨みつけている。

モードレッドはその姿を目にし目を僅かに伏せる。何か思うところ

ろがあるようだ。にもかかわらず

「やっぱりボクってばお手柄？いいサーヴァント？」

と能天気にはしゃいでいる。

それにはモードレッド、額に血管を浮かべ手を振りかざし……

「ああ、そうだな…お手柄だよ……………」

「ふっふーん、どんなもんだい！「だがな…」ん？」

「勝手な行動すんじゃないねえ！」

その手を思いつき振り下ろした。

「あ痛あー！」

「…じ、ごう…じと、く…」

男衆はレタスに釘付け、何気にジークも初めて見るそのまんまのレタスに興味しんしんだ。

そんな和やかな空気を漂わせる中彼等を狙う影があった。

その獣は大きく飛び出た二本の牙、虎を思わせる風貌に大きな体毛は雪の様に真っ白で美しさすら覚える。

このモンスターの名は《中級者殺し》。その下位互換の様な立ち位置に《初心者殺し》というモンスターがいるがそれはとても賢く、冒険を始めたばかりの者は勿論ある程度以上の経験を積んだ者すらもその凶牙に陥る。レベルにもよるが序盤の街付近の者では上級職がいても勝ち目が薄いなんて事もよく起こっている。そしてコイツは《中級者殺し》下手をすれば一線級の冒険者ですら倒れかねない程の危険性を持つ。

この系統のモンスターはとても賢く狡猾だ。

おいしいモンスターを追い立て冒険者を誘い込んだり、自分よりも強い、または不利だと感じると一旦引いて体勢を整える知性を持つ。

当然、狙うべき相手も冷静に判断する。

中級者殺しが狙ったのは一党から少し離れた場所にいる少女。

防具らしき防具も纏っておらず、肌も露出している。手に持つ大槌<sup>メイ</sup>が唯一の懸念材料だが気付かれるよりも先に仕留める自信があった。

そう決めると少しずつ少女に近寄っていく中級者殺し。

あと20m……15m……まだ気付かれていない……10m……今だ!

いざと飛びかかる中級者殺し。恐るべき牙が少女の柔肌に吸い込まれるように向かう――

「ウウウ……」

――されどその牙が少女の肌を貫く事は無かった。勿論、途中で妨害などされてはいない。では何故か?

簡単だ。中級者殺し程度の力では英霊であるのフランの皮膚を切り裂くことすら出来なかった。ただそれだけの事。

その時、中級者殺しは野生の勘の様なもので思い知った。己の間には赤子と大人程も実力に開きがあると。

実際その考えは間違いではない。付け加えるならばサーヴァントには魔力のこもっていない攻撃は効果が無いのだ。……もともと、たとえ魔力が籠もっていたとしても尋常のものではかすり傷程度にしかならないのであろうが……

中級者殺しは敵わないと見るや踵を返して一目散に逃げようとする。が

「おいバー、フラン。お前からこイツに言ってやれよ……何だソイツ?サーベルタイガーか?」

魔剣を手にする叛逆の騎士が、

「まったく、ここには絶滅動物でも住んでるのか?にしては魔力を感じないが」

強面の死霊魔術師が、

「……」

不死身の竜殺しが、

「ほう……、幻想種でも魔力生命体でも無い、か。……面白い。どの程度が効くか、試させてもらおうかな」

最古の毒殺者が、

「ふむ、中級者殺しですか……やはり仕様が変化している様ですね。」

人類を救わんとした日ノ本の聖人○が周囲を取り囲んでいる。

一人一人でさえ勝ち目が無いのにそれに囲まれた。中級者殺しは

生存方法を必死に模索している。

さほど時間もかからずその方法は見つかった。

その方法とは――

「はっはっはっ、お前結構イカしてんじゃねえか」ワシヤワシヤ

「にや、にや〜…」

メツツツチャ甘えた！

絶対出さない様な甘えた声まで駆使して取り入った。

この作戦は幸いにも成功した。

然程脅威として見られていなかった事とフォームだけならばカツ  
コイイサーベルタイガーなのも功を制した。

絶滅した動物等は往々にして少年達の心を掴む。カツコ良ければ  
尚更だ。

これがガッツリモードレッドの少年心にビビつときたようである。  
強さはともかくとして見栄えはいいし、逆らう様子も無いのだから。

「なあマスター、コイツ飼ってもいいだろ？飼おうぜ！」

「…：はあ、仕方がない。飼ってもいいが世話はきちんとお前がすること、それと何かあつたらお前が責任をとる事が条件だ」

「分かってるって。サンキューな、マスター！」

(捨て犬を拾った子供とその親みたいだ…)

ジークがそう思うのも無理はない。というかこの世界では結構強い部類に入るモンスターなのに完全にペット感覚である。

この世界の冒険者が見れば目を疑うだろう。

「よし、お前の名前を決めてやる。…：う〜ん…サーベルタイガー、虎…：虎竹…：」

早速名付けを行うモードレッド。

「…：冬木の虎…：ギャグ…ライオン号…：いよし！決めた！お前の名前はタイガー号だ！」

どこかで聞いたことのある様なことを呟きながらも名前が決まっ

た。

「!!……すまない、モードレッド」

ジークフリードがモードレッドを連れて少し離れた木陰へと向かう。何かを話している様だ。

他の連中はそちらには目もくれずタイガー丸の様子を伺っている。

……あつ、セミラミス、毒の準備をするのはやめてあげてくれ、何だかすごくかわいそうだ。ほら、あんなに震えて、、

と、そうだった。セイバー達を追わなければ

気配を出来うる限り消して近づく。

何とか声が拾える位置に着き、耳を澄ます。

「!?!」

モードレッドが何かに驚く様な姿を見せる。

今度のはつきりと聞こえた。

「ツテメエー！何で知ってやがる!!」

焦燥した様な、怒っているような声音に思わず身を乗り出す。

「簡単だ。俺も——」

——転生者だからだ。」

つーやはり、彼は俺と同じだったか！それに俺もという言葉、そしてそ転生者であるということれを話すという事はつまり：モードレッドも——!!

確信に至ったその時、俺は注意を欠いてしまっていたのか枝を踏み音が鳴ってしまった。シマツタ！

「なくにくしてんだテメエー！」

案の定英霊である彼等が聞き逃す訳も無く、すぐに見つかった俺は捕まってしまった。

「で、何を聞いてやがった」

言葉の端から逃がさないという気迫を感じる。ここで選択を間違えたら間違いなく叩きのめされる！

と、取り敢えず落ち着いてやり過ぎさなければ、、

「お、俺は二人が転生者だなんて全然聞いてないぞ。」

……

「(ニコッ)」

「(ニ、ニコツ)」

「全部聞いてんじやねえか!!」

ドゴオツツツ!!!パイルドライバー

「(ニ、め”ん”!!)」

※この後、ジークは無事引き抜かれました。

## 邪竜の出立

「——で、お前も同じなのか？」

「ああ、俺も転生者というやつだ……と思う」

一応転生らしきものをしているので転生者だとは思いますが…実のところあまりよく分からない。

「何だよ思っつて」

不思議に思っつたのか訪ねてくる。

「いや、確かに前世のような記憶はあるがただの不良品で余計な記憶が鑄造途中に混ざっているだけかもしれないと思うとだな……」

そう、そこだ。ホムンクルスである俺達は造られた際に殆どの能力や人格が形成される。そして人の身である以上失敗が無いなどという事は無い。

この世界では第五次はもちろん第四次聖杯戦争さえ行われてはいなかった。それどころか大聖杯が冬木でなくユグドミレニアにあったのもこの記憶を疑う原因の一つだ。

「果たして自分は本当に転生者なのか？」

「そう思い込んでいるだけのホムンクルスでは無いのか？」

大戦時はそんな事を考える余裕は無かったが今になってみると疑問に思う。この記憶が本物であるという自身は正直、無い。

そえ考えていると

「何言っつてんだ、そんなもん自分で決めりゃあいいじゃねえかよ」

「え」

立て続けに

「お前はお前だろ？自分で勝手に決めときゃあいいんだよ。少なくともロクに戦わなかったそっちのマスターよりはマシだろうよ。転生者かどうかだあ？俺らと話してから判断しても十分だろ、それとも何か？転生者じゃなければ生きるのを諦めてんのか？お前はそんなタマじゃねえだろ！」

確かに、転生者かどうかにこだわり過ぎて大切なものを忘れていた。

もとよりこの身はホムンクルス、使い捨てられる筈の消耗品。そんな自分を助けてくれた人達がいる。嗚呼、悩んでいたのは自分だけだったのだ。自分を疑う事は自分を救ってくれた彼等を疑う事に等しい。そんなことは、したくない。

「おう、その顔だその顔。俺と互角に渡り合ったテメエがさつきみたいな顔してたら俺まで弱く見えるだろ」

「…ありがとう」

「おうよ」

「……………」

「……………」

気まずい沈黙が流れる。そこで俺は話を変えるべく自然に問いかける

「そ、そういえばな、何であなたはモードレッドが転生者だと言うことに気づいたんだ？」

だめだった。どうやらそういった事に関する対応力は低いらしい

だがそれでも彼は不思議そうな顔で  
「ん、冬木の虎やライオン号、これが続けて言ったのならばFate作品を知っているとばかりに思っていたが……………」

「いや、冬木の虎は知っているがライオン号とは……………」  
するとモードレッドは苦笑しながら

「あー、まあカニファンは知っても見てない奴もいるしな、仕方ねえだろ」

???何を言っているのか理解出来ない

「すまない、カニファンとは一体……………」  
するとモードレッドは怪訝そうに

「ああ？お前もその口ぶりからFateは知ってんだろ？もしかしてライト勢か？」

「いや、確かにFate作品は好きだったがカニファンについては聞いたことが無い。これでも色々調べてはいるのだが……………」

「……………ふーん、お前、アニメは何を見た？」

いくら転生者とはいえ円卓の騎士がアニメとか言ってるのは違和



感が………無い、な。何故だ？

いや、それよりも質問に答えなければ…。

アニメは何を見た？か………何を言っているんだ？だって、俺の記憶が確かならば、

「アニメはFateルートしかあっていないだろう？」

「む、ということはもしや…」

「やっつぱりそういう事か…」

二人は納得がいったとばかりに頷く。

な、何だその反応は、もしかして何かやらかしてしまっただのか………？

「すまない、俺には分からない。二人だけで納得していないで俺にも教えてくれないか」

「お前、聖杯大戦といえは？」

俺と彼が

「？それは俺達が体験したものでしょう？」

「ああ、と言つても俺は早々に退場したが…」

「いや、それは俺のせいで貴方が…」

「いや、あれは俺がそうしたいと思つたからで…」

「いや、俺が弱いばかりに…」

「俺こそ止められず…」

「でも貴方が心臓を…」

「いや俺が…」

「だがしかし…」

「だが俺が…」

「でも俺が…」

「俺が…」

「俺が…」

「うっせえ!! 黙れ! うざつたらしいんだよそれ! そして何でお前ジークフリートまで応えてんだ! 俺は、ジークコイツだけに聞いてたんだよ!」

その怒声に彼達は、

「すまない…」

どちらも同じタイミングで返していた。心臓とか関係なく元々本質も似ていたんじゃないかと思う。

「んで、そんな反応って事はFate/apocryphaは知らねえんだろ？」

「ああ」

またハモった。相性バツグンだなこの邪竜コンビ

「とりあえずの説明はしてやるが…お前らが死んだのは西暦何年だ？俺は19だ。」

「!!西暦19年!?!」

「んな訳あるか、2019に決まってるんだろ」

相変わらずジークは天然っぽい。元々こんな感じだったけど転生してからはより一層天然さが増している気がする。ひよつとしたら肉体に精神が引つ張られているのかも知れない。

ジークフリートが先に言った

「…俺は2014だ」

「……………」

ジークは応えず、どこかぼけつとした顔だ。

「どうした？まさか記憶がねえとは言わねえよな？」

「いや、まさか二人とも俺より後の時代の人だとは……………」

「じゃあ俺らん中じやお前が最初に死んじまったつう訳か…で、何年だ？」

「その…2008年だ」

そう、ジークが一部Fate作品を知らないのは無理も無い。何故なら彼が生きている間には世に出てすらいないのだから…

「ならしようがねえか。まあいい、今からおさらい代わりに今回の聖杯大戦を振り返りながら説明してやる。他の作品についても追々。まあ、時間経ちすぎて細かい所までは憶えてないがな。お前らの視点も時々いれてくれ」

「ああ」

「分かった」

「じゃあまずはこの聖杯大戦が始まった原因。全ての元凶第三次聖杯

戦争では正史では復讐者アヴェンジャーのサーヴァント『アンリ・マユ』を呼ぶはずだったアインツベルンは新たな反則を思いついた。それが裁定者ルーラーのサーヴァントを呼ぶ事だ。まあ新たな反則つつうよりはただ制御できる自身が無かつただけだが……。それで召喚されたのがあのクソ神父天草四郎だ。だが順調に進んでいた第三次聖杯戦争はダーニツクの手により奪取され、第三次聖杯戦争は幕を閉じた――

――まあこういう事だ。分かったか?」

モードレッドによる十分な説明があり、理解することが出来た二人。ついでに他の Fate シリーズについてもさわりだけは教えている。

「月が舞台?魔法少女??人理焼却??…駄目だ、スケールが大きすぎて俺には想像することも出来ない。…俺なんかいた所で無力だろう」

「何言ってるんだ、お前が大聖杯を持ってかなかつたら人類全員魂だけの存在になっちゃうとこだったんだぞ?もうちよいぐらい誇れよな」

「ああ、聞いた限りでは俺などよりもよほど活躍している。…俺が戦ったとしても赤のランサーに勝てる確率はかなり低かっただろう。他ならぬ君だからこそ勝ちえた勝利なのだと、俺は思う」

「…貴方程の英雄にそう言われると何だかむず痒いな…」

ジークは自己評価が低いが素直で褒め言葉に弱いのだ。目をそらしながら礼を言う。

「何だ、こんなとこにいたのか。モードレッドはコレ令呪があるからいいとしてもお前さんらは呼び出せないんだからな?」

「っ!ああ、すまない、迷惑をかけた」

突然現れた獅子劫に驚きつつも謝るジーク。どうやら今の話は聞かれていないようだ。その様子に訝しそうにしながらも言葉を続ける。

「そういえば、そのセイバー…ジークフリートの方だ。お前さんはマスターはどうなっているんだ？」

「「あ」」

よく見るとジークフリートの体から魔力の粒子が漏れ出している。

単独行動

「すまない。こんなに退場が早くて申し訳無い」

「待て待て待てっっ!!!」

その後、なんやかんやでジークと契約し、この世に留まることとなったジークフリートであった。

「とりあえずはここから移動して人がいるところまで行って情報収集だ。お前達もこれでいいか？」

「ああ」

「了解した」

「分かった」

三人とも同じ考えの様だ。

それから残りの四人と合流、

「おや、何を話していたんです?」

「テメエには関係ねえ!」

「まったく…そうやって直ぐに喧嘩腰になるのはやめとけて…:…準備はいいか?じゃあ出発するぞ」

「おう!」「ああ」「アアーツ!」

彼等はこの素晴らしい世界での一步目を踏み出したのだ!

「ところで何故貴方<sup>獅子劫界離</sup>が仕切っているのですか?」

…:…踏み出したのだ…:

なおマスターへの配慮からか獅子劫はモードレッドに言われ中級者殺しの上に、アストルフオもジークと共にヒポグリフに乗ろうとしたが魔力消費とジークが歩きたかったのも合わせて却下された。

…それから4時間後…

「なあ、まだ何も着かねえのかよー。俺腹減ってきたぜ」

「うう～ますた～僕もう飽きちやったよ～」

かなり遠くに大きな街が見えるがもう日は沈みかけている。

ここまでに山を五つ程越えているため距離以上に時間がかかってしまっていた。その間、特に何も無かったため比較的飽きっぽい二人がとうとう完全に飽きてしまったのである。英霊の足ならばもつと速かったが人間である獅子劫（中級者殺し）に合わせているのでどうしても遅くなってしまう。（なおこの世界の基準だと徒歩で二日はかかってしまう距離なので十分早い）

「仕方がないだろうライダー、ここにはどのような危険があるかも分からないのだから」

ジークは自身のサーヴァントであるアストルフォを宥めるが

「貴様らには堪え性も無いのか？よくそれで騎士を名乗れたものだ」

それとは逆にセミラミスは挑発を投げかけそれに反発したモードレッドが噛み付く。

「クツソーッ！俺にやられた分際の癖に～っ！」

「戯け、其処なマスターがヒュドラの毒で血清を作ったお陰であろう。あれさえ無ければ我がお前に遅れをとることなど無かったであろうよ」

その通りだ。毒がまわったあの状態では令呪を持ってしても辿り着くより先に力尽きていたであろう。その事を理解しているのか

モードレッドはより顔を赤くする

「～っっ！！普通に戦ったら俺の圧勝だからな！圧・勝！」

「はいはい、俺のサーヴァントが強いのは分かったから静かにしてくれ」

獅子劫がしんどそうに言い放つ。

「んなっ!?マスターは何とも思わねえのかよ！」

「あのなあ…最優のセイバー、しかもお前程の腕となるとまともな条件で勝てるアサシンやキャスターはいないっての」

「……お、おう。…ありがとな」

「ほう？いつも自慢してたのに褒めるとそれか？」

「う、うるせえ！マスターがいきなり～っっ!!」

次の瞬間、突如ある一点を睨みつけるモードレッド。

「?どうした?モードレッド?」

「けっ、どうやらお客さんのようだな」

視線の先には緑色の甲殻を持った一匹のドラゴンがこちらに向かつて飛んできている。彼等の世界でもポピュラーに知られ、ほぼ例外なく恐ろしい戦闘力を発揮する。これを討ち倒した者には果てしない財宝と名声を手に入れる事が出来ると言われる最大級のモンスター。

彼等は知らないがこのドラゴンは『グリーンドラゴン』という。素の強さは平均的で特殊な能力などは持っていない。だがドラゴンに変わりではなく安全マージンをとって相手どるには最低でも30レベル後半の冒険者パーテイー（基本的に3〜5人）が4つ程、紅魔族ならば戦闘に慣れている者でも6、7人は必要なほどである。

「マスター!後ろに下がれ!!」

「まったく……ここが本当はあの世とかじゃあねえよな……?」

「相手が竜ならば俺がゆこう」

さがりながらそう悪態をつく獅子却と構えるジークフリート。

「いや、相手は竜種。万全の体勢でいこう」

「ええ、彼の言う通り。全員でかかるべきかと」

その声に全員が戦闘態勢をとる。

流星にこの状況でいがみ合う程ではないようだった。

「まず俺が注意を引きつける。そのスキに叩き込んでくれ」

緊迫した空気が流れ始め、中級者殺しは圧倒的な強者を前に全身の毛が逆立つ。

そしてようやく、

「グルルアアアアアアアツツツ!!!」

一匹の竜が舞い降りた。

「よし、作戦通りにいくぞー!」

ジークは己の腕の魔術回路に魔力を十分に満たし竜の腹に当てる。そこから放たれるは手で触れた物体の組成を瞬時に解析し、魔力を変質・同調させ、最適な破壊を行うアインツベルンの錬金術を元とし

た強力な攻撃魔術。

その起動式は、

『『シフトラセンゲイエン 理導／開通』!!』

稲妻のような不規則な魔力光を発しながらその魔術が炸裂する。

もちろんこの程度で倒れる竜種では無い。

すぐさま退がり、ジークフリートとモードレッドが前に出る。

いかに龍種といえど一級のセイバー二人がかりではやすやすと突破は出来ない。

だがその予想は裏切られる。……最も、悪い意味では無いのだが：一同の前には死に体のドラゴンが倒れていた。辛うじて息はあるようだが長くはもたないであろう事は明白だ。念の為警戒を解かずに見つめても何かをする様子は無い。

おもむろにモードレッドが近づき剣を構え振り下ろす。

それはあつさりと竜の首を切り落とし、

「おら、勝ったぞ」

その光景には思わずあのセミラミスまでもが唾然としてしまう。

強力な敵かと思いきや牽制目的で放たれた魔術で死にかけるのだから拍子抜けもいとこだろう。

「よ、よし。障害は倒したしあの街に行くか！」

獅子劫が切り替え先に進むよう促す。

「しかしこの死体はどうしましょう？この地での竜の扱いが分からない以上放置が望ましいですが…どうでしょうセミラミス。貴女から見てこれは…」

天草四郎がアサシンでありながらもキャスターの役割もあわせ持つセミラミスに問をかける。

「ふむ、現代の魔獣と比べると確かに強力だがこちらの竜種程でも無い、せいぜいが子供の魔猪とはりあえるか…といった程度だ。甲殻も脆すぎる。これならば赤のバーサーカーの一撃でひしゃげ、押しつぶされるだろうよ」

その言葉には隠しきれない呆れが混じっている。

それを聞いた後、ジークフリートが提案する。

「一度あの街へ着いてから事情を話し翌朝に再度持ち帰ればいいのでは無いか？」

「それだ！」

獅子劫とジークの言葉が被る。

「では腐らない様に保存を」

そう言うとき天草四郎は両腕をグリーンドラゴンの死骸へとあてる。すると右腕は赤黒い燐光を、左腕は青白い燐光を放ち始める。

それこそが天草四郎の宝具、『右腕・悪逆捕食』と『左腕・天恵基盤』である。  
レフトハンド：キサナドゥマトリクス

いくつかの効果があるが今回使うのはその内の一つ、世界の魔術基盤に接続しほぼすべての魔術を扱うことができる。条件が必要な物などはその条件を揃えなければ発動不能だがこの世界へと来てからこちらでも少し変化している。

『カースド・クリスタルプリズン』

この通り、この世界の魔法をも扱う事が出来る。みるみるうちにドラゴンの体は凍り大きな氷像と化した。

「では行きましようか」

「天草四郎、今のは？」

「どうやらこの地での魔術の様です。以前まではあのような術は存在していません。それもあのようなものはいくつも。これは仮定なのです…ここは我々の知る世界ではないのかも知れませんね」

その仮定に魔術師である3人は多少訝しんだがここまでの事から否定することも出来ない。

「まあそのことは街の中で相談しましょう」

そう言い残し歩きだした。

「やっと着いた…」

既に空は真つ暗で星が輝いている。

街の周辺には大きな壁が囲うように建っていてそれぞれに通行可能な門がある。どうやらまだ開いているようだ。

立っている中年の門番に獅子劫は話しかける



「あー、つと俺達はかなり遠い所から旅をしてきたんだがこの街を知らないんだ。出来れば泊まる場所や飲み食いできる所を教えてください」  
すると門番はぎこちない笑顔で（獅子刼の顔にビビっていたが、何とか取り繕った）

「なんだ、ここは初めてか？ようこそ、駆け出しの街アクセルへ！飯を食いたいならその角を曲がった所の食堂なら安い。冒険者ギルドもあるが今頃は埋まってるだろうよ。泊まりたいんなら……なあ、何エリスくらい持つてる？」

「エリス？」

「何言ってるんだ、金だよ金。」

「どうやらここでの通貨はエリスという名前らしい。」

しかしながらモチロンそのような通貨は持っていない。獅子刼界離は緊急時用の宝石をいくつか取り出し、

「悪いが今は持ち合わせが無いんでコレでも大丈夫か？」

しばらくポカンとしていた門番だったが

「…あ、悪い。そんだけありやあ十分すぎると思うぜ」

「そうか、ありがとな」

そのまま通過する一同。ようやく最初の目標である人の住む街に辿り着く事が出来たのだった。

「何だいあの集団は……」

残された門番はひとりごちる。

「あのオッサンは厳しかったが他が綺麗所過ぎる……」

そう、皆が皆かなりの美系。驚くのも無理はない。だがそれよりも門番の男には気になった部分がある。

「それにしても……」

あの兄ちゃん、背中を晒すなんて、体は大丈夫なのかねえ……  
人知れずジークフリートの身を案ずる門番の男であった…。

## 最初の一步

門を越えた一行は食事を済ませ現在は別れている。

ジーク達は渡された金の節約の為に馬小屋に、

天草四郎とセミラミスはある金で宿泊出来る最も高い宿に、

そして獅子劫達はというと――

「おいマスター！聖杯戦争中でも無いのにこんなところで寝なくてもいいだろ！」

ここはアクセルの街から外れた丘の上の共同墓地。身寄りの無い者や金を払えない者等が主に纏めて埋葬される墓地だ。この世界の埋葬方法は当然土葬である。そのまんま土に埋めるだけで死体はそのままだ。

「しようがないだろ、金がどの位稼げるかは分からなかったんだからよお。挙げ句宿は天草とセミラミスアイツ等で満室なんだからよ」

その墓地の中で煙草を吸いながら言う獅子劫にモードレッドが食いかかる。

「だからって墓地はねえだろ！全く、こんな陰気臭い所に住むなんて正気を疑うぜ」

「はっはっは、俺は魔術使いだが魔術師相手に正気を語るか。それによ、俺はここがいいんだよ。前にも言ったろ？死体と過ごした少年時代、ってな」

「：別に馬小屋でもよかつただろ」

「おう、行きたいならお前一人で行ってこい。ここの死体はほつとかれてるやつだからな、使っても文句は言われん」

そう、この墓地を選んだ理由は死霊魔術師である獅子劫の礼装作りの為だ。彼は様々な動物や人間の死体を使い己の武器を製造する。その性能はいずれも折り紙つきで強力にして凶悪、死霊魔術師は数いれどどこまで戦闘に特化した死霊魔術師は彼くらいのものである。

「というか王サマが馬小屋なんかで寝ていいのかあ？」

「墓地の方が駄目だろ！それによ、生前は馬に乗ってたからな、久々に

見てみたいっていうかよ…」

頬を掻きながら言うモードレッドに思わず吸っていた煙草を落とす。唾然とした表情で見つめる獅子劫。

「な、何だよ？」

「いや、まさかお前さんがそんなことを言うとは…」

「……別にいいだろ」

このモードレッドは転生者。本来のモードレッドよりもそういったことを懐かしむ気持ちがあるのかも知れない。

「で、行きたいんなら行ってきてもいいぞ？」

「つつてもよ、マスターの守りはどうすんだ？さつきみたいなのが無いとは言えねえぞ？」

「安心しろ。そこいらの奴にやられるほど俺は弱くはねえよ。それに、いざとなったらコイツが「タイガー号だ」：タイガー号を使って逃げるさ。局面が見えないようじゃあフリーランスの魔術使いは出来ねえよ」

「…まあそうか。……だけどよ、俺の直感では何か変な感じがするんだけどよ…」

「だから大丈夫だって言ってるだろ？それともお前のマスターはそんなに弱い奴だったってか？」

「…おう、一応気をつけるよマスター。じゃ、行ってくる！」

そう言うや否や夜の墓地を飛び出したモードレッド。

あつという間に気配が遠ざかっていき出発して間もないというのに馬小屋についたようだ。その活発な姿には眩しさを感じずにはいられなかった。

「ま、英雄ってのはそんならいなきやなれないモンなのかもな」

煙を吐きニヒルに笑いゆつくりと立ち上がり懐のショットガンを手に取り構える。外では既にタイガー号が辺りを警戒している。

「さて、鬼が出るか蛇がでるか」

素晴らしい墓地の中心地に目を向ける。少し離れた場所では死体が墓地から這い出し動き始めている。こちらには一切目もくれず中心地へと向かっている様だ。

(こりやあ何かあるな……。どうにも動死体<sup>ソンビ</sup>っぽいがかつちに気づく様子もなし……。まるで引き寄せられている様だが俺<sup>死霊魔術師</sup>と同じか？？？……：……意図的であれどうであれ放っておく訳にもいかねえなこれは……。まったく、先にコツチを片付けてからいかせりやあよかつたな)

放っておく事が出来ないのはここが街はずれとはいえ壁の内側であり万が一にも住民が襲われかねないと思つたからである。

獅子劫は動死体の目指す中心地へと向かう。少し進むと青白い光が見えてきた。それは暗く不気味な墓地を照らすものの安心できる暖かな光ではなく妖しくも幻想的な光。辺りには他の方向からも現れたと思われる動死体達が蠢いている。だが獅子劫にはそれよりも気になる点があつた。

(何て魔力だ……!!こりやあ超一流の魔術師、いやそれ以上か……!?)

思わず額に汗が浮かぶ。獅子劫もモードレッドが遠慮なしで戦いながらも自らが戦闘を行える程の魔力を持っており十分に多いのだが今回この魔術を扱っているものはそれすらを超えている。

(ちつ、厄介な事になりやがつた……!)

件の術者はこちらに気づいている様子はなく背中を向けている。もちろんこれが畏である可能性は捨てきれないが今までの経験からか仕掛けるならば今だと感じた。これから起こるかも知れない戦闘に備え万が一にも一般人が巻き込まれてしまうような事が無い様に懐から屍蟻化した魔猿の手を使い辺りに人払いの結界をはりしつかりと弾を込めた事を可能な限り気配を消し背後に回る。ある程度近づいたところでこれが死者を扱うものではなくどちらかといえば浄化に近いものであることに気づく、が感じる魔力は魔性に近いものであり動死体が発生していることから油断はしない。

とうとう完全に背後に立ったが気づく様子は無い。

(……まで近づかれて普通気づかないか?)

正体が不明ながらもあまりの気づかなさに逆に心配になる。

獅子劫はショットガンを相手の後頭部に突きつける。

「おい、止まれ。両手を上に上げて頭の後ろで組め。何もするな。怪しい動き、詠唱や魔力を使ったら即座に撃つ。そうしたほうがあんな

の為だ。あんたは何者だ？何が目的でこんなところにいやる」  
その警告に術者は両手を上げ振り返る――

時は進んで翌日、

「さて、では先日聞いた『冒険者ギルド』とやらへ行ってみよう」

起床したジーク達はモードレッドを迎えに来た獅子劫と合流し冒険者ギルドに出発する。

アストルフオがなかなか起きずに拳骨で叩き起こされたりジークから感じる竜の気配に馬が暴れる騒動があつたがそこは割愛する。

「さあさあっ！早く早くマスターっ！のんびりしていると置いてっちやうぞー！」

「まったく……あいつは朝からやけに元気だな……」

「ああ、でもそこがライダーの良いところだ」

元気なのはいいが遅れた原因になった者のセリフではない。

「まあ結構無謀だな」

「む、いくらモードレッドといえど彼の悪口は許さないぞ。勇気があると言ってくれ」

「はいはい。悪かったよ」

そんな会話も程々にこの街を眺め始める。

外観や生活風景は殆ど中世と類似しているのでモードレッドやジークフリートには懐かしく感じられている。

「ところで獅子劫。やっぱり冒険者ギルドで冒険者登録をしておいたほうがいいのか？」

「ああ、しておいた方がメリットがデカイ。殆どは討伐とかで金を稼げるし何かするにしてもこつちの方が都合がいい。招集こそされることはあれど職業である以上仕方ない。それに、俺らみたいな身分も分からない余所者でもなれるからな」

その他にも冒険者になる事に対するメリットを話し歩くこと暫く、  
「どうやら着いた様だぜ」

目の前には冒険者ギルドと銘された建物があつた。中に入ると数は然程多くはないけれど様々な人がいてこちらにも好奇の視線や下

心の含む目線が刺さった。当たり前だ、こんな個性的な服装と美しい顔立ちの集団なのだから。しかしそれも獅子刼と目を合わせると慌てて目をそらしたことで終わった。

「すげえなマスター、一瞬で視線が消えたぞ」

「こんなことで褒められても嬉しくねえよ…」

少し気にしている顔の事を言われ少しへこむ。

そんな中、なにやらコソコソと話をする四人組がいる。

（お、おいダスト！流石にあればマズイって）

（うるせー！いいか？あんなん見掛け倒しだ。冒険者として名の知れる俺には敵わねえよ。あの見た目だからよ、肩をぶつけられて折れたって言っても皆信じるぜ絶対。そしてそれを大勢に見られたアイツは払うしか無くなるって訳だ。それに防具なんて着てねえだろ？俺の見立てでは今日冒険者登録しに来た力モに違いない）

会話の内容は金髪の男がカツアゲしようとしているのを止めようとしている様だった。他の二人も

（止めときなつてダスト。あの見た目だよ！絶対何かあるって！）

（へっ！何言つてやがるリン、そんなんじや相手の掌の上だろ！）

（もういい、俺は止めたからなダスト）

と反対の様だがダストと呼ばれた男はやるつもりらしい。

（全部聞こえてるんだがなあ…：どれ、少し脅かしてやるか）

だがコソコソ話は全て筒抜けだった。もちろん全員に、である。

するとダストはこちらへ向かってきてすれ違いざまに肩をぶつけ大袈裟に倒れた。

「うぎゃあ！痛つてえっ！クツソ痛え！駄目だこれ、完全に折れてるわ。オイおっさん！イテッ！おっさんのせいで肩折れちまったじゃねえかよ！慰謝料として百万エリスを…」

途端、ダストの視線がある位置で固定されセリフが中断される。その原因はダストの目の前に落ちているものが原因であった。

それは獅子刼の指弾が3発分、ダストにしか見えない位置に落ちている。これらは全て人間の指で作られたものであった。

「おっさん、そいつは…」

すると機敏な動きで飛び起き人が変わった様に警戒する。

それはさながら歴戦の戦士のようで先程までカツアゲしようとしていた人物には見えない。

「すまんね、冗談だよ冗談」

指弾を拾い上げ謝る獅子却。まだ訝しげな顔をしていたが納得したららしく雰囲気がおちやらかしたものに戻る。

「あれ、痛くねえ。やっぱり感謝料いらねえわ」

素晴らしい仲間のもとへ引き返すダスト。仲間に火の玉を食らわせられ気絶している。先程の気迫が嘘のようだった。

「おいマスター」

「ああ、ありや作ってるな。しかも中々の技巧派だな。この中じゃあダントツで巧い。しかしミスったな、異世界（仮）だから大丈夫かとおもったがこつちでも死霊魔術は嫌われるらしい」

「逆にんなもんが喜ばれるのが当たり前前の世界なんて気持ち悪いっての」

「違くない」

ダストについての予想を言い合い推測する主従。

ジークは辺りを見渡していると奥にいた天草四郎とセミラミスに声をかけられた。

「遅かったですね」

「ああ、すまない少しトラブルがあつてだな…」

「まあいいです。では冒険者登録をしましょうか」

何故離れていた天草達も知っているかという獅子却が昨日の夜のうちに念話で全員に連絡をとったからだ。合流した一行は早めに冒険者登録をしておこうと提案し人数が人数の為別れて（赤陣営と黒陣営）カウンターに並ぶ。今は朝といっても中途半端な時間、ギルド内の人は少なくはないけれど決して多くもない為直ぐに順番は回ってきた。受付の人はウェーブのかかった金髪の美人さんだ。最初に登録する順番はアストルフオ、フランケンシュタイン、ジークフリートと続き最後にジークの順に並んでいる。

「はい、どうぞー。今日はどうされましたか？」

「こんにちわー！……じゃなかったおはようございませう！えっと、僕たち冒険者登録っていうのをしにきたんだけどここであつてるの？」

「そ、そうですか。では登録手数料としてお一人千エリス頂きます」「はいコレー」

どうやら一エリスにつき日本円で言うところの一元になっているようだ。これは元日本人であるジークには嬉しい誤算であった。四人分の登録料である四千エリスをアストルフオが支払う。

「では、冒険者になりたいと仰るのですから、ある程度理解されているとは思いますが改めて簡単な説明を。：冒険者とは街の外等に生息するモンスター、人に害を与えるもの等の討伐を請け負う人の事です。とはいえ、基本はなんでも屋みたいなものです。：冒険者とはそれらの仕事を生業にしている人達の総称。そして、冒険者には各職業というものがございます」

テキパキと説明していく受付のお姉さんはカードのようなものを差し出した。免許証ほどの大きさのそれを持ち受付のお姉さんは続ける。レベルやスキルの事などについて説明を受けてジークとジークフリートはゲームの様だと舌を巻いている。

「まずはお二人ずつこちらの書類に身長、体重、年齢、身体的特徴の記入をお願いします」

そう言われアストルフオとフランが記入していく。その際にジーク達はこの地の文字は書けるのかと疑問に思ったが何か不思議な力が働いているのか特に難なく書き上げることが出来た。

「はい、結構です。……あの、すいません。お二人とも年齢を記入されていないのですが……」

困惑する受付のお姉さんに二人は悪びれもなく

「忘れちゃった♪」

「……し、ら、ない……」

「え、えーっと……ではそれでいいです……」

その言葉により困惑するがお姉さんが根負けして話を進める。

「ではこのカードに触れてください。それであなた方のステータスが



分かりますので、その数値に応じてなりたい職業を選んでくださいね。経験を積む事により、選んだ職業によって様々な専用スキルを習得するになりますので、その辺りも踏まえて職業を選んでください」「触るだけで？魔力を流したりはしないのか？」

「はい、触るだけで大丈夫ですよ」

一体どのような原理が働いているのか気になったが本当に異世界ならばそんなこともあるのだろうか。

「……はい、ありがとうございます。アストルフオさん、ですね………はっ!?はあああっ!?何ですかこの数値!?知力はもやが  
かっているので分かりませんが全ステータスがぶっ飛んで高いですよ!魔力も紅魔族かそれ以上に高く、特に敏捷性に至っては今まで見た事がない位高いって…あ、幸運値も非常に高いですね………二週間前と引き続きこんな数値…何なんですか一体!?!」

その声にギルド内がざわめきだす

「何?僕がすごいってこと?」

「すごい何てもものじゃありませんよ!これなら知力が分からない以上魔法使い職は分かりませんがほぼ全ての上級職に…「アア!…」あ、も、申し訳ありませんえつと、フランさん……」

アストルフオに詰め寄り興奮した様子で話すお姉さんに自分の分がまだだと主張するフラン。お姉さんは謝りフランのカードを見ると停止してしまった。

「…え、えええええっ!?こ、こっちも全ステータスがぶっ飛んで高い…!?敏捷性こそアストルフオさんより低いものの筋力が高くて耐久は尋常じゃない……な、何なんですかあなた達!?!はっ!?!」

まさかこっちの二人までこんなじゃないのかという目で見てくる。やめてくれ、その目は俺に効く。

隣のカウンターでも似たような悲鳴が上がっている。流石のこれには冒険者たちも言葉を失い驚きの視線でこちらを眺めている。

「そ、それでは後のお二人も…き、記入してください!?!」

声の震えが止まらないまま記入をすすめる受付のお姉さん。

「大丈夫か?一度呼吸を落ち着けるといい」

ジークフリートの気遣いに甘える受付のお姉さん。

「ふう…す、すみませんでした…。(はっ！気遣いができて長身のイケメン!?誠実そうだし何とかワンチャン…!)」

この受付のお姉さん、名をルナといい同僚や後輩に相手が出来ているのに自分には一向にそういう相手ができないことに内心焦っているいわば行き遅れ一歩手前の悲しい女性だった。(原因が冒険者側にも多々ある)

「すまない、これでいいのだろうか？」

「はい、ありがとうございます。…あなたもですか…0歳なんて冗談はよしてください」

「いや、これは本当の…」はい本当のことですよねそうですとも「むう…」

絶対に信じていないぞこれ

「では触れてください。もうどんな数値出てきても驚きませんよ」

なにやら諦めと覚悟が混ざった視線を向けてくる。いくら英霊がすごいとはいえそこまでか…

「はい、ジークさん…あつ、良かった。意外と普通…いや、さつきのと比べるとつってだけで全然普通じゃないどころか桁外れに高いんですけどね…」

先程の英雄二人のせいで価値観が少しおかしくなってしまったルナさん。可愛そうに…。

「最後はジークフリートさん…キユウ」ボタンツ！

「う、受付のお姉さん!!」

隣のカウンターでも似たような光景が広がっていた。

・

「も、申し訳ありませんでした。えっとジークフリートさんはその…失礼ですが本当に人間ですか？他の方々も十分高すぎるステータスなのですがその中でもあなたは特に秀でたステータスを持ってらっしゃるので…幸運が低い以外はおかしいですよコレ。他のものと比べると知力や魔力が見劣りしますがアストルフオさん達よりも高いですし…敏捷性はアストルフオさんと同等、筋力、耐久力生命力な

なんて化け物じみてて正直今も夢なんじゃないかと思っています」

「それは、褒められているのか？」

あんまりな言い方に微妙な表情を見せる。

「は、はい。では職業をお選びください。正直あなた方ならどんな職業にもなれるんですけどね……おや？何ですかこの職業……？騎乗者ライダーに狂戦士バーサーカーに剣士セイバー……見た事も聞いたことありませんね……なんとなくの予想はつきませんがどれも未知の職業ですよ」

「ではセイバーで頼む」

「僕はライダー！」

「ばー、さーかー……」

「本当によろしいのですか？未知の職業ということで私どもからのアドバイスが難しいのですが……」

「大丈夫だ。俺達には馴染み深いものだ」

ジークフリート達の職業が決まったがジークは未だに悩んでいる。

「あの、どうするのですか？」

「すまない、決めなければいけないのは分かっているがどうにもな……」

「あの、秀でたステータスを活かすのならばアークウィザードがオススメですが……」

その言葉にもまだ悩む様子を見せる。そこへアストルフオが

「マスター！君は君なんだから君がやりたいのをやればいいのさ！僕みたいなね！折角の二回目なんだから思いっきり楽しまないと！」

と深いようでけっこう浅い言葉でジークの背中を押す

「俺のやりたいこと……マスター、か……分かった。俺はそのアークウィザードを選ぶ」

「アークウィザードですね！習得の難しい強力な魔法を操りトップクラスの火力を誇る攻撃職ですよ……アークウィザードつと、……正直驚きましたがあなた達程のステータスの方がいらっしやるのはギルドとしても喜ばしいです。」

「……遅れましたが冒険者ギルドへようこそ！あなた方の今後の活躍を期待しています！」

そう言って受付のお姉さんはにこやかな笑顔を浮かべた。

周囲の冒険者達もこの評価にはかなり驚いているようで「アンタら  
すげえな」やら「こんな新人があらわれるとは…」やらで沸いている。  
「おいおい、こっちの奴らもヤベエのぼつかだぞー!」

その言葉に隣のカウンターに並んでいるモードレッド達にも注目が集まる。

「こんな奴らがいつぺんに登録するなんて…魔王討伐もこいつ等なら  
夢じゃないかもしれんな…」

何やら気になるワードが飛び出してきたがあまりの喧騒にそれどころではなかった。

「そんじやお前ら、寄るところがあるからここを出るぞ。昨日伝えられなかった事をそこで話す」

そう言われ退出する一同。短い時間だったがそれでも冒険者達の話題には事足りたようでガヤガヤと一同について話し出す。

ただしルナさんは問題児などに慣れているためまだダメージは少なかったがもう一つのカウンターのお姉さんはあまりの驚きと獅子劫の顔の怖さによってかなり神経をすり減らしたのであった。

同日、夜

何やら大変疲れた様子でギルドへ入ってきた二人組がいた。

「あく疲れた。あ、お姉さくん俺ジャイアントトートの唐揚げで」  
「私はスモークリザードのハンバーグで!」

うち一人は茶髪の特に特徴もない中背の少年。そしてもう一人は青髪の見目麗しい少女。

料理の待ち時間に冒険者達の会話が彼らの耳に入る。それは朝方に訪れたジーク達一行のことであった。

「いや、にしても朝の集団はえらくすごかったな」

「ああ、あの集団か、ありやアステータスもすげえうえに美系ばつかったからなあ。あ、あとかなり特徴的な服装だったな」

「少なくともここらへんじゃあ無いよな」

(ステータスがすごくておかしな服装?…それってもしかして…)

少年が噂話を聞き考えていると

「ちよつとカズマさくくん、何ブツブツ言ってるのよ。そのお酒飲まないんなら私がおもうわよ?」

「やるかバカ、これは俺んだ。…いや、さっきあの人達が話してたのっでもしかして日本からの転生者かもって思ってたな…もしそうならチート持ちだから強いと思うし同郷のよしみで協力してもらえるかもだろ?」

「確かにそうね! ヒキニートにしては考えてるじゃない!」

「ヒキニートは余計だ、引きこもりとニートを一緒にすんな。つてかこんなん誰でも考えつくだろ」

「何よーっ! 私の頭が悪いっていうの!」

「実際悪いだろ? 知力も最低レベルだし」

わなわなと震え怒りを顔にする少女。

「いくらなんでももう許さないわよ!」

素晴らしい少年に飛びかかる。飛びかかれた少年は必死の形相で抵抗する。

「バカッ! やめろコラッ、お前ステータスは高いんだからな! アイダタタタッ!」

そんな光景があつたそうなの…。

初スキル習得く不死王を添えてく

冒険者ギルドを出た一同はアクセルの街を進んでいたがその歩みは遅々としたものであった。

それは昨日によく見れなかったことやまだ歩き慣れていないことも理由の一つではある。が、大体の原因はアホの子アストルフォにあったりする。くそれは獅子刼が手に持つメモを見ているときく

「む、ライダーは？」

「おにいさん！このサンマ三つ下さいな！」

「あいよ！嬢ちゃんかわいいから一つまけてやるよ」

「やったあ！ありがとねオジサン！マスターーツ！これ一緒に食べよう！」

「ライダー、勝手に金を使わないでくれ！」

勝手に物を買ったり（サンマは黒の陣営で美味しく頂きました）

く畑に生えていたサンマを二度見した時く

「お姉さん何食べてるの？」

「ムグムグ、コレを食べる姿を見られたからには、責任をとってこの書類にサインを頂かなければ……あら、意外とかわいい……やっぱお姉さんと一緒に行かない？あとこの書類入信書にもサインを……」

「うくん、、する！」「結構です!!」

怪しげな宗教勧誘に乗りかけたリ

く街の人に道を訪ねている時く

「ちよつと行ってくる！」

「待つ、いや何処へだ！」

「捕まえた！」

「にやゝ、にやあゝゝ」

「猫なんか拾ってくんじゃ…いや、何だソレ…？」

「ジヨツキに入った謎生物ネロイドを捕まえてきたりー

「警察のような人に獅子劫が職質をさされているとき」

「何このお店！」

「きやあ!？」

「す、すまない、直ぐに出ていく」

とある店に突撃もした。

アストルフオを連れて店を出ていこうとしたジークだがふと気づく。

(…そこらじゅうの道具から魔力を感じる…)

「これ、いや、ここは？」

その言葉に困惑していたこの店の店員らしき女性が応える。見かけはおっとりとした美人だが、よく注意していると何か違和感を感じる。

「は、はい。ウイズ魔道具店へようこそ」

「魔道具…？礼装やポーションでは無いのか？」

「えっと、れいそう、というのは分かりませんがポーションなら売っていますよ」

ますます気になり問を掛けようとしたその時、獅子劫達が入店してきた。

「どうした？アストルフオは捕まえたのか？つて、ん？」

「あ、き、来てくれたんですねカイリさん！」

「どうやら獅子劫はこの女性と知り合いらしい。こちらには何も言わずにそのまま談笑を続ける。」

「なんでまた…いや、ここがウイズの店か。まさか偶々でつくとはな…」

「あ、あれ？地図を見て来てくれたんじゃないんですか？」

「いや、コッチに来たばつだから、何処がどうなっているかとかが分かりづらくてな…」

「す、すみません。来たばかりだということを配慮していませんでした…」

「いや、そういうのはいい、後ろにいるのが仲間？だ」

「仲間？」

「いや、気にしないでくれ」

「はあ…」

　　またもや困惑する女性

　　すると黙っていたモードレッドが獅子刼の前に出て

「で？テメエ人間じゃねえだろ？」

　　クラレントを突きつけ威嚇するモードレッド。アストルフオとジークは気が付かなかったが、他の仲間は薄々と感じていたのだ。その証拠に、一見何もしていない様に見えるが直ぐに戦闘態勢に移れるようにしてある。驚くのは違和感を感じつつも経験が浅くて見抜く事が出来なかったジーク。

（何と——！感じていた違和感はそのせいだったのか！）

「あ、いや、あの〜」

　　空気は一触即発。何かをきっかけにここが戦場になっても可笑しくない。

「待て待て待て！用があるってのはこのコイツに、だ。あと剣も納めてくれ。信用は出来る」

　　なんとか剣呑な空気は抑えられ、落ち着く為に椅子に座る。

　　最初からあまり警戒していなかった天草四郎はひとしきり眺め、女性の正体にあたりをつける。

「ふむ、人外の気配だが、魔獣や悪魔ではなくゾンビ系統が一番近いですかね？」

「は、はい。一応その系統です。種族はリッチーで、ノーライフキング、なんて呼ばれています」

　　その大層な呼び方は、目の前のおっとりとして何処か抜けているよ



うな人物には酷く似合わないものだなと思った。

「それで？ゾンビのどこに来てまで何をすってんだ？」

「あの、ゾンビではなくてリッチー……」

「ふむ、我の知るゾンビはもつと悍しく醜かったのだが」

「一応最上位のアンデッドですので。後、ゾンビではなく……」

「ああ、このゾンビの嬢ちゃんにここの事をご教授して貰える事になっただよ」

「カ、カイリさんまで……」

ゾンビゾンビと言い続けられ、若干涙目になる。

「悪い悪い、反応が面白くてな……。さて、こちらロクにモノを知らない俺達に情報を提供して下さいさる親切なゾンビ「リッチーです！」リッチーのウイズだ」

つまりそういうことである。現地民にこちらの事情を教えて貰おうという、異世界モノならば比較的ありふれた手を使った様だ。

「はい。この『ウイズ魔道具店』の店長をしているウイズと言います。カイリさんに頼まれて皆さんに冒険者の事等を教えることになりました。これでも元冒険者だったので、それなりの事までは答えられますよ。よろしくお願いしますね」

それに応じてこちらも簡単に自己紹介をする。一名は真名ではなくクラス名だったが：

さらに地球でピュラーな地名や国を聞いてみたが、ほぼほぼ分からない様で、再度異世界だと認識させられた。

因みにここに至るまで僅か五分程しか経っていない。

「では何か分からない事などはありませんか？」

ジークが手を上げ質問する。

「では俺から、ギルドでも言っていたがスキルポイントというのは、その、どのように扱えばいいんだ？」

その疑問に一部がうんうんと頷き同意する。ギルドで一応の説明を受けたとは言え主な概要だけであり、魔力とも違うためどのようなものが捉えづらく、使い方などは分からなかったのだ。

「すみません、冒険者カードを見せてもらっても良いですか？」

「この事だろう?」

「はい、それであつてます。あ、大丈夫ですよ。勝手にいじったりはしませんから、では……かなり高いステータスですね。私が勝っているのは……魔力だけ……。今はリッチーとはいえ元冒険者としては少し複雑ですね……」

「ま、俺らはもつと凄いいけどな!」

自信満々にしたり顔で言い切るモードレッド。隠しきれないというか隠していない完全なドヤ顔である。それに誰も否定しない事に對して、やはりと言うべきか驚愕した顔のウイズ。直ぐに口を開き尋ねる

「凄いとしか言いようがありません。一体どれほどの冒険をされたのですか?」

その一言に皆考えこむような顔でうつむく。一部からかう方法を考えている者がいるが気にしない。ここは一言で簡潔に言い表した。

「まあ、色々だな」

当たり障りの無く、無難だがこれでは何も話していないのと同然。しかしウイズは事情があると思ひ至り言及をやめる。

「ゴホンツツ・話が脱線しましたが、この冒険者カードのこの部分にスキルポイントの欄がありますね?」

そう言いカードの一部を見せてくる。そこには地球の文字ではない字で『スキルポイント』と書かれ、その下に『49』と数字で表示されている。

「こちらに表示されている数字がスキルポイントです。これを消費して新しいスキルや魔法を覚えたり、スキルを強化する事が出来ます。これを上げる方法は、レベルアップ時に貰えるポイントと、スキルアップポジションを飲むことですね」

「成るほど……しかしこの49というのは?俺はレベルアップをした覚えは無いのだが」

冒険者カードに表示されているジークのレベルは1のままだ。それも直ぐに説明してくれた。

「冒険者登録の際に、その方の資質等によりますが、このように初めか

らスキルポイントがいくつか持っていることもあります。」

「これは多いのか?」

「はい、とても。こんなにあるのはかなり珍しいのですが、先程のステータスからしたら妥当ですかね」

他の者もスキルポイントを確認したが、このメンバーの中ではジークが最も初期ポイントが多かった。それは英霊が既に様々なスキルを有しているからだという事が予想される。何故なら英霊達のカードにはきちんとサーヴァントとしてのスキルが記載されていたからだ。因みに

「続けますよ?ここにスキル一覧がありますよね?これに触れて覚えたいと思ったら、スキル習得完了です!後は同じ方法でスキルを強化出来ます。あ、勿論強力なスキル程必要なポイントは増えますからね?」

「たったそれだけの事でいいのか!」

それはあまりにも簡単すぎた。正直もつと色々あるのかと思ったが、本当にそれだけでいいみたいだ。

これでは努力をしてまで修行をする人がいなくなるのではと思っただが、ウイズ曰く、スキルの強化具合にもよるが、一部スキルを除き、あくまで使えるようにするだけらしいので、同じスキルならば努力した者の方が圧倒的に強かったり、スキルポイントを節約する為に自力で何とかしようとする人も結構な数いるらしい。

「はい、それだけでいいですが、そのカードは他の人でも決める事が出来るので注意して下さい」

「??他の人が覚えたいと思ったのにカードが違えば反映されるのか?何故だ?」

「そういうものなんです」

「そういうもの」

「はい、ところで何か一つスキルを覚えてみては?これほどのポイントですとかなり自由が効きますが……おや?これは、見たことがないスキル……ですかね?」

スキルを見ていたウイズが不思議そうな声を上げる。その冒険者

カードには『魔術（C）』『人工英雄（B＋）』これらは習得済みとして表示されていた。『魔術（C）』はジークが魔術を得意としていたことからだろう。『人工英雄（B＋）』は分からないが、なにより目を惹くものがあつた。それは『竜告令呪（EX）』。こちらにも習得済みとなつているのだが、文字が灰色に変わつている。思わずといて必きか左手の甲を見る。

（…これは、そうか、何故かは知らないが…アレが、俺のものとして認識されたのか）

「あのー、すみませ〜ん」

「つすまない、少し予想外でな」

「いえ、大丈夫です。どんなスキルかは聞きませんよ。それよりも一つ覚えてみませんか？私のオススメは『上級魔法』です。これならジークさん程の魔力を持つていれば、かなり活躍が出来ますよ？」

だがそれよりも気になるスキルがあつた。中級魔法、上級魔法とあるが、一つだけ格段に必要なポイントが少ない初級魔法というものがあつた

「すまない、この初級魔法というのは？これだけいきなりポイントが低いのだが、どのようなものがあるんだ？」

「純粹に聞くジークに少し困つた様な顔で告げるウイズ。

「いえ、その、初級魔法と言うのは、基本的に属性に応じた少量の物質を創り出すだけで攻撃等には向かないんです。例えば、綺麗な水を創り出したり着火に使う為の小さな火等しかなく、殆どの方は初級魔法は取らずに中級魔法から覚えるんですよ」

「ふむ、では初級魔法というのを覚えてみたいと思う」

「はい、では初級魔法を…あの、本当にいいのですか？」

「何がだ？」

「いえ、初級魔法をお選びになつても。もつと他のスキルが取れるとこの初級魔法だなんて」

ああ成る程、戦闘用では無いのに何故貴重なポイントを使つてまで初級魔法にするのかということか

「いや、それでいい。戦う手段ならあるが、飲み水の確保や注意を引か

ない明かりなどには使える。それに使用する魔力は少ないのだろうか？ならば非常事態等に備えたものが必要だと思ったんだ」

それに関心したようにウイズが頷く。

「確かに、言われてみればそうかも知れませんが。飲むお水が常に確保出来るのは安心に繋がりますね。私も機会があれば覚えて見ても良いかもですね。……その水だけで何とか持ち堪えることも……」  
ちよつと彼女の私生活のアレな部分が見えてしまった気がしなくもないが、そこは割とどうでもいいだろう。精々が自分で作った水か店等の水かの違いしかない。

これで晴れて初級魔法を覚える事の出来たジーク。早速コップを用意してもらい使う事にした。感覚はいつもと少し違うが何故だが出来るという確信がある。これがスキルを覚えたという感覚だろうか。未知の力に驚きつつも、しっかりと腕をコップに向け唱える。

『クリエイト・ウォーター！』

ジヨボボボボボボボボ

「んく、んく……うまい」

「……………」

「それだけか？」

「ああ」

会話は終了した。あれ、コレ何だかきまずいなあ。あ、セミラミスが勝手に道具弄ってるじゃないか。いけないぞおう売り物を勝手に弄ったら、何てどやされるか分かったもんじゃないからね。(by. 何処かのドクター兼所長代理)

「そ、そうだ、俺の奴にはスキルが表示されてないんだが……？初級魔法が追加されてるな……」

「あ、そ、それはですね。あの、カイリさん。あなたは冒険者を選んでるんですよね？」

「ああ、それで間違いない」

「冒険者という職業は全てのスキルを覚える事が出来ますが、本職よりは効果が落ちますし、必要なポイントも多いんですけどね」

「それも聞いた。しかし俺より遥かに強い奴らがいるんでな。わざわざ

「ざ俺が強くなる必要は無い」

「それならいいのですが……。まず、冒険者のスキルの覚え方は他の職業と少し違って、一度自分の目で見なければいけないんです。それで一度見たスキルならば全てが習得可能となるというのが、冒険者の特性です」

今さっき目の前でジークは初級魔法であるクリエイト・ウォーターを使った。だから今まで白紙状態だったスキル欄にクリエイト・ウォーターが新たに習得可能となったのだった。

「なあ、ウイズ。何かオススメのスキルとかは無いのか？こう、バチバチやり合うようなやつじゃなく、サポートになるようなやつだ。支援や弱体化系があるとありがたい」

「それでしたら、『不死王の手』なんてどうでしょう？」

「『不死王の手』？」

名前からしてリッチー等の種族のスキルだというのは分かる。

「これはリッチー専用のスキルで、素手でも武器越しでも、触れた相手に毒、麻痺、昏睡、魔法封じ、弱体化の中からランダムで状態異常を引き起こすものでして、状態異常の効果はスキルレベルを上げることでも上昇します。状態異常を引き起こす確率は幸運に依存していて、中でもレベルドレインは相手のレベルを下げる効果を持っているんです。本来なら人間には覚えられないんですが、冒険者なら例外的に習得可能なんです」

「おい、じゃあ何で冒険者になる奴は全然いねえんだ？」

モードレッドは、文字通りどんなスキルでも使えるのに、やたらと不遇職の様に扱われるのに疑問を覚えたようだ。

「いえ、普通は優れた能力を持っている方はその専門職に就いた方がお強いですし、冒険者に就くしか無いような方は専用スキルを使える様な強力なモンスターとはまず出会いません、出会われたとしてもそのままお亡くなりになってしまうので……」

それはまあ、当然の事だった。優れた能力を活かせるのならそういった職を選択したいと思うし、冒険者になるような人物は普通、強力なモンスターには歯が立たない。だからこそ人間に協力的なりッ

チーはかなり珍しいのだ。

「はんっ！根性のねえ奴ばっかだったって事か」

つまりはそういうことである。身も蓋も無い言い方だが、どうにかして、スキルだけを盗み見ることも可能だったのだから。

そしてスキル実演に入る。

「では…あの、一度使用しないといけないのですが、どなたに言えば…」

「では俺が。俺ならば『仕切り直し』と『悪竜アーチャー・オブ・ファウニールの血鎧』がある為、大事にはならないだろう」

「感謝する。ジークフリート」

協力してくれるジークフリートに感謝の言葉を掛ける。

「ではいきますよ、『不死王の手』！」

ジークフリートの手に触れたウイズの手から妖しい光が放たれる。

「……？何ともないが…」

「いえ、かかっている筈なのですが……あ、きつと魔法封じがかかっているんですよ。魔法使いならまだしも、戦士職の方にはあまり効果が実感出来ませんからね…」

「…おう、オーケーだ。後はコイツに触れりやあいいんだろ？」

無事に不死王の手を習得する事の出来た獅子劫。

「なんとというか、不思議な感覚だな。これがスキルを覚えるつつうことか…」

「ええ、最初は私もそんな感じでしたね」

談笑に戻りかけた時、天草四郎が声をかける。

「すみません、ウイズさん」

「はい、何でしょう？」

「私の仲間が店の道具を弄っているのですが…」

「はい…えっ!?だ、駄目ですよ！どれも繊細なもので……あれ？ちやんと出来てる…どころか効果が上がって？」

「ふん、そのポジションを造った者が未熟なだけだ」

セミラミスはいつの間にかポジションを改良していたようである。効果は一流のアークウイザードであるウイズも認める程。

「す、凄いです！一つ、効果を確認してみてください！」

「構わぬ、もともと汝の物であろう」

「で、では…」

改良されたポーションを飲もうとしているウイズを尻目に呑気に話す主従

「ところでセミラミス、貴女の道具作成のランクはCでは無かったですか？確か毒物限定の」

「ああ、そうだが？」

「…成る程、ウイズさん。それは飲ま「ぐふううっ！」遅かったか…」  
そこには、ポーションの瓶を口に含んだまま白目を向き、崩れ落ちるウイズの姿があった。

「あー、すみませんセミラミス、解毒剤を下さい」

「ふふっ、よからう。あの愉快な姿に免じてやる」

解毒剤を飲ませ、ウイズが起き上がる。

「大丈夫ですか？」

「は、はい、なんとか…」

「そういやウイズ、魔道具つつつてもどんな効果があるんだ？」

獅子劫が一つのポーションを手に取り、聞く

「あ、それは衝撃を加えれば爆発するポーションです」

「危ねえな！」

「これはく？」

「あ、そちらは空気に触れると爆発するポーションで…」

「開ける？」

「出来ればやめて欲しいです…」

「これは何だ？」

「水に触れると爆発するポーションです」

「…爆発物しか売ってねえのか？」

「いえ！ちゃんとした道具も売ってますよ！そちらがたまたま爆発系のコーナーなだけでして…」

誤解されてはならないとワタワタと弁解するウイズ。それを眺めていた獅子劫が一言。



「まあ、こいつは丁度いいな。この量にこの値段はお手頃だからな」  
「え、本当に…?」

「ん? いや、よく使えると思ってだな…」

「そ、そう思いますかカイリさん!」

「うおつ」

ガバツと身を乗り出すウイズに少し引いた様子。

「いえ、この店にやってくる人はみんな買わずに帰ってしまうので…」

「それまた何で?」

「いえ、それが分からず…いい商品は揃えているつもりなのですが…」

「いい商品?」

「はい! 最近手に入った物ですとこれがイチオシです!」

そう言っ取り出したのは一組のグローブ

「こいつは?」

「このグローブは、何と盗賊職についていなくても『窃盗』<sup>スティーレル</sup>が使える様になるのです!」

「そりゃすごい。何で売れないんだ? 一人くらいはいても良さそうだが…」

「ただ本来よりも消費する魔力は多くなりますし、盗賊職の人しか装備出来ないんですが…それ以外は本当にすごいですよ!」

「あく、何となく分かった」

「本当ですか!」

「ああ、自分で言った言葉を思い出してみな」

「……………?」

「本気か!」

まったく分からないという顔には流石に驚愕する。

結局商品を見るだけ見て店を出た一行は次の行動へ移る。

「なあマスター、さっさとモンスターってヤツぶつ殺しに行こうぜ」

早速血気盛んなモードレッドが言う。

「まあ待て、そいつは明日だ」

「何でだ？」

モードレットが暇そうだが、それよりもまずすべきことがあると言わんばかりに話し始める。

「いいか？俺達はまだこの街の事を全然知らねえんだぞ？現にさっきも道に迷いかけたからな。最初にやるのはこの街を覚える事だ。トウリファスでもやったろ？あれはまあ、視察込みだったけどやっついたらほうがいいだろ？」

「ええ、その通りです。ここは見知らぬ土地、情報が必要でしょう」

「うんうん、僕も初めての街に行つたときはワーツつてやつて迷つた事があるからね。あの時はよくローランと一緒に怒られたなあ」

「ローランが!？」

「まあ、いい。少し金はやるからそれでまあ、観光ついでにでも見つけ。本格的な仕事は明日からだ。夕方には戻ってこいよ」

「その案を採用しましょうか。…行きますよ、セミラミス」

「まあ、こういうのも希にはよいか…シロウ、エスコートは任せただぞ？」

「…ええ、セミラミス」

「行こうマスター！あつちに気になるお店があつたんだ！」

「ああつ、待ってくれライダー！また迷子になるぞ！」

「こうしてのんびりと人の営みを見るのはいつぶりか…」

「…もう行きやがった」

「さて、じゃあ行くぞマスター」

「ああ、最低でも主要な道は覚えなきゃな」

この日、アクセルの住民は、姿も格好もバラバラだが不思議と違和感の無い人物達を、よく目にしたそうだ

## 初めてのクエスト

日が昇り、街が活気づき始めた頃、ギルドも幾多もの冒険者を迎え入れ、その中には我らがA P O組の姿もあった。

「うっし、クエストだクエスト!」

「あまりはしやぎすぎるなよ、一応依頼という形らしいからな」

弾んだ声のモードレットを宥める獅子却だったが堪えた様子はない。

「なあ、依頼はどれにするんだ?」

こちらはこちらでキラキラとした目で問い尋ねるジーク。ルーミアではこのような事はしなかったので期待で胸いっぱいだ。因みに彼の頭の中でのイメージは完全にド○クエになっている。ドラ○エ8が面白かったらしい。

どのような依頼を受けるか、その間には複数の声上がる。

「強え奴だな!」

「面白いの!」

「稼ぎが良いやつに決まっているであろう」

「そうだな、人の害になっている緊急のものを…」

その中でも、モードレットが勝手に依頼用紙を取ろうと手を伸ばすが、獅子却にその手を掴まれる。

「待て、受けるクエストは決まってる」

「はあ何だよそれ?」

「何も適当に決めた訳じゃ無いぞ?ここでは俺達は成りたてだ。実力はともかく依頼に関してのイロハが足りない」

「ふむ」

「確かに…」

「そこで、だ。聞いてみた感じだと初心者にもうってつけの依頼があるらしいんでな。ここの職員曰く、これでクエストの何たるかを知る人も多いらしいし、報酬も、まあそこそこはあるらしい。とりあえずコイツを受けて、クエストの進め方を学べばいい、と思う。まあ、ゲームで言うところのチュートリアルだな」

説得力のある言葉に反論する者はいない。

「んじや、コイツで決まりだな」

そう言うと、依頼用紙を手に取り、カウンターに届けて受注する。

「嬢ちゃん、コイツを受けてえんだが」

「はい、『ジャイアントトードの討伐』ですな」

「ジャイアントトード？」

「ああ、何でもこの街の周辺の平原に棲んでるらしい。その名の通りバカでかいカエルでな、繁殖期に入ると子ヤギや農家の人を食うこともあるんだと」

等の話をしながら、依頼の受注を待っていたが一向に受理されない。そちらに注意を向けると少し困った様な表情の受付嬢が依頼用紙を持っている。

「何だ、何か不備でもあったか？」

「あの、獅子劫さん。その、通常、パーティーの人数は様々な観点から見て2人から4人。多くても5人でして……その、パーティーを分けて頂けるとありがたいのですが……」

「何!？」

パーティーを分けろと言い渡された彼らは、一旦席まで戻ってパーティーの振り分けを決めていた。

「分かった、んじやマスターとそのサーヴァントは必ず一緒のパーティーになってくれ」

そう言われると、出来上がる組は三つ。ジークをマスターとした、アストルフオ、ジークフリート組。天草四郎をマスターとするセミラミスのペア。そしてマスター無しのフランである。

「おい、フラン。何でお前マスター無しでも現界してられるんだよ」

「宝具で、…あたり、の……まりよ、く…吸ってる…から…大丈夫、夫…」  
そう、フランがバーサーカーというクラスでマスター無しのまま現界していられたのはある宝具のお陰だった。

その名を『乙女の貞節』ブライダルチエスト、それは樹の枝状の放電流を纏う戦槌。自分や周囲から漏れる魔力を効率よく回収し蓄積するため、サーヴァント

や魔術師がぶつかり合い周囲に余剰の魔力が豊富に発生し続ける戦闘中は『ガルバニズム』と合わせて疑似的に”第二種永久機関”の動作をする。

本来なら戦闘時以外にはあまり使われないが、この街の近くで何やら強力な魔法が放たれているらしく、存在するだけならば余剰魔力としては十分な程にあったようだ。しかしそれではやはり心もとない。誰をマスターにするのか問いかけたが、獅子劫がこれ以上増やしたら万全なパフォーマンスが出来ないらしく、辞退した。つまり残るのはジークか天草四郎。このどちらかである。

「ではフランケンシュタイン、貴女はどちらがいいですか？」

天草四郎はフランに任せる事にした。

「う…じー、く…」

「まあそうでしょうね」

当然の事だがそれはもうあっさり決まった。方や元敵陣営のマスターで黒幕。方や自陣営のマスターで聖杯大戦を終わらせたホームクルス。どちらをとれと言われたら、誰だつて後者を選ぶだろう。

これでジーク側のサーヴァントが三騎。パーティーは自ずと決まった。

「つて事は消去法で……」

モードレッドと天草四郎の目が合う。

「げっ、テメエとかよ…」

苦虫を噛み潰した様な顔のモードレッドとは正反対に、天草四郎はニコニコとした表情だった。

・  
・  
・

あの後、赤組は獅子劫の反対を押し切り、ギルド内で最も高難易度なクエストに行ってしまった。

一方で、ジーク達はどうと、獅子劫に進められた通りにアクセル付近の平原にジャイアントトードを討伐しに来ていた。が何やら困惑しているご様子。

「何もいないぞ……」

目の前に広がる見通しのいい平原では、姿を隠せる様な場所は無い。話に聞いた程の巨大なカエルがいるとは到底思えなかった。

教えて貰った通りの所へ来た筈だが…と首を捻らせる。

「少し辺りを散策してみよう。この場にはたまたまいないだけの可能性もある」

マスターだからか元の性格故か、自然とリーダーの様な役割になっていたジーク。まあ、仲間が理性蒸発男の娘と、理性はあるが言葉を発するのに疲れるという狂戦士。そしてどちらかといえば命令待ちの騎士すまぬいさんである。これはジークがリーダーになるほかあるまい。

さてそれでは、と意気込んで出発したが中々見当たらない。ひよつとしたらもういなくなってしまうのではと考えたが、狩り尽くしたと思っても延々と湧き続けるそうなので、そうではないと否定した。

そして探すこと三十分、ようやくお目当ての相手に出会えた。

(確かに大きい……)

それは高さでも並みの人間を優に超えていて、これ程の巨体ならば丸呑みというのも頷ける。

「すごいや、こんなのフランスでも見かけたことないよー」

観察をしていると、大きな口を開け、舌を勢いよく伸ばしてくる。

「マスターー！」

「はっ！」

迫りくる舌を身を捻り躲し、もう一度口の中へと戻ろうとする瞬間、切り飛ばす。

「気をつけるー！いくらサーヴァントといっても何が効くかが分からない！出来れば回避か防御をしてくれー！」

「了解（した）（アアツ）！」

いくら巨体を誇るカエルとはいえ、ある程度鍛えた一般人にも倒される程度の脅威なので、人外の領域にある彼らの相手では無かった。

戦闘は最も近くにいたフランが叩きつけた戦槌の一撃で爆発四散。あまりにも早い幕引きだがこれが現実。哀れジャイアントトード、相手が悪かった。

「…う、弱…い」

拍子抜けとばかりに眩くフラン。

「いや、初心者でも出来るという話らしいからこんなものだろう」

さて、次のカエルを探しに行くぞ。と意気込んだものの中々見当たらない。

結局、午前中はあの後現れたジャイアントトードと合わせ、2体討伐出来ただけだった。

…

「すまない、平原ではジャイアントトードが多く生息していると聞いたのだが…何かあったのだろうか？」

ところ変わってギルド内。あまりにもジャイアントトードがいな  
い事に疑問を持ったジークは、事情に詳しいと思われる受付嬢のルナ  
に原因を聞いていた。

「ふむ、ジャイアントトードがない、ですか…。それはおかしいです  
ね、冬眠という時期でもないのに何故…」

ルナにも原因は分からないらしい。どうしたものかと共に首を捻  
る。そこで「あっ」とルナが顔を上げ話し出す。

「ジャイアントトード等の比較的弱いモンスターは、強力なモン  
スターや上位の悪魔等が近くにいと怯えて出てこないですよ！人  
間には分かりませんが、ひよつとしたら何かを感じ取ったのかも知れ  
ません！」

「もし本当にそれならば余計にダメでは？」

明るい顔が暗く沈む。

「そうですね…ついこの間にも上位悪魔が現れたのに、そんなに  
直ぐ現れる訳ないですもんね…」

「そうなのか…」

お互いもう手遅れとばかりに顔を見合わせ、ルナがぼそりと眩く

「これはありえないんですけど…ドラゴンでも飛んでたのですか  
ねえ…」

「そうだな、ドラゴンでもいれば怯えて……ドラゴン？」

「はい、といつてもジャイアントトードが認識出来るのは、精々が地面にいるとき位ですけどね……」

「……分かった。ありがとう。解決出来た」

「え、いえでも……」

「いや、本当にいいんだ、貴重な時間を使ってもらいすまないーっ！」  
「って、あつ、ジークさーん!？」

このジーク、見た目は人間のホムンクルスでも、聖杯大戦の最終局面、大聖杯を現世から隔離するためにジークフリートの竜の因子を利用し、邪竜ファヴニールへと成り、世界の裏側へと旅立った。つまり現在の本体はあくまで邪竜であり、ホムンクルスではない。もう一度言おう、本体は邪竜である。

察しがいい読者の皆様ならもうお気づきであろう。ジャイアントトードが一向に姿を現さなかったのはジークのせいだった。

「と、言う訳で俺がいたからだろう……邪魔をしてすまない……」

割と落ち込んでいるジーク。彼には強力なモンスターの方が良かったのだ。

「マスターは悪くないよ！」

「……う」

「しかしどうする？このままでは依頼を達成出来ないぞ」

皆が擁護するが依頼の妨げになっているのは事実。このまま行くかどうかと話し合っている。ジークは妙案とばかりに

「ウイズに聞いてみよう。彼女なら何か解決方法があるかも知れない」

ここは同じく恐れられる側の方からのアイデアをと、早速ウイズ魔道具店へと駆け込んだ。

詳しい事情は話さず、何故リッチーなのに大丈夫なのかと問をかける。そこで望んでいる答えを得た。

「そうですね……私の場合はアンデッドとしての魔力……瘴気……？いえ、



なんと言えはいいのかわかりませんが、それをこう、胸の内側に抑える様な感じで……あの、何でそんな事を？」

ちよつと曖昧な感じで感覚的だがそれでも、と実践することにした。

「成る程。頼む、ジークフリート。この中でファヴニールの気配が分かるのは貴方だけだ。少し付き合ってくれないか？」

「了解だ」

そこからジークの邪竜の気配隠し訓練が始まった。

一回目

「むぐぐ、こうか？」

「駄目だ」

失敗

四回目

「これならっ……」

「邪竜らしさが抜けていない。やり直しだ」

失敗

十二回目

「はああああっ！」

「むしろ邪竜らしさが増しているぞ!？」

大失敗

そしてとうとう……

「これで……どうだ……」

「ああ、完璧だ。概念的な繋がっている俺以外には分からないだろう。三十八回目にして成功だ」

そこからは慣れるだけ、そこまで時間をかけずに抑えきることが出来た。

「ありがとう、ウイズ。貴女のお陰だ」

「あ、はい。ありがとうございます。……何がですか？」

「何でも無い」

そう告げ、彼らはリベンジするべくアクセルの街を飛び出した。

店内には空気に追いつけなかった者が一人、ポカンと口を開け取り

残されていた…。

「……結局何だったんでしょか…？」

もう一度、と朝のリベンジに平原に向かった。するとそこには…

「ゲコオツ！」「ゲコッ！」「ゲロツ！」「コウガツ！」

「大量にいるな…」

「うわあ…、いっぱいいるうー…」

目の前に広がるのはカエルフィーバー。今までジークの気配によつて隠れていたが、気配を抑えた結果、一気に活動してしまい、溜まっていたジャイアントトードが溢れ出したのだ。

「すまない、俺の聞き間違いでなければポケオンがいるような気が……」

「○ケモンってなあに？」

「いや、こちらの話だ。気にしないでくれ」

向かってくジャイアントトードの群れから目を離さずに応える。ジャイアントトードの数はおよそ三十程。この巨体がこれ程の数で向かってくる様子には恐怖を覚える。

されど彼らは一騎当千の英霊。この程度、前座にもなりはしない。

「油断はするな、来るぞ！」

「……か、い、し……する」

「はあっ！」

「そりゃ！」

「せいっ！」

「ウウ……！」

それは、まるで嵐のようだった。

剣が、馬上槍が、戦槌が、そして黄昏の魔剣が、ジャイアントトードの体を豆腐のように切り裂き、貫き、陥没させ、斬り飛ばしていく。

あれだけ多かったジャイアントトードが今や片手で数える程しか残ってはいない。対してジーク達は汗一つかかず、息切れ一つとして

起こさない。それ程までに、彼らとジャイアントトードとの間には隔絶した実力差があったのだ。

ジャイアントトードは分が悪いとみるや、踵を返して逃げ出した。その先には新たなジャイアントトード。ジークはさせるかとその背を追い、切り伏せんとし――

――そこで気付く。

離れた場所に何やらこちらに声をかける者がいる事に。

「……いーお……げろ……今すぐ逃げろーっ！」

「！待てっ、ジーク！」

(逃げろ？……っ！)

声をかけた者の近くに大きな魔力が渦めいている。魔力の発生源は一人の少女。つまり、

(これは――強力な魔術の兆候――！)

ジークが感じたものは確かにそれである。不運な事に、今まさにジークの立つ場所に、(正確に言えばジャイアントトードを狙ったものであり、ジークが後から来た形になる) 放たれようとしていた。

逃れようとするも、切り伏せる為に飛び上がっていた事が災いした。その間にも感じられる魔力は大きくなってきている。やがてそれは収縮し

「マスター！」

(しまっ――！)

ズドオオオオッ！

閃光が走った。

目も眩む様な光と轟音と共に爆炎があがる。標的であるジャイアントトードは跡形も無く、それどころかその場には大きなクレーターが出来上がっていた。

これを成したのはこの世界における人類最強の攻撃魔法、爆裂魔法。この魔法は消費魔力と消費ポイントの点からネタ魔法とされているのだが、消費したものにみあう他の追従を許さぬ圧倒的な威力を誇る。さらに、この爆裂魔法の特徴として、実態の無い幽霊や悪魔、果

てには神々であれどダメージを与える事の出来る魔法である。人類最強の攻撃魔法とは誇張でも何でもないのだ。

しかしコレは範囲もかなり広く、味方の位置には気をつけなければいけない。何故ならば大物賞金首クラスのモンスターでもなければ耐えることは不可能に近く、巻き込まれた場合はまず命は無く、蘇生も出来ない程凄惨な状態になるからだ。

いくら英霊程の能力を持っているとはいえ、ジークはまだ生きている邪竜、現在の体の強度は丈夫なホムンクルス程度に過ぎない。つまりサーヴァント程のしぶとさは無い。そして防御用の能力は一切持っていない。

未だに土煙と黒煙が立ち込める中、何の動きも無い。

ただ存在が確認出来るのは、青ざめた顔の少年少女のみであった。

## 邂逅、不屈の英雄

俺は佐藤和真。日本生まれの至って普通の高校生だった俺は、轢かれそうな女の子を助けて死亡した。

女神の元へと召されてしまった俺だが、女神が言うには別の世界が魔王の危機に曝されているからその世界に転生してくれとの事。

正義感の強い俺は勿論承諾。

俺は勇敢にも他の者が持つチートを一切持たずそれに感銘を受け、自ら付いてくると言った女神を広い心で許し、異世界へと旅立った。そこで俺はあらゆるスキルを使用できる冒険者、女神であるアクアはプリースト系の上級職であるアークプリーストとなり、魔王討伐の道を進むこととなった。

最初、暫くは街の為に慈善事業をしていたのだが、わがままなアクアは堪えきれず、冒険者としての本業を開始する。ジャイアントトードを討伐しに来たのだが、アクアは無様にも捕食され、この俺が華麗に討伐してやったのだ。

そんなアクアは仲間が必要だと述べ、俺も快諾、それに応じたのは紅魔族とかいう種族のめぐみんという珍妙な名をしたアークウイザード、更には最強の攻撃魔法である爆裂魔法を使える程優秀だという。

取り敢えず、今回は仲間としての実力の確認の為に先日のカエルにリベンジ、もとい、的になってもらったのだ。

実際に見た爆裂魔法は、人類最強の攻撃魔法というのは嘘でも誇張でも無いことをこれでもかと思ひ知らせた。

これ程の威力であれば大悪魔等にも通じるらしい正に一撃必殺。

人間が喰らえば決して死は免れないであろう。それも駆け出しの街にいるような者であれば尚更――

はい現実逃避終了ー

つじやねえよ!!何、何?マジか、マジなのか??もしかして本気でやっちゃまったのか!?

それを撃った本人、めぐみんに目を向ける。  
何故か力無く地に伏せているが、あわあわと青い顔で今にも泣きそうだ。

まあそうだよな、人間なんてちよつとした火薬の爆発とかでも下手したら死んじやうしな。分かるよ。

取り敢えず：

「アクアアアー!!アクアアクアアクアアああー!!」

早速カエルに呑まれたアクアに頼る。

昨日とは段違いの速さでカエルを倒し、中のアクアを取り出す。

うわっヌルヌルで気持ち悪っ。 ってそんな事言ってる場合じゃない！

「おい、アクアつアクアつ、さつきめぐみんが撃った爆裂魔法が人を巻き込んだ!!」

「うっ、ぐす……生臭いよう……何?」

泣きながら出てくる駄女神に少し苛ついたがそんな事してる場合じゃない。

「だから、さっきの爆裂魔法に人が巻き込まれたんだよ!!どうか知らないのか!?お前仮にも女神だろ!」

その言葉には流石に反応し、ムツとした様子で立ち上がる。

しかし先程のはしっかりと聞いていた様で、少し気まずそうな顔になる。

「その…ね、ただ死んだのなら私の『リザレクション』で生き返らせるんだけど……流石に爆裂魔法を食らったのはいくら私でも無理だと思ふ」

その言葉を聞いて目の前が真っ暗になった。そして未だに伏せている元凶

「おい、どうすんだめぐみん! つてか何でまだ倒れてるんだよ」  
すると震えた声で

「ふ……。我が奥義である爆裂魔法は、その絶大な威力ゆえ、消費魔力もまた絶大。……要約すると、限界を超える魔力を使ったので身動き一つ取れません。……あの、万が一にも外れていたとかいう可能性

は…?」

僅かな希望を目に問いかけるめぐみんだが…

「いや、それは…あつてほしいけど、多分ない。俺もはっきり見てたから分かるんだが、狙ったカエルのすぐ側について、流石にあれで外れていた。とかはありえないだろ。…それに冒険者カード見てみる。多分だがジャイアントトードが二匹追加されてると思うんだが…」  
それに応じて、ごそごそと懐を弄りだし、冒険者カードを手に取り、沈んだ声音で告げる

「はい……。確かにジャイアントトードが二匹追加されてますね……」

やっぱりか…という気持ちと共に絶望感が湧いてくる。

(異世界転生して早々人殺し…俺がじゃないけど俺のパーティーがやっちまった……。このまま俺達は殺人犯として一生を独房で暮らす…いや、文明の未発達な異世界何だ。死刑になったっておかしくない。…すいません。お母さん、お父さん。貴方の息子は早死にするだけじゃ飽き足らず、転生先でも殺人という大罪を犯してしまいました…ん?)

ふと、めぐみんの持つているカードに疑問を覚える。確かに討伐した欄にジャイアントトードが二匹…

よく考え込んでいる時に、アクアが馬鹿な事を言い始めた。

「ねえ、カズマさん。あの、このことは黙ってればいいんじゃないかしら。ほら、冒険者ですもの、外出中に死んだってモンスターの作業って言うと思うの」

「ふざけんな駄女神!お前仮にも女神だろ!隠蔽してどうすんだよ!…なあアクア。コツチって殺人事件とかほぼ無いんだろ?それは何でだ?」

きよとん、と何を言っているのか分からないという顔をして、当然の様に応える。

「そりゃあ、こんな魔王とかモンスターがいるのにそんな追いだされる様な真似しないわよ。普通の人よりも強い冒険者がいたり、傷をすぐに治せるプリーストもいるしね。恨みがあったとしてもコツチ

じや多少は殴ったりしてもいいし……」

「じゃあ、それは何で犯人が分かるんだ？現代みたいな道具とかも無いんだろ？冒険者とかなら気づかれる前に殺せそうなもんだが？」

その疑問に胸を張り、

「当たり前じゃない！かなり間接的な手段でもない毒だろうがトランプだろうがその人の冒険者カードに記録されるもの！」

！それだ!!

「そうだよ！やっぱりな！」

裏付けも取れた。これで取り敢えずのところ大丈夫だ。アレの近くにいたんだからケガは負ってるだろうがそこはこの駄女神とお金で何とかして貰おう。

「カズマ、きつと私が殺したのは人形の悪魔かドツベルゲンガーなんです。そうに違いありません……」

青い顔でトチ狂ったことを言い出すめぐみん

「おい、何無かったことにしようとしてんだ。というか、お前は殺してなんかいない。そうだろう？だってそのカードにはジャイアントトードしか載ってないんだからさ」

そう、めぐみんのカードには人の名前、あるいは名前になりそうなものなんぞ入っていなかった。これが示すところは、めぐみんは人を殺してなんかいないということだ。

「そ、そういうばそうでした！余りにショックで忘れていました。何たる不覚……」

少しは調子が戻ったようだが、こんな事が起こると俺の心臓に悪いので、忠告しておく。

「ああ、ところでこんな事があったんだから次からは他の魔法を使ってくれよな」

その一言に、急に黙り出す。

「………使えません」

「………は？何が使えないんだ？」

「………私は、爆裂魔法しか使えません。他には、一切の魔法が使えません」



「…………マジか」

「…………マジです」

「……………」

「そうか、多分茨の道だろうけど頑張れよ。よし、ギルドについたら報酬を山分けにしよう。うん、まあ、また機会があればどこかで会う事もあるだろ」

ぶつちやけ威力はすごいけど巻き込まれて人死にとか一発だけとか普通に考えれば仲間にしようとは思わない筈。

あ、この野郎、強く握って来やがった！

「ふ…。我が望みは爆裂魔法を放つ事。報酬などおまけに過ぎず、なんなら山分けでなく、食事とお風呂とその他雑費を出して貰えるなら、我は無報酬でいいと考えている。そう、アークウイザードである我が力が、今なら食費とちよつとだけ！これはもう、長期契約を「わーわーわーっ!!聞こえなーい聞こえなーい！」む、往生際が悪いですね」「いやいやいやいやーそんな強力な力は俺達みたいな弱小パーティーには向いてない。宝の持ち腐れだ。俺達のような駆け出しは普通の魔法使いで十分だ。ほら、俺なんか最弱職の冒険者なんだから。ほら、アクアも何か言ってやれ」

さつきからやけに静かなアクアに告げる。流石のアクアもこんなネタみたいなのはお断りだろ……………う…。

振り返った先には、アクアの姿は無く、大きな影。ジャイアントトードが佇んでいた。その口からは青い物が垂れ下がっていて…………

「おま、お前、いつの間に食われてんだー!?!」

幸いにもカエルは一体、それもアクアを捕食しているから動きはしない。これくらいなら俺でも…………

ポコツポコツポコツ!

俺達の周りの地面が円を描くように盛りだし、中からあらわれたのは、カエル、カエル、カエル…………。

…ちよつと無理だなコレ…………よし、丁度ここに罠がいるし、逃げるか。

「じゃ」

するとめぐみんはかなりの力で服の端を掴み抗ってくる。

「じゃ、じゃありませんよ……ここに倒れたか弱い少女がいるでしょう？ほら、見せ場ですよカズマ！」

「ふざけんな……こちらら駆け出しの上に最弱職だぞ！こんな数相手に出来るか！離せーっ!!」

くそっ、意外と力が強い！魔法職のクセに！

そうやって身内もめをしている間にも、ジャイアントトードの包囲網は狭まっていき、とうとう全てのカエル達の射程圏内に入ってしまったのか、大口を開けて舌を射出する。

その速度は普段の鈍重な姿が嘘のような速さで、ここまで接近されると彼らにはどうすることも出来なかった。

これは終わった、と命の危機を感じたカズマ。

しかし悲観することなかれ、ここには英雄がいるのだ。

文字通り、その閃光の様な生き様を世界に認めさせた大英雄が――

「無事か」

「えっ？」

あ……ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

カエルの群れに囲まれてもう駄目かと思ったが何故か目の前に一人の男がいて周りを囲んでいたカエルの姿はなく、見晴らしがよくなっている……！この人が剣を振りかぶった姿勢をしている所を見るとカエルはこの人が倒したんだろう。

催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなものじゃあ 断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を 味わったぜ……

そんな下らない事を考えていると男の人は振り返る。

「まさか、声が出せなくなる程の怪我を？いや、目立った外傷は無いが……」

うわ、めつつちやイケメン！何だこれ？地球の芸能人とかでもいないぞこんな顔。それに何だかよく分からないけど、何ていうんだろうか、こう、オーラ的な物を感じられる

……じゃなくて、お礼お礼……

「……あ、えつと……助けてくれて、ありがとうございまひたつ！」  
馬鹿！俺の馬鹿！こんな肝心な所で噛むんじゃない！」

「あ、その、えつと……」

つていうかよく考えればこんな年上の男の人とか話したことねえよ、やべえ、このままじゃ俺情けない奴の上礼儀知らずにもなっちゃう

「いや、恥じる事は無い。見たところ今まで戦ったことも無いのだろう。命の危機が訪れれば皆そのようになるだろう」

と男の人が言ってくれる。

や、優しい……ちよつと理由は違うけどすごくありがてえ

「あの、助けてくれてありがとうございます」

「いや、気にしないで欲しい。俺は当たり前前の事を、そう、人として当たり前の行動をしたまでだ」

やべえ、かっけえ。そうだよ、こういうのを求めてたんだよ！

腕の立つベテラン冒険者との関わり、一緒のクエスト……ピンチに颯爽と駆ける姿……！俺の異世界への憧れはまだ死んじやいなかったんだ……!!

「おーい、ジークフリートー！そっちは大丈夫かーい？」

駆けてきたのはピンクの髪的美少女と、亜麻色の髪的美少年……恐らくパーティーだとは思うが……顔面偏差値が高すぎるだろ。

「つてあー！そこのー！」

急に大声を出したのに驚いたのか目を見開く兩人。

「あ、すいません。じゃなくてそこのアンタ！大丈夫なのか!?!きつき爆裂魔法に巻き込まれたように見えたんだが……」

そう、この内亜麻色の髪の方は俺が見たカエルの近くにいた人だ。

見たところ怪我は無いようだが服は土で汚れている。

やっぱり当たらなかったか避けたか……どちらにしろ弁償はしなければ……にしても

「服は弁償する。けどあの状況から一体どうやって避けたんだ？」  
すこし参考程度に聞いてみると全員が頭に疑問符を浮かべる。

？どうしたんだ？別に俺普通の事聞いてるだろ？

「うーんとね、アレ当たったよ」

「え……」

どういうことだ？あの爆発の中で人間が生きてられる筈も無いし……いや、万が一生きてたとしても無傷は無いだろ。

俺がそう考えていると、めぐみんがよろよろと立ち上がり、ビシツと指を指した

「そんな筈がありません！我が爆裂魔法は最大最強の一撃、機動要塞デストロイヤーや冬將軍ならまだしも貴方達が耐えられる様なものではありません！」

…急に元気でたなこのチビッコ。やっぱりアレか自分の魔法が侮辱されたのだと思っただのだろう。

「けどその前にお礼な」

「はい、その節に関してはありがとうございます。…ですがそれとこれとは話が別です！」

するとピンク髪が懐から何かを自慢げに取り出し掲げる。

それは一つの本、

「じゃっじゃーん！これのお陰何だ、名前は……えつと……確か、魔術ルナ……万能……そう、魔術万能攻略書………だったかな？」  
ルナ・ブレイクマニユアル

「ライダー。それは俺の記憶が確かなら破却キャッサー・デ・ロジエステイラ宣言だ。さつきもそう言っていただろう？」

一文字もあってないじゃん。

「そうそうそれぞれ！この本はあらゆる魔術を打ち破る魔法の本なのさー！」

「なにそのチート」

いや、これ大分チートだろ。だって人類最強の攻撃手段があっさり防がれるってことだろ？

魔王軍の手にでも渡ったら侵略し放題じゃねーか。

「は？……はああああっ!?認めません！認めませんよそんな物！」

抗議をするめぐみんだが再度倒れて、手足をバタつかせているだけなので怖くも何ともない。

……?何か忘れてる様な?

「カズマさーん!カーズーマーさーん!!ちよつとー!何かヤバイんですけどおー!」

そうだった…コイツがいたんだ…。すっかり忘れてたな。

声の聞こえる方向に歩みを進め、勝手な行動をしない様に声掛けを行う。

「まっつろアクア。ここに俺達の恩人がいるんだよ。ちよつと待つとおわっ!」

ツルンと何かに足を取られて転げ回る。

ベチャ、と不快な音と、鉄の様な臭いが鼻に侵入してくる。

「まったく、何でこんなと…うわっ…」

そこは赤い草原が広がっていた。赤い草が生えている訳ではない。そこには無数のカエルの上半身と、その中心にへたりこむアクアが見えた。

そのカエルの数に俺は覚えがある。俺達を囲んでいたのと同じ数、多分、というかほぼ確実にあの時のカエルだろう。

何だこれ……。

いくらカエルで柔らかかったとはいえあの巨体、更には円形で包囲してたのに、全部まとめてたつたの一振りでここまで飛ばしたってのかよ!?

マジで何だそりゃ!?!他の冒険者の戦いをチラツと見たことがあるけどあつちはいわばマンモス狩りしてるみたいだったのにコツチは無双ゲーみたいとか、マジでチートかよ……

防御がチートなら攻撃もチート…ヤバすぎるだろこのパーティー!この駄女神より現地人の方が凄いつて何なんだ。

結局めぐみんのガス欠、アクアが汚れたためこの人達と一緒に帰る事になった。

あの白髪の剣士がジークフリートさん。セイバーとかいう、前例の無い職業らしい。サブカルチャーに詳しい俺だが、地球だどこの名前は結構メジャーだと思う。

んで、この名前の奴は大体イケメンで強い。天が二物も三物も与えたような奴だ。本来の俺ならこういうのは嫌悪するんだが、助けてもらった礼と俺に異世界への憧憬を蘇らせてくれたから無下にはしない。というか出来ない。強いし、優しいし、何かあったらアクセルの女性陣に何されるか分からん。

んで、ピンクの美少女がアストルフオ。こつちも同じく前例も無いライダーという職業で、珍しいボクっ娘。色々な道具を使うらしい。そして騎士だとも。全然そういう様には見えないがきつと規則とかが緩かったんだろう。

そしてウーウー唸ってるのがフラン。頭に角みたいな装備があったり、ウエディングドレスにでかいメイスというこの中でも異様な風体。髪に目が隠れてるけどどうっすら見えた顔は可愛かった。唸ってる理由は喋るのが疲れるらしいからとの事。

最後に、亜麻色の髪にめぐみんと同じ赤い目の、爆裂魔法に巻き込んでしまったのがジーク。

目が赤くアークウイザードだが紅魔族とやらでは無いっぽい。

名前の由来が、このジークフリートさんに命を助けてもらったからで、その前は名前が無かったらしい。

あれか？ひよつとして孤児とか虐待とかか？

まあそんな訳でちよつと聞きづらいのが本音。

「はい、確かに。ジャイアントトードを三日以内に五体討伐。確認いたしました。ご苦労様でした」

あつという間にアクセルに到着した俺達は冒険者ギルドに報告を終え、今は報酬を待っている。何だかんだで初めてのクエストだったんだ。男として心が踊らない訳が無い。

「では引取りましたジャイアントトード二体とクエストの達成報酬、合わせて11万エリスとなっています」

素晴らしい、お姉さんはエリスの入った袋を手渡してくる。

11:11万エリス……。確かに二日働いた報酬と考えれば高い。高いんだがなあ……。

命がけで必死に戦ってたった11万は少し納得がいかない。こちら少し前まで一般人だったんだぞ!?

さらにクエストの報酬を抜いた純粋なカエルの買取価格は一匹5千エリス。土木作業のアルバイトと同じ額。さらにここからパーティーと分割するのだ。手元に残る金は僅か、今はまだ人数が少ないからいいが一人でも増えたりしたらちよつと厳しすぎる。

これならまだ命の危険の少ない土木作業の方がまだマシだ。

「俺達もよろしいだろうか」

「はい、あなた達も同じクエストでしたね」

…そうだったのか、あんだだけ強いんだからもつといい依頼かと思っ  
てたんだが。

まあ、ちよつと気になる。ほら、俺って初心者な訳だし?新しくやるゲームでも上位の人のスコアとかも見ると?

「はい、……………はい?」

ん?受付のお姉さんが何度も目を擦ってる。そんなにヤバイのか?  
?

「あの、これは間違っていますよね?」

「ああ、確かに倒した数と一致している。それに回収されている筈だ。  
…何か不備でもあったのか?」

「いえ、ただ二十八匹もの数をこんな短期間で討伐するとは…………そこ  
までの数があるのは珍しいんですけどね…」

二十八!?ちよつと多くないか!?あの図体で二十八匹もいるって  
ちよつと、いや、大分怖いぞ。

「ではクエストの達成報酬とジャイアントトードの引取りから、運搬  
代を引いて…………締めて二十四万エリスとなります」

一人あたり六万エリスか…………命がけだったら安いかも知れないけど、  
一切苦戦すらしてなかったから、きつと丁度いいアルバイト位な  
んだらうな…。

「ちよつと待ってくれ」

「はい?」

「まだ仲間の分が査定されていない。そちらも見てくれないだろう

か」

「ああ、そうでしたね。ではお仲間の方々もカードを」

ふむふむと真剣に眺めること数秒、お姉さんの顔が引きつった。

「……フランさん二十六体、アストルフオさん三十一体………ジークフリートさん、四十五体い!？」

叫びながら立ち上がった彼女に視線が向くが、そんなことは気にならない。

ジークのも合わせると合計で…百三十体!？」

はあ!?多すぎんだろいくら何でも!

ほら、ちよつとお姉さんが諦めた顔になってる!

報酬も合わせるならあれだろ…えーと、七十五万エリス…ちよつとした小金持ちじゃねえか!?!いいなあ…俺たちなんて死にかけのボロボロで十一万。しかも大半は生活費に消える。

……ていうかあの平原にそんなにカエルいたのか。

「えーと、少しお待ちになって下さい。少しこちらも用意があるので」  
流石にカエル狩りでこんな大金が必要になるとはギルドも予想外の展開らしい。

そそくさと後ろへ下がっていくお姉さん。

するとそのタイミングでドアが勢いよく開かれる。

「たのもおーう!!」

「おいおい、俺達や道場破りか何かか?」

「モードレッド、他の方の迷惑と為らぬ様に」

「ああ、不愉快だ。何故我がこんなことを……」

入ってきたのはこれまた特徴的なパーティー。

最初のが全身甲冑の少し小柄な騎士、そして完全に筋骨隆々のヤクザ顔にサングラス、ジャケットスーツもあって、というかヤクザ。

あれ?こいつ、いや、この人俺と同じ日本人じゃね?

注意をかけたのが、羽織に袴の日本刀を腰に差した白髪褐色肌のイケメン。こつちも多分、日本人……だと思う。

最後の一人はすっげえ美人。受付のお姉さんとは違った氷を思わせる様なクールな感じだ。そして長く尖ったエルフ耳。そう、未だに



アクセセルでは見かけていないエルフだ！きつとエルフなんだよ！！

そのパーティーはズカズカと受付へやってくると冒険者カードわ、差し出した。

「おら、早速やってきたぞ。グリフォンとマンティコア二頭だ。確認しな」

「こ、こんな短時間で!?嘘でしょ!?……いえ……本当、ですね。マンティコアは二頭いたんですか。そんな情報は無かったのですが……」

「何だよ、疑ってんのか?そこにも二頭って書いてあんだろ。ほら、報酬を渡しな」

「ええと、百万エリスは、その……あの、す、少しお待ち下さい!」  
今さっき出てきたのに一瞬で引っ込んでしまった。これには、他の

冒険者も驚愕の目線でそのパーティーを凝視する。

「っていうかアレだろ?グリフォンとマンティコアって、一番報酬の高かった奴。」

何でこんなのを出来る奴が初心者街にいるんだよ

何だかんだで報酬をむしり取ったそのパーティーは何故か俺達の方に目を向けて……

「おーい、ジーク!そっちはどんな感じだったんだ?」

「ああ、少しトラブル……?……トラブルがあつたが概ねうまく行った。クエスト、というのも少し理解出来た」

「俺達もそんな感じだ」

何事も無かつたかのように談笑する徒然……ってオイ、

お前ら全員知り合いかよ!

このチート無しの二人に交流を！

「でよー。そのマンティコアが何て言ったと思う？」

クエストも終わり一段落。報酬まではまだ少しかかるというので、天草とセミラミス以外はギルドの席につき、クエストでの出来事を話し合っている。

「おい、モードレッド。それは…」

「マスターの顔見てな、『ナア兄ちゃん、中々渋い顔シテンナア。ドウダ？オレノブツトイ尻尾で刺サレネエカイ？サキツチヨダケダカラヨ』つつたんだぜ！あんときや笑ったね。まさかマンティコアがホモで、しかもマスターが相手なんてなあ…ククク」

和気藹々と続いていた会話はこの何とも言い難い話により一旦静寂が訪れ、皆が獅子劫を憐憫の目で見つめる。

「オイ、やめろ。俺をそんな目で見んじゃねえ！」

納得がいかないのか抗議するが、勿論皆本気では無いので喧嘩等には発展しない。と、その時、丁度用意が出来た様で二チームは報酬を受け取る。二チーム合わせて175万エリス。一日、いや半日でこれほど稼げる冒険者パーティー等、このアクセルでは滅多に見ないだろう。

「いよーし、この金でパーっといくか！」

そのモードレッドの号令には待ったをかける。

「待て、まだ飯時にや少し早い。俺も今の内にやりたい事もあることだしな。あと二、三時間くらい待ってろ。それまでは自由時間だ。…お前さんたちはどうする？」

尋ねられたジークは自分には思っていると思っただけで、少し考え込む。すると、ジークフリートが手を上げ、

「俺達も自由行動でいいと思ってる。…それでいいか？」

「うん、それでいいと思う。俺もまだ詳しくは回れていないからな」「じゃ、それで決定だな。いくぞモードレッド」

「何だよ、ちっと位いいだろ。折角金もあるんだしよ。せめて軽く一杯…」

「駄目だね。おまえはそれにかこつけて本格的に始めるつもりだろう。……おまえ、酒飲めたのか？」

「飲めるわそんなくらい！マスターは俺をガキかなんかだとも思ってるのか」

「おつと…そりゃ悪かった。……じゃあな」

そう言つて獅子劫達はギルドを去った。

◆◆◆◆◆

「…マスター」

「分かつてる。一人、だろ？」

街路へ出た二人は、ギルドにいた頃から向けられていた視線が追ってきている事を察知し、小声で話し始める。

「うし、お前はここで待ってる。ちつと話してくる。万が一のときは…まあ、最悪令呪でも使う」

懐のショットガンを確認し、魔術礼装をいつでも使用できるようにする。それに対しモードレッドは軽い口調で

「おう、じゃあな」

とだけ。

「……あのな、マスターに向けての心配が足りないと思うが？」

「あ？別にいらねーだろ。向こうは明らかにド素人だ。隠密行動も体運びも。隠密に関しちやジークの方が上手いぞ。それに…」

「それに？」

「オレのマスターが負ける訳ねえだろ」

「はあ…信頼が重いなあ…」

「マスター冥利に尽きるだろ」

「お前が言うな。…まあすぐ済むだろ」

そして少し時を遡り…

獅子劫達を見ていた件の人物、佐藤和真。彼はギルドの一席からジーク達一向を眺めていた。

(やーっばあの疵顔の人日本人だよなあ…。アクア曰くチート持ちだらけの日本人は若い魂しか送ってない。てことはあの人はこつちで  
の事が長い訳だ。つまり同じ境遇でベテラン。話さない訳もなく…)

そこでチラツと顔を見る

(でもなあ…顔が怖えよ。あんな人今まで話したことすらねえよ。大体地球にいた頃だつてちよつとでも柄悪そうだったら避けてたもんなあ。どうしよう)

「カズマー！取り分は私とめぐみんで7：3でいいわよね」

「んー、いんじゃないの…」

…今なんつった？

「やったわ、めぐみん！このお金でパーツといきましょう！」

「オイ待てコラ。さり気なく俺の分無くしてんじゃないやねえよ！」

「いいか、まず初日からやってた俺達の取り分が4万づつ、2日目からのめぐみんが3万だ。異論は認めん」

「何よー！何であんたみたいないヒキニートと麗しき女神であるこの私と同じ取り分なのよ！」

「うるさい、第一魔法で倒したためめぐみんはともかく、お前は何もしてないだろ！むしろめぐみんの方に4万渡したいわ！」

「…」  
「というかこの駄女神、食われてただけじゃねえか。納得いかねえ。」

「…」

「おっと…そりや悪かった。…じゃあな」

「やべえ、ギルドを出ちまう。ベテランのチート持ちなんか初心者の方の街にいつでもいるもんじゃない。今のうちに聞きたいこともあるんだ。」

「おいアクア！その報酬は預けた」

「あら、くれるの？ふふーん。ようやくあなたも私の素晴らしさが分かったようね。でもそのお金はいらわないわ。代わりに毎日高級シユワシユワを…」

「ちっげーよバカ！ちよつとギルド出るから持つてろつつつてんだよ！いいか、絶対に勝手に使うなよ。もし使ったらお前のその高そうな羽衣を質に入れるからな！絶対だぞー！」

そうして了承を得ることなくギルドを飛び出した。

そして現在、疵顔の日本人と金髪の美少女を尾行している…のはいいものも、どうやって話しかけよう。そもそも俺やアクアみたいに異

世界から来たってことを仲間に伝えてない可能性もあるしな。なんとかして二人っきりの状況…いや、やつぱ怖いからある程度は人目があつて且つ話が聞こえないところがベストだな。

すると、何かを話し男の方が分かれ道で別れた。ってヤバイ見失う！

男の向かった方向へ駆け出し、それを視界に収め

「あれ？どこいった？」

先にはあまり人気の無い街並みが広がるだけでその男はいない。大柄で結構特徴的だから直ぐに気づくと思うんだが…。

「——おい、さつきからずつとついてきてるよな」

「ひゃい!!?」

いつの間にも!?気づかれてたのかよ!?ヤバイヤバイ、テンパって変な声出た。じゃなくてこのままじゃ不審者確定だ、何か、何か言わないと…

「す、すいません！お、俺佐藤和真って言って、その、に、日本人です！」

「何？」

「ヒエツだ、だからその、ど、同郷ですよ。俺たち。少しお話をしませんかと思ひまして…」

どもりまくった末に出たのはおかしな敬語。当然納得される訳もなく…

「そうか、ついてきな」

「え？」

「ん？話をしたいんじゃないのか？俺もちょうど聞きたいことがあるからな。そら、いいところに喫茶店がある。そこで話すか」

そう言ってニヒルに笑う姿に、ちよつとだけ誤解していた事を恥じた。



「…そいつあ酷いな」

「そうでしよう!?俺だつてこんな事になるって分かつてたらアイツな

んで選ばなかったのに……！他の奴がチートアイテムで勝ち組にいるっていうのに、俺はお荷物抱えたチート無し最弱職……！ストレスが貯まる日々でそれはもう……！」

この少年、佐藤和真は日本の学生だったが事故で死亡し、女神に転生させてもらったのだという。それも女神を連れて。これは頭の堅い魔術師連中に言ったらどんな顔することやら。その辺がかなり緩い俺だつて頭痛がしてくる。

……だが、それでも手に入った情報は大きい。まずここが異世界という裏付けが取れたこと。これはその女神とやらが嘘をついてなければの話だが、ほぼ間違いないだろう。そして、目の前の少年以外にも日本からは若くして死んだ者が来ているらしく、それ等は大抵神器と呼ばれる凄惨な性能の道具や才能を与えるらしい。

今のところそのアクアって女神が怪しいが、それでも半神の混じっている俺達を気づかれずに連れてこられるかといえはささか疑問が残る。

これもあくまでこの少年の言葉が真実だったら、の話だが軽い暗示にも引っかけた話していたので、これが嘘だったら俺にはどうにも出来ないだろう。

「すいません、俺の不幸自慢ばかり。そういえば……えつと」

「獅子劫だ。獅子劫界離。それと敬語、慣れてないだろ。そういうのよりはいつも通りに話してくれたほうが俺は分かりやすい」

「あ、はい……じゃなくて、おう。んで、獅子劫さんはどんな転生特典を選んだんです……選んだんだ？」

「んなもんねえ」

「ん？」

あつげらかんに答えられた一言にカズマの目が点になる。今、何と言ったのか持つてない？まさか自分みたいにならないものを……

「だから、んなもん持つてねえって。第一、俺はその神様とやらに送られたわけじゃあ無いんでな。それもつい最近だ。現地で日本人に会うのはこれが初だ。なんならこの異世界歴はお前の方が長いだろうよ」

「は、はあああああゝゝつ!?」

急に立ち上がり大きな声を発するカズマに店主は鋭い視線を向け、すゞごとと着席する。

「だ、騙したのかアンター!」

「いいや?俺は一度もそういうのは話してない筈だ」

「いやでも…話したいことがあるって…」

「ああ、お前さんが日本人だって言ったからな。情報収集って奴だ」

彼、獅子刼界離は会話の間、一度たりとも転生者などという話はない。カズマが口走った日本人という情報が出たので、うまく聞き出しただけだったのだ。

「そ、そりやねえよ…。折角アドバイスを貰えるかと思っただのに…あれ?最近来たって言ったよな?」

カズマは何かに気がついた様に顔を強張らせる

「あのゝ、つかぬことをお伺いしますが…そのお顔の傷は…こつちのモンスターに?」

「いや、地球だ」

(やつぱりいゝつ!?!…いやいや待て待て、落ち着け佐藤和真。ひよつとしたら事故とかかかもしれないしそれだけで人柄を決めつけるというのは差別と一緒だ)

「あゝ、じ、事故とかで…あと、職業は…」

「まあ、あれだ。傭兵みたいな事をやってた。傷はそんなときについたもんばっかだ」

「ノオオオオオオオオオオオー…ツツ!」

「おわつ、どうした急に叫んで」

頭を抱えて絶叫マシンとかしたカズマを宥める獅子刼。ちよつとばかり驚かすつもりで言ったのだがここまでは思わなかった。するとカップを下げにきた店員が困った顔で耳打ちする。

「あの、お客様。さっきからウチの店長が…」

そこを見ると如何にも不機嫌な様子の子よび髭の男。その視線はこちらに向いており、目が合うとフン、と鼻をならすと顎で出口をさす。

「あー、おいサトウカズマ。ここじゃ迷惑だから外行くぞ、外」

カズマは小さく「はい…」とだけ呟き店外へと足を進めた。

それでもまだこちらをチラチラと顔色を伺うような態度のカズマに何を感じたのか、「はあ…」とため息を付き、説明する。

「あのな、傭兵紛いの事やってたからって手は出さねえよ。なにより、俺が危害を加えるのは相手に殺す気があつたときか、悪人位だ。何、今はきちんとその冒険者のルールに従うさ。別に傭兵業が好きだった訳でもないしな。金や素材が手に入るからやってた訳で、それはこつちじゃクエストで出来る。な？俺がそれをやる必要なんて無いだろ？」

急に声をかけられたことに恐々としていたが、考えてみればそれもそうか…と思い、肩の力を抜いた。

「まあ、そう言うなら…。あつと、俺は冒険者って言ったけど、獅子劫さんはどんな職業なんだ？あ、こつちの世界でのな」

カズマは既に認識を改めており、獅子劫を『強面の傭兵で関わりたく無い奴』から『よく分からないうちに異世界転生を身一つでさせられた被害者』となっている。

「ああ、そつちはお前さんと同じで冒険者だ。職業として、じゃなくクラスとしての、な」

「あー…：…ん？でもその見た目ならもつといい職があつたんじゃ無いのか？」

「あん？別に専門職とかに関しちや俺が足元にも及ばないのが仲間にいるんでな。それに全てのスキルを覚えれるんだろ？各方面で便利だし、戦略の幅も相応に広がる。組み合わせによつちやかなりの効果を発揮するものもあるだろうさ」

「！」

（そうだよ！最弱職だつて悲観してたけど受付のお姉さんも言つてた通りに全てのスキルを覚えれるんだ。なんてこつた、それに目も向けずにいたとは…。ふっふっふ…これで色々覚えてアクアに度肝を抜かせてやるぜ。ふふふ…）

因みに今のカズマは悪い笑みが顔に浮き出ており、強面の獅子劫と



並んだことで何か犯罪でも犯していそうな雰囲気になっており、警察に通報されたのは言うまでもないだろう。

尚、二人は警察に絡まれたせいで夕食の時間に遅れたのは完全な余談である。

天翔けるキャベツは何処へ行く

「朝早くにすみません、突然で悪いのですがドラゴンの買取価格というのはいくら位が相場なのでしょうか」

「はあ、ドラゴンの買取価格ですか？そうですね、種類や状態にもよりますけど傷がついていてもかなりの価格ですからね。それに、ドラゴンの肉は経験値も豊富ですからね。欲しがる冒険者も数多くいますし、貴族の方々の御用達ですよ」

・・・

「ここで一番大きな荷台を借りたい？そりゃこっちとしては儲かるからいいけど、高いぞ？五十万は下らないんだが……」

「ここに、確かめてください」

「おお……持つてんのかい、毎度あり。いやあ、お金持ちだねお兄さん。それで、一体何を運ぶ気なんだい？」

「そうですね。ドラゴン……といったらどう思います？」

「あつはつはこの辺にやそんなのは滅多に出ないよ。もつと人里離れた鉱山とかを探すんだね。まあいいさ、教えたくないんならそれでいいのさ。さっきのはちよつとした好奇心ってやつだ、お詫びと言ってはなんだが、少し割引してやるよ」

「それはそれは、ありがとうございます」

「裏手にあるからちよいと待つてくれ」

◆◆◆◆◆

『緊急クエスト！ 緊急クエスト！ 街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！ 繰り返します。街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！』

それは二人の「冒険者」の交流から翌日、街中でアナウンスが響く。「何だ何だ？強力な魔獣……いや、モンスターだったか。そいつでも攻めてきたのか？」

突然鳴り響いた大音量の警告に、獅子劫達はギルドへ向かう足を早める。街には人が出歩いているわけではなく、何処かもの寂しく感じさせる。途中、ジーク達とも合流したが彼らもよく理解できていない

様だ。

「分からない。だが緊急というからには急いだ方がいいだろう」

何やらギルドには既に冒険者が集まっているようで皆が拡声器の様な魔道具を持つ職員―ルナー―に視線を注いでいる。

「皆さん、突然のお呼び出しすいません！もうすでに気づいてる方もいるとは思いますが、キャベツです！今年もキャベツの収穫時期がやって参りました！今年のキャベツは出来が良く、一玉の収穫につき一万エリスです！すでに街中の住民は家に避難して頂いております。では皆さん、できるだけ多くのキャベツを捕まえ、ここに納めてください！くれぐれもキャベツに逆襲されて怪我をしない様お願い致します！なお、人数が人数、額が額の為！報酬の支払いは後日纏めてとなります！」

……………何だと？

言葉の意味を理解できていない彼らとカズマを置き去りにし、事態は進んでいく。

街の外で歓声があがり、見てみると、そこには多数の武装した冒険者、そしてこちらに飛来してくる大量の緑色の球体の姿があった。

訳も分からず立ち尽くしていると、近くの女冒険者であろう人物が何者かに説明しているが、タイミング的にもう終わりの言葉で締めくくられ、詳しい内容を知る事はできなかった。

「俺、もう馬小屋に帰って寝てもいいかな」

そう呟いた男の後ろ姿には見覚えがある。なぜなら昨日短い間とはいえ、印象深い話をしたのだから。

「おい、サトウカズマ。この騒ぎは一体何だ。キャベツって、農家の手伝いでもすんのか？」

そう話しかけるとこちらに気がついたようで、疲れたような無気力な表情で振り返る。

「あつーアンタ達は…獅子劫きさんと…確かジーク達…。だったよな」

「ああ、先日の。名はサトウカズマだったな。それで、これは一体どういうこと何だ？」

ジークが辺りを見回すが、そこは既に混沌としていた。飛来する緑

の玉に冒険者達が群がり、群がられ。打ち落とされ、吹き飛ばされる。そんななんとも言えない闘争が繰り広げられていた。

「あ、ああ。大量のキャベツが飛んで来ててだな。何でも、この世界のキャベツは動くんだと。しかも反撃してくるらしい。ただ、何か今年のは出来が良いらしくてな、一玉一万エリスだってよ。……はあ、自分で言っても頭がおかしくなりそうだな」

理解は出来る。出来るのだが、全くもってそれが納得いかない。入ってきた謎の情報にはもはや疑問点しか見つからない。……ある主従を除いて……

「凄いぞライダー！キャベツとはああやって取られていたのだな……！ユグドミレニアの彼らもキャベツを獲っていたのだろうか」

「うん、凄い！見てみて！このキャベツ目があるよ！しかもキャベツキャベツだって！どっから声出してるんだろ？」

片や無知、片や阿呆。自分の中の常識ではそもそもキャベツの栽培を知らなかった者。知ってたけど忘れてる者。これだけで大きな違いはあるが、どちらがマシかは語るべくもない。

「……お前さんらは元気だな」

「ところで獅子劫さん達は どうするんだ。参加するのか？」

「まあ、一応参加しよう。一玉一万エリスならやらない選択肢は無いしな。……カズマはどうするつもりだ？俺は参加したほうがいいと思うぞ。金欠なんだから？」

「はあ……やっぱそうですよねえ。……しようがない、不本意だが、ヒジョーに不本意だが金のためならしようがない」

苦労人の冒険者二人は、ようやくキャベツ収穫へと勤しむ。

そして最前列では、

「キャベツが飛んでやがる。つつうことは収穫も農地もいらねえってことか……？まあいい、どうせ優等生の好きそうなゲテモノなんだろうしな！うし、いっちょ小遣い稼ぎと行くか！」

勝ち気な笑みを崩さず、早口にそう告げるとモードレッドは我先にと飛び出し、キャベツに掌底を食らわせ次々と回収していく。

「ほらー！キャベツ飛ぶじゃん！僕なんにも間違ってたでしょ

…ってあーっ！抜け駆けなんてズルいぞー！」

「……先の説明を聞いた限りでは、出来るだけ逃さないほうがいいだろう。俺は彼等が取り逃した物を回収するでしょう。フランケンシュタイン。君はどうする？」

「…う」

先に駆け出した二人とはまた別に、向かってくるキャベツを掴みながら参加するジークフリート。問われたフランケンシュタインはメイスを構え、周辺のキャベツたちを殴打していく

そしてキャベツにボコボコにされる騎士と昨日にも見た爆裂魔法。過剰戦力な気もしなくもないが、こうしてキャベツ収穫祭は始まりの鐘を鳴らしたのであった。

◆◆◆◆◆

「納得がいかねえ…」

キャベツ回収も終わりを告げ、冒険者達はホクホク顔で報酬への期待を顕にしている。しかしそんな浮ついた空気とは裏腹に、そこには如何にも不承不承ながらにキャベツを貪る者達がそう呟いた。

「ん？」

一言一句違わぬ言葉が揃い、お互いに顔を上げ、言葉の主を探す。それはすぐに見つかった。綺麗な金髪に勝ち気な碧眼の騎士鎧の少女と、緑のジャージを着た青年。

特に青年側、カズマは一言「悪い」と言い残し、我が意を得たとばかりにそのテーブルへと近づいていく。

「だよな！アンタもそう思うよな！」

「誰だテメエ？…ってああ、お前がアレか。日本からの転生者か」

急に近づいて話しかけてきた男に怪訝な目を向けるも、すぐに納得したように首を振る。

「な、何のことでしょう」

「あー、とぼけなくてもいい。オレのマスターが教えてくれたんだよ。あ、マスターってのはそこにいる厳ついオッサンの事だな。昨日話したって聞いたぜ」

「あつ、獅子切さんか！そういうえばアンタパーティーに居たな！」

名前を呼ばれたからか、話を切り上げて獅子切が戻ってくる。

「何だカズマか、どうしたんだ？」

「いや、あんな巫山戯たキャベツが美味しいのに納得出来なくて…。そんな時たまたまハモったからこの人とその気持ちを共有したくてだな…」

「だよな！何だよコイツ、オレんところがどんだけ苦労したか分かってんのか！何で収穫だけでいいんだよ。そんだけならあの脳筋共でも十分じゃねえか。メシマズ王国：ゲテモノ：食えればいい：何で体の資本を作る飯を疎かにしちまうかなあ…。大体あのゴリラの飯なんか土もついているポテトを握りつぶしたただけじゃねえか、舐めんな！美味しい飯とかは期待してないからせめて調理する姿勢を見せろよ！あんなもんが料理に入るか！ウチの奴ら全員馬鹿か！死ね！」

どんどんとヒートアップしていき、まさに怒り心頭といった様子で怒鳴り散らす。その声はギルド全体に響いていた様で、ギルド中の視線がこのテーブルに集中する。見れば、カズマも目を丸くして驚いている。

「お、おう…。まさかお前がそこまで食に拘る奴だったとは…まあ落ち着け。見られてるぞ」

「…おう、悪い。ちよつと言い過ぎた節は…：無いとも、言えなくもないっ…！」

(凄い形相で齒軋りしてる!?!どんだけ嫌なんだよ!?)

その念のこもった視線だけで簡単に人が射殺せるだろう。さらに、悔しそうに認めているように聞こえるが結局殆ど認めていない。

「ってメシマズ王国？もしかしてアンタ、イギリス人か？」

「まあそうだな。オレの名ははモードレッド、セイバーだ。どん位の付き合いになるかは知らんが、まあ宜しく頼むぜ」

「俺はサトウカズマ。職業は冒険者だ。よろしく。痛っ、イタタ！もうちよい手加減を！」

バンバンと背中を叩きながら挨拶をするモードレッド。カズマにとっては痛すぎるようで悲鳴をあげている

「わ、私が今から入ろうとしているパーティーのリーダーがほかのパーティーに…これが放置プレイというやつか…!」

「おや、あの人達は…確か少し前に騒ぎになったパーティーの人ですね。確か先程も大活躍だったとか。…何を話しているのでしょうか?」

「何よー、そんなのどうでもいいでしょー?そんなことよりもダクネス参加のパーティーよ!」

「はい、それもいいですけどアクア。あまり飲み過ぎないでくださいね?お金もそんなに大量にあるという訳ではないのですから」

「大丈夫大丈夫!これからたんまりとキャベツの報酬が出るんだもの。ちよつと位ツケたって問題無いわよ。そうよ、めぐみんも一杯だけどう?」

「で、では失礼して…」

「駄目だぞめぐみん、小さい頃から酒を飲んでいたら頭がパーになってしまうぞ」

「ほう、私の何処が小さいと?自分がそんな大きなものを持っているからって調子に乗らないでください!私だってあと一つで結婚だって出来る年齢なんです。子供扱いしないで頂こう!」

女三人寄れば姦しいとはいいが、ここまで性質が違う者同士が揃うのも珍しいだろう。そんな他愛もない話を続けていると、何やらギルドの外が騒がしいことに気づく。

「—すみません。素材の買い取りをしてもらいたいのですが」

ギルドの戸を開け、入ってきたのは褐色肌の青年。当時ギルドに居たものは「あのアークプリーストか」と納得するが、青年——天草四郎は周囲の視線など気にもとめていない様子でギルドのカウンターに向かう。対応するのは赤組の受付を担当していた女性。

「はい、素材の買い取りですね。どちらにあるのですか?よろしければ回収もギルドの方で請け負いますが」

「いえ、既に回収しているので大丈夫です。しかし何分大きいもので、このギルドの外に台車ごと置いていきます。それで、悪いのですが外で査定して頂くとありがたいのですが」

そう言うと、受付嬢と共にギルド外へと歩いていく。そして姿が見えなくなつて直ぐ、甲高い悲鳴が響き渡る。騒ぎを聞き付けた冒険者達は何だ何だと野次馬根性で一斉に外へとなだれ込んでいく。ギルド内にはもはや殆どの人が外へでており

「なあ、獅子切さん、モードレッド。俺達もちよつと見に行つてみないか？」

そして何かを中心に通路は人でごった返している。何とかくぐり抜けて前列へと追いつく。そこにはアクア達もいるようだった。

しかし何より、一際目立つモノがあった。

「…ドラゴンだ」

誰が呟いたかは分からないが、ストーン、と心にそのフレーズが浸透する。そして査定を引き継いだのか、茶髪の受付嬢からルナさんと話している男は、ドラゴンを誇るでもなく淡々と死骸の状態を説明している。

「これは…グリーンドラゴン。それも何てきれいな状態…！」

そう、本来強力なものほど傷は多いのだ。強いから中々斃れない、強いから一点集中が難しい、強いから素材の為の加減が出来ない。しかしこれはどうだ。少し血に濡れた胸と両断された首以外の外傷は見当たらない。

「ここまできれいな状態にほぼ全身ですと…すみません。そこは詳しく見ないと把握できませんが…：恐らく、2000万は下らないでしょう」

「2000万!!？」

そのあまりの額に冒険者達は色めき立つ。始まりの街アクセルは国内で最も魔王城から離れた位置にある。応じて、危険なモンスターや賞金首なども居るはずがなく、この冒険者達の懐はとて潤っているとは言えない。そんな中に突然の大金がきたのだからその驚きもひとしおだろう。

「それでは解体所へ運びますね。報酬は後日、ということになります。がよろしいですか？」

その冒険者はルナさんの案内に従い、ドラゴンに乗せた台車を一人



で引いていってしまった後、興奮冷めやらぬと言った様子の冒険者達。そしてそれを羨むカズマ。

（俺だってマトモなチートだったら馬小屋生活じゃないし、空飛ぶキャベツなんておかしなのをやらなくて良かったのに……）

これがきつかけかは分からないが、しばらくアクセルの街での依頼受注率が5割上がったらしい。その分失敗も増えたらしいが……。

## 赤剣従者の装備シヨツピング／（頭のおかしくない） ウイザードの会合

キャベツの大収穫やら突然のドラゴンやら色々と濃い一日が終わり、新しい朝が始まった。

「ほお、ここが武器屋か。ブリテンには無かったが中々いい雰囲気じゃねえか。まあ並んでんのは普通だけだよ」

「おい、頼むからあんまり失礼な事を言うな…ああもう、こつち見てるぞ」

「オイオイ、オレたちは客だぜ？オレは客としての評価をモガモガ」  
「ストツプ！取り敢えず黙れ！」

獅子切達、赤セイバー組は武器屋へと来ていた。これはモードレットがこねた事もあるが、獅子切がカモフラージュと実用の両方を求めてやってきていたのだ。

「なあ店主さんよ。一番いいのってどれだい」

この店の店主はそう聞かれると先程まで血管が浮き上がっていた顔は元に戻り、裏手からいくつか装備を引っ張り出した。その種類は全身鎧やら革鎧、いかにもといったローブまで様々だ。そしてその中の一つの全身鎧を指した。

「ウチで一番性能がいいのはこれだな。この全身鎧にや少量だがアダマタイトが使用されてる。魔法対策もバツチりだな。作ったのも一流の鍛冶師でデザインにもこだわってる。勿論値は張るけどな」

「いや、俺は全身鎧はいい。もつとこう、革の籠手やら最小限のがいいんだが」

「それならそうと早く言え。出してきた意味が無いだろ」  
「悪い」

やれやれとため息を吐きながら出したものをしまっていく。

残っているのは革の籠手やブーツ、鎧の内側に着るであろう鎖帷子などだ。

「ん——、コレとコレとコレに…後はコレだな。他には…色々ある

な…まあついでに買つとくか」

獅子劫が選んだのは、黒く塗つてある革のブーツと籠手、各所関節のサポーター、ミスリルとかいう金属で作られた鎖帷子、それとは別に数本の短剣、ロープとワイヤーを2セットずつ。そしてこちらはモードレッドの要望でこの店ではそこそこ良い剣を3本。

結構買つてしまい出費がかさんだが、それでもまだ宝石の分とクエストの分とで生活するのに十分なエリスはある。これに加えてキャベツの収入も得られるというのだからアクセルの他の冒険者が羨むことに違いない。

「おう、羽振りいいねえ。普通この街の冒険者つてのは馬小屋生活が基本で装備の一括買いなんかしないんだが」

「まあいいだろう？金は払うんだし」

「ま、そうだな。これからもうちの店を鼻肩してくれるとありがたいがな」

「すいませーん」

「いらつしやい」

店主と話し込んでいると誰かが来店してきた。この店の店主ということもあって、即座に話を切り上げぶっきらぼうな挨拶を返す。

「あれ、獅子劫さん？」

「何だカズマか」

振り返ると、それは最近よく見る緑ジャージの青年だった。

「アンタも買い物か？」

「そういうお前こそ。何だ、やっぱりジャージじゃクエストもロクに出来ないってか？」

「まあ、そうだな。少しは余裕が出来たんで装備を買いに来たんだ。ジャージじゃ限界があるし…：…何よりカッコ悪い」

バツの悪そうに呟いたカズマ、その言葉はきつと両方が正解なのだろうが、些か後者の方を強く感じた。

「おお、何かこういう雰囲気、いいな」

「お？分かるか？」

「分かる分かる！今すつげえファンタジーしてるよ俺！」

「でかいカエルも大概だがな」

矢鱈と褒めちぎり、モードレッドと共にはしやく光景は年相応に見える。

「うむ、これはいいものだ」

「お、中々目の付け所がいいな。それはウチにある中でもいい鍛冶師が打ったやつでね。ちよつとだけ高いがそれ以上の活躍はするぜ」

「マジか、…予算は…ふむ、じゃあそれにします」

「毎度あり、んじゃ…」

「ちよつと待った」

「…なんだい嬢ちゃん急に」

そのやり取りに、モードレッドは異議ありとばかりに割り込む。そしてカズマの選んだ剣をカズマに投げ渡す。カズマは慌ててそれを受け取るも、急に持った剣の重みに耐えきれずによりかけてしまう。

「あ、あぶねえだろ！急に何すんだ！」

「お前、それを構えな。そんでゆつくりと振り下ろすフリをしろ」

「え、こうか？」

少し広いスペースで言われた通りに剣を振り下ろす。すると店主も何かに気がついたようだ。

「あー、坊主。剣はいつくらいか振ってる？」

「…三日前位からだけど、何かまずかったか？」

「そうだな。オイカズマ、お前どんなスタイルを想定してんだ？」

「えつと、こう魔法剣士スタイルで色々出来るようなスタイルなんだが…」

「結構あやふやだな…よし、今度はこれ振って見ろ」

そうして投げ渡されたのは先程買ったばかりのショートソード。それを振り下ろしたカズマは先程よりも振りやすい事に気づく。

「あれ？こつちのがやりやすい。何でだ？こつちのがでかいのに」

「そうだろうな。あれは幅広の片刃で、お前の用途にはあわんだろ。まあ慣れれば別だが、そのスタイルなら最初はこつちのがいいだろう。どうしてもっていうなら別だが…」

「いや、こつちの方がいい。何と言うか…今持ったばつかなのに変だ

が手に馴染むって言うか…」

「だろ？だがそれだけじゃあ駄目だからな。もつといいのが見つかるまでのつなぎとして使えばいい」

一目見ただけでそこまで分かるのかよと思いつつも、実際に試してそうだったのだから凄いとしか言いようが無い。さつきは浮かれていたが、今ではもうこれを買うことしか頭に無い。

「……あ、すみません。これと同じの下さい」  
「毎度」

いい買い物をしたとホクホク顔で出ていき、店外に待機している仲間と言葉を交わしすぐに戻ってくる。

「あ、危ねえ。これの他にも買うんだった」

剣だけを買いに来たと思っただらどうやら装備品全体を求めているらしかった。それでも剣一本で出ていったのはうっかりさんと言わべきか、それほどまでに気に入ったのか。

「そっちはウチのマスターの方が詳しいぞ」

「お願いします！」

「……まあ、別にいいが」

カズマはその後、充実した異世界ショッピングを堪能したのだった。

「…墓地で何してんだお前ら？」

「おや、昼間の人じゃないですか」

「何故こんなところに…？…はっ！そうか、昼間の恩につけ込んでこのパーティーを喰い物にするつもりだな！それに追い込まれたカズマはこう言うのだ『おい雌豚！お前の唯一の取り柄のそのいやらしい体で何とかしろよ。ほら、お前さえ差し出せば俺達は幸せなんだから』…と。そして売られた私はその逞しい体で組みふせられ…！くっ、例え仲間に売られようと私は騎士だ！不当な暴力には屈さない…！そして言うのだ『威勢はいいな嬢ちゃん…だがこれに耐えられるかな？』最初は抵抗を続けるものの段々と身も心も堕ちていき…くっ

…殺せ！」

勝手に妄想してくねくねしているダクネスを目の当たりにし、気の毒そうな視線をパーティー一行に向ける。

視線を向けられたカズマはというとアクアに引つ張られ、こそこそ話で話していた。

「ねえねえカズマさん。あなたいつあんな人と関わったのよ。絶対力タギじゃないわよ。流星に女神の私もそこまでは庇えないと思うの。ほら、何したの。正直に謝ればまだ許してくれるかもしれないわよ」「ちげーよバカ！いやまあ違わなくもないけど、昼間俺がお世話になった人だよ。お前もいただろ！それで、日本人だって。何か転生した訳じゃ無いのにここにいらしいんだが、お前何か知ってるか？」「は？そんな訳無いじゃない。カズマさんからかわれてるんじゃないのプークスクス、すぐに信じ切っちゃうカズマさんって子供ねえ」

その日の夕方、共同墓地付近でキャンプしていたカズマ達を見かけた獅子劫がその中に加わり、またもや一騒動が起きるのだがそこは割愛する。



そして時を遡り夕方、ジークはギルドの一席にて一人の少女と会話をしていた。

「うーん、魔法がどうかって聞かれてもねー。なんか覚えてるからやってるとしか…。大体ジークくんはアークウィザードでしょ？それならただのウィザードの私なんかよりもアークウィザードの先輩に頼んだほうがいいと思うんだけど…」

そう応えるのはリーンという赤茶髪のポニーテールの少女。大きなモフモフのしっぽが生えている。登録した日にちよっかいをかけたきた男の仲間だという。それでたまたま見かけたため謝罪しに来たのをそのまま聞いた感じた。

「そうか……。すまない、邪魔をした」

「あ、いやいや全然、全然邪魔じゃないから！」

「えーと、それで…この街にいるアークウィザードなら…あつ、そこ

にいるよ。あの子いつも一人でクエスト受けててね。なんか独りがいいって感じのオーラ出してるから皆パーティーを組もうとしないんだ。まあ、それでもピンチになった冒険者を助けてるって話だから、話を聞くくらいは出来るかもよ」

件のアークウイザードは黒髪赤目の少女で、めぐみんのような紅魔族だという。彼女はギルドの一隅で真剣な目で黙々とトランプタワーを作り上げていつてる。

「そうか。教えてくれてありがとう、じゃあ行こう」

「え、ちよ、私はいいつてば！ちよつと！」

ジークは止めるリーンの腕を引っ張り、そのアークウイザードの少女の方へと向かう。こういう時に話を聞かないのは元来の性質かアホの子が影響しているのか。

ジーク達が隣に来てても彼女は気づいていない様子で、慎重にトランプを積み重ねていく。

「すまない、少しいいだろうか」

声をかけると今度は気がついたのか、その少女は辺りをキョロキョロと見回し、視線が重なる。少しの間何が起こっているのか分からないような顔をしていたが、相手が自分だということに気づくと、建てられていたトランプタワーはその手によって破壊される。

「ひゃ、ひゃい！あつ、パ、パーティーメンバー募集の紙を見てくれたんですか!?えつと私その、ま、まだ上級魔法は覚えてたで、最近13歳になりました。クエストは一生懸命頑張ります！それと…で、できればお休みの日でも一緒に過ごしてくれたら嬉しくて…いや違って！その…その、不束者ですが、よろしく願いします!!!」

「……………うわぁ」

何だろうかこれは。

話しかけた途端ものすごい早口でまくし立てられ、口を挟む暇すらない。見れば隣のリーンも少しだけ顔が引きつっている。それに（相手の勘違いだが）パーティーに対しての言葉ではない。その言葉は嫁入りまで取っておくものだ。

取り敢えずこの少女の誤解を解いておく。

「その、すまないがパーティーになりたい訳ではないんだ」

「…へ？あ…わ、私の勘違い…？」

「まあ、そうなるな…」

「…す、す……」

「す？」

「すいませんでしたあーっ！」

少女も勘違いだと分かり、その顔を歪ませ羞恥に震える。ぼっちの彼女はこの一幕だけで、勘違いして突っ走った恥ずかしさと、知らない人と話す緊張感、そしてこの空気の気まずさやらと複雑な心で、テーブルの上ではそんな心境を表すかのようにトランプが散乱していた。

「うう…すいません…」

「いや、用件を伝えなかつた俺こそ悪かつた」

「いえいえそんな！私が早とちりしたのが悪いんです」

「だ、だが俺も…」

「私が勝手に…」

このままではいつかの様に延々と続いてしまうだろう。それを見越したリーンは両者の間に割って入り、お互いが悪かつたという事で話をつける。これでようやく本題に入れる。

お互い自己紹介を済ませた後、最近冒険者登録をし、アークウィザードになったが、その魔法があまり分からないため、ウィザードの冒険者に教えて貰いたいということ話を話した。

因みに、この場合の分からないは効果範囲やその応用であって、魔法そのものの説明は簡単にだがウィズを受けている。

「じゃ、じゃあ！それを教えるついでにいつ、一緒に！クク、クエストに行きませんか！」

彼女にしては勇気を振り絞った一言。これには彼女を心配していた受付嬢もニツコリ、密かにガッツポーズをとっていた。

「いいのか？こちらとしては願ってもない事だが」

「いいんですか！見たかしらめぐみん。わ、私だってやれば出来るんだから！」



「よし、ならば何か丁度よさそうなものを…」

「ジャイアントトードは…：…なんでか今はいないから、そうですね」

「ねえー、そういうのって普通私にも言わないー？」

自然と三人でやるような雰囲気になっていくが、自分を無視して行われる会話に野菜ステイックを齧りながら不満の声を上げるリーン。確かにこの二人が主に話しているだけで、リーンは無理やり連れてこられたのにも拘らず蚊帳の外にされたという非常に気に入らない事になっていた。

「あう…：…すまない、リーン。君にも相談するべきだった。…やはり俺はどこか抜けているのだろうか…：…」

「あわわ、すいませんリーンさん！皆で話し合ってるときに色々言いたいのに出来ないって辛いですよ、何で私ってここにいるんだろ、とか気づいてほしくて声をかけたけど『あれ？いたの？』とか言われるのが怖くて…：…。ああ、なんてことを」

「いや、別にそこまで気にしてる訳じゃないけどさ…：…」

過剰に落ち込む二人に毒気を抜かれたのか、頬をかき呆れたようにため息をほく。

「ま、いいよ。珍しい同年代のウイザード職だし、君たち二人だけだと色々ありそうだからね。でも二人には期待してるよ？…：…なんたってアークウイザードだからね！」

「！…ああ！任せてくれ！…：…といっても俺は教わる立場だが…：…」

「はい！…：…ががが…：…がんばりましゅー！」

「あはは！…：…ちよつと緊張しすぎ！…：…もつと軽くでいいんだって！」

リーンにより、その場の堅苦しい空気は霧散し、少しぎこちないながらも和やかに話す三人の姿がそこにはあった。

森の調査クエストくワイイ？怖い||より怖いく

「そういえばジークくんって魔法は何を覚えてるの？」

「あ、そういえば聞いてませんでしたね」

クエストを受けて暫く、目的地へ向かっているとリーンが聞いてきた。ジークはそういえば話していなかった、と思い、懐の冒険者カードを見る。

「俺は…初級魔法と中級魔法、それと炸裂魔法だな」

「へー、上級魔法はとってないんだ…：炸裂魔法？」

「ああ、上級魔法は扱いが難しいと言われてな。取り敢えずは中級魔法で慣れてからの方がいいと思ったんだ」

「炸裂魔法ですか!？」

カードに書いてあるとおりに言うとは何かゆんゆんが食いついてきた。それは問い詰める様な表情ではなく、かなりの驚きを含んでいた

「あ、ああ。知り合いのリッチー…」

「リッチー？」

「いや、リ、リッチなアークウィザードに教えてもらったんだ。この炸裂魔法は爆発系魔法だけあって高威力な割には消費魔力も少なく、使える機会も多いらしいから覚えてみたんだ」

「ふう〜ん、リッチなアークウィザードかあ…。やっぱし上級職は稼げるんだねえ…」

「…：え、あれ、何か思ってたのと違う。炸裂魔法使いつて普通はもつと珍しいと思うんだけど…。ここ初心者街だし…」

ゆんゆんは自分の思う反応との違いに戸惑っており、そんなゆんゆんを見てリーンはあはは…と苦笑し、

「ほら、最近毎日の様に爆裂魔法を使うウィザードがいるからね。感覚がマヒしちやっただのかな〜、なんて」

その原因は紛れもなく自分のよく知る人物な訳で…

「すみません！めぐみんがすみません！」

実に見事な礼だった。とだけ言っておく。



「ここが例の森か」

「はい、確かにここです。木の上のスライムや茂みに隠れているモンスターに注意しましょう」

目の前には深く広い森、木々が生い茂って少し暗い。

ここはゆんゆんが以前に来たことがある森らしく、対策もしてあるとのこと。

何故こんなところに来ているかと言うと、ここが依頼の場所だからだ。

ジーク達がこの世界に来る以前の話だが、最近ここにはかなりの力を持った上級悪魔がいた。そいつは既に退治されたとはいえ、あれ程の力を持つ存在というのは少なからず影響がある。だから、今現在の森の様子を調査するというのが今回受けた依頼の内容である。

「でも調査ってどこまでやればいいんだろ。ゆんゆんさん分かる？」

「あつ…」

「えっ」

問われたゆんゆんはピタリと沈黙し、口をパクパクと開閉させ、目が忙しなく動き出す。誰が見ても分かるほど狼狽していた。

ここでその反応を見せるということは即ち依頼を受けたゆんゆんすらも把握していないと言う事であり…

「「……………」」

これは不味いんじゃないか？皆がそのような雰囲気醸し出したところでゆんゆんがハッと何かに気づいた様に自らの荷物を探り出

す。

隙間に何やらチェス盤のような物が見えたが何に使うつもりなのだろうか。

「あつた！ありましたよー！」

取り出したのは一冊のノート。表紙はピンクで可愛い見た目そこには堂々と『友達会話ノート』と書かれていた。

「これに確か書いてたんですよ。お、お友達のお話を忘れない様にするためでしたが偶々書いてたんです！」

パラパラとめくるとびっしりと会話が写し取られており、正直この努力を他の方向に向けた方がいいと思う。

中にはどう見てもたかっているようにしか見えないものや、詐欺の常套手段等の会話すらも記録されていたが気づいていない様だ。

「ああ…うん。ありがとう」

「え!?ちよ、なんでそんな可哀想なものを見る目を向けるんですか!？」

涙目で訴えるゆんゆんだが、実際にそうなのだから擁護のしようもない。

…

「『ブレード・オブ・ウィンド』！」

「『エナジーグニッション』！」

薄暗い森の中、吹き荒れる風の刃と内部から焼き尽くす蒼い炎がコボルドの身を骸へと変える。

「これで最後か。『ライトニング』」

その雷撃により、最後に残ったコボルドも撃破し、戦闘を終えた一行は少し離れた場所で小休憩をとる。

「やっぱりゆんゆんさんの魔法は強力だね。私なんかとは全然違うや」

「いえいえいえいえ！リーンさんこそ対処の仕方が私よりも上手で、

私は冒険者としてはまだまだだなんて思いました！」

「えへへ、ありがと。でも私だってまだ新人だからね。すぐにゆんゆんさんの方が上手くなるよ」

「あ、ああありがとございます…」

お互いに褒め合い、何だか気恥ずかしくなり会話が途切れた。

そこへガサツと茂みで何かが音をたてる。二人は即座に警戒するが、出てきたのは付近の警戒を終えたジークであり、肩の力を抜く。「大丈夫だ。少なくともこの辺りにはいない。だが俺が見落としていただけかもしれないので念の為に気は抜かない方が良さだろう」

「ジークくん。せめて何か一言言ってから来てよね。モンスターかと思っただじゃんか」

「悪い。配慮が足りなかったか」

ジークもその場に腰を下ろし、ゆんゆんの持つてきた紅茶を頂く。ユグドミレニアのもの比べるとやや劣るが、それでも市販のものとしては中々良い品質のものを使っているらしい。

「それにしても、ジークさんも魔法に慣れてきましたね」

ほう、と息を吐きゆんゆんが一言。それにカップを置いて返す。

「ああ、やはり話に聞くのと実際に見るのでは大分違うな。ありがとうゆんゆん。俺なんか時間に時間を使ってくれて」

「い、いえそんな。私もヒマでしたし…誘ってくれて嬉しかったです。私って人見知りで…今回誘うのも断られたらどうしようって思ってた…。こんなことができるなんてえへへ…ちよっと、嬉しいですよ」

そう言つて、ゆんゆんは上機嫌に紅茶を注ぎ、リーンは普段味わえない紅茶を堪能する。そんな彼女たちの何気ない事でも新鮮味を感じるのとはここが異世界だからか、それとも…

「さて、では休憩ももう十分だろう。そろそろ依頼を続けよう」

重い腰を上げ剣を腰に下げ、声をかけると、異論は無いのか二人とも直ぐに立ち上がる。

暫く探索するが、これといって異常は見当たらない。モンスターには襲われるが十分に対処可能であり、またこの森に生息が確認されているものばかりだ。

そろそろ帰ってもいいだろうと判断し、探索を打ち切る。

「いやー、前衛がいなくても案外何とかなるもんだね。これもゆんゆんさんが率先して倒してくれるからよね」

「ああ、そうだな。近接戦がウィザードは不得手だと聞いていたが、そうとは思えないほどの戦い振りだった」

手放しに称賛する二人に恥ずかしくなるが、自分だけ言われてばかりではいられないと、こちらも言い返す。

「い、いえ、それを言うならリーンさんだって。魔法で木を切って足止めと撃退を同時にするなんて考えもありませんでした!」

「いや…あれはダストにやったのがたまたま使えただけというかな……」

リーンも褒められるが、その発想の元が元だけに素直に喜べない。

「ジ、ジークさんも的確に炸裂魔法を使っていたじゃないですか!」

「あれは君の教え方が良かったからだ。俺は指示に従っただけに過ぎない」

自爆。コイツに振ったのが間違いだった。無駄に素直に返す為に問いかけた方が恥ずかしくなる始末。

結局ゆんゆんの望み通りにはならず、顔を羞恥に震わせ俯き加減の姿勢になるのであった。

「おや、カワイイな。初めて見たが、あれは兎だろうか?角が生えているが…あれもモンスターか?」

「あ、本当だ。すごいこっち見てるね。私野菜スティック持ってるしあげようかな?」

茂みの影より現れたのは一本の角がはえた可愛らしい兎。その兎は赤く円な目で首を傾げている。

その愛らしい仕草に、ジークとリーンは警戒心を緩め、リーンに至っては野菜スティックを上げる為に手招きをしている。

「ほら、ゆんゆんさんも見なよ。かわいいよ?」

その言葉に現実に引き戻されたゆんゆんはリーンの指す方向を見て顔を綻ばせ…その直後に血の気が失せる。

「リーンさんっ!危ないっ!!」

その切羽詰まった声にいち早く反応したジークは、しゃがんでいる彼女の首根っこを掴み、こちらに素早く引き寄せる。

その直後

バズッ！

鈍い音を立てて木屑が舞う。見ればさっきの兎が角を木に深く突き刺していた。角は根本まで刺さっているらしく抜け出せないのか、足は宙をかく。

「イテテ…ちよつと！急に何を…」

するの…そう続く筈の言葉は打ち切られ、被害を見たリーンの顔はみるみるうちに青褪めていく。

「そ、それは一撃ウサギって言うモンスターで、その見た目から油断したところを額の角でグサツといくギルドでも指定されされていた危険な肉食のモンスターで十匹位の群れをつくっています。…以前私も見た目に騙されて酷い目に合いました…」

ゆんゆんの解説が終わった直後、またもや茂みからガサガサと音がする。

音を立てないように覗き込むと、そこには穴だらけになって死んでいる一撃熊の群れと、それに群がり死肉を貪り喰らう一撃ウサギ達。その数はパツと見ただけでも百はいるだろう。

見た目は愛らしい真っ白なウサギが血に濡れながらミチミチと音を立てて肉を咀嚼する姿は軽くトラウマもの。

(…：多くないか？十匹の群れではなかったのか？)

(し、知りませんよこんな数!?!こんなに群れるなんて聞いたことありません！)

あまりの光景に言葉を失う三人。そういう事に慣れていたジークと耐性のあったゆんゆんは兎も角、これを見たリーンは思わず後ずさりしてしまい枝を踏み折ってしまった。！ギョロリ、食事をしていた彼らの目がこちらに向けられる。

「バ、バ、めん」

そうしている間にも一撃ウサギ達はこちらに狙いを定めており…

ギンツ!

「逃げるぞー!」

第一陣が雨あられの様に飛来するのを捌きながら固まっている二人に指示を出した。

— …

「はあっ、はあっ… 『カースド・ライトニング』!!… つ全然減らないっ!」

『ライトニング』!…:は、走りながら詠唱するのキツツイ…! 『ブレード・オブ・ウィンド』!」

逃げる、逃げる、寄せられたら一貫の終わり。 鎧すら貫くその角は魔法職かつ軽装の彼女たちには文字通り一撃で命取りとなるだろう。

迎撃はしているが数が数、焼け石に水もいとこだ。 近づいてきたものはジークが斬っている為に未だに傷こそないものの、延々と湧いてくる一撃ウサギは勢いを止めることは無い。

いくらジークでも一度に捌くことのできる数は限られている。 ましてや今のジークの身はホムンクルス。 彼とて疲労は蓄積するし、当たったらタダでは済まないのだ。

「ど、どんだけいるのよ!?!」

「もう体力が…!」

一撃ウサギは一向に減る気配を見せず、その様子は中々に心に来るものがある。 ジークはまだ大丈夫だが生粋の魔法職である彼女らは既に体力が尽きかけている。 この状態では追いつかれるのも時間の問題だ。

「すまない、あと少しだけ耐えてくれ! そうすれば打開できる筈だ!」

「本当ですか!?!」

「ああそうだ! だから今は走ってくれ!」



それはきつと嘘ではない。短い付き合いとはいえそんな嘘を言うようには見えない。

そして瞳は澄んでいる。

これは何かを信じる人の目だ。

そんな人物がこうまで信頼しているのだからきつと本当なのだろう。口に出さずとも二人には分かった。

「分かったーでも限界もあるからねー」

「が、頑張ってみます！」

それを信じ、ペースをあげる。追いつかれまいと必死に逃げる。続々と出てくる一撃ウサギを跳ね除けながら走り続けると、とうとう木々が途切れる。どうやら森の出たようだ。

森を抜け出せたことに安堵した二人だが、直ぐ様逃げ出そうと前を向くと――

「ウソ……何でこんなところに……」

「リーンさん下がって！」

「グリフォンがいるのよ!?!」

――それは、曲がった嘴を持ち、確かな知性を感じさせる黄金の瞳の大鷹。しかし通常の鷲と違うのは大きさだけではない。人間如き簡単に引裂けそうな鋭い鉤爪、そして下半身には獣の肢体。

現れたそれは、ただ静かにこちらを見下ろしていた。

## 魔笛と疑問と友達と

——それは、曲がった嘴を持ち、確かな知性を感じさせる黄金の瞳の大鷹。しかし通常の鷲と違うのは大きさだけではない。人間如き簡単に引裂けそうな鋭い鉤爪、そして下半身には獣の肢体。

大きく広げた翼は今も宙を捉えている。

突然現れた第二の難関。余りに唐突すぎるソレの登場に高速で考えを巡らせる。

——グリフォン等の高位の魔獣はアクセル付近にいないのでは無かったか？

——ただでさえ強力な魔獣に今の状態で逃げられるのか？

——何故、下半身が馬なのか？

臨戦態勢に入った二人を尻目にジークはその騎乗者に声をかける。

「来て直ぐで悪いがまだ後ろに大量にいる！頼めるか、ライダー！」

「あ、マスター！ほら、降りてヒポグリフ」

喋ったのはその騎乗者、アストルフオ。ヒポグリフを降ろすと自らも地に足をつけジークと会話を始める。

ゆんゆん達は何が起こっているのか分からず、固まる。

直後、一匹の一撃ウサギが追いつき飛びかかる。それは防ぐが他の群れも追いかけてくるのが見えた。

「くっ、すまないが任せた！」

「よし来た！ほらほら、三人共ヒポグリフに乗りなよ。僕のヒポグリフってばすごいんだぞー！」

「い、いえ。と、友達だなんて…」

「そこなの!?!もつとほら、こう、色々あるでしょ！」

突然現れた謎の人物の言葉に困惑するも、意味は理解出来た為グリフォン、否、ヒポグリフへと近寄る。

ヒポグリフは身を屈めて乗りやすい様に待機しており、ジークはもちろんだがリーンとゆんゆんも恐る恐る騎乗する。

ヒポグリフは一度嘶くと翼を広げ上空へと踊りだした。

「ぎゃあっ！もう、飛ぶなら言つてよ！」

「あれ？あの人が乗つてないのに飛んじやったけど……」

下を見ると一撃ウサギ達が地を覆い尽くすまでに増え、まだまだ森からなだれ込む。

追っているのは勿論地にいるアストルフオ。つかず離れずの位置で上手く逃げている。

「ちよ、ちよっと、あの人やばいんじゃない？」

「そうですね。森を出たしここからインフェルノを……」

「いや、大丈夫だ。ライダーはやつてくれるさ」

アストルフオは突然立ち止まり、一撃ウサギ達に指を指す。

そして取り出したのは黒に金の装飾が施された美しい角笛。

「ねえ、アレ前に見た魔剣よりもすごい魔力秘めてるんだけど……」

「つていうかあの笛下手したら爆裂魔法並の……」

その角笛は光り輝くとアストルフオを覆う程の巨大なホルンに変化した。

「二人とも、大丈夫だとは思うが一応耳を塞いでくれ！」

指示を受け耳を塞いだ直後に、アストルフオがホルンに口をつけ、

——瞬間、白い絨毯が弾け飛んだ。

「うーん、これで全部っぽいなー」

広がった群れを眺めてアストルフオは一人ごちる。彼——彼女ではない——の言うとおり、無限に続くかと思われた一撃ウサギの雪崩はもう止まっていた。

見渡す限りウサギ、ウサギ、ウサギ。その全てがこちらに敵意を向けている。が、その程度では世界に認められた英雄は殺せない。

「二列に並んでー、押さない押さない。割り込み厳禁だよ。よし、いくよー！『<sup>ラッ</sup>恐慌呼<sup>ブ</sup>び起<sup>ク</sup>こせし魔<sup>ル</sup>笛<sup>ナ</sup>』！散れっ！」

それはアストルフオの宝具が一つ、善の魔女ロジェステイラの領土に居候した後、旅立つ時に与えられた角笛。

この角笛は周囲に爆音の衝撃を叩きつけ、対象のHPがダメージ以下だった場合、塵になって四散する。一撃ウサギ程度がこの恐るべき魔笛に抗える筈も無く、どの個体も例外なく塵と化した。

「ウソ……全滅……!?!」

「あれだけの数がいたのに……」

「む……?」

ウィザード二人はその威力に驚愕し、そしてジークは違和感を覚える。

（消費魔力が……無い? どういう事だ。確かにここは現代よりも大気中の魔力は多いから、パスさえ繋がっていれば離れていても普段通りのパフォーマンスは出来る。だがそれだけだ。消費魔力が減る筈もない。……これは、そう、あの頃の俺達のように、まるで他に供給元がいるかのような……いや、外部リソースか……?他に可能性は……）

眉間にシワを寄せ考えるジークとは裏腹に、アストルフオは二人へと魔笛とヒポグリフの説明、否、自慢をしている。

（いや、今考えても仕方ない。俺は魔術についての造詣は持って生まれたが、どれも専門的な部分までは及ばない。こういうのは本職の方が分かるだろう）

そこで考えを切り上げ、未だに自慢しているアストルフオを一旦宥め、街へとくり出す。

夕方に出発したため、アクセルの街まであと少しという頃にはすっかり暗くなっていた。

「それにしてもあんなに一撃ウサギがいるなんてね。これも例の悪魔のせいなのかな? チラツと見えた一撃熊も、全滅してたけど20匹は軽く超えてたしね」

「……は、はい……すみません……」

一行の足取りは軽いが、ゆんゆんの纏う空気は重い。

「ゆんゆんさん? そんなに落ち込んでどうしたの」

「…いえ、今回はたまたまアストルフオさんのお陰で助かりましたけど、もしも皆さんが怪我をしていたらと思うと…。うう、私がこんなクエストに誘ったからですよね…」

「どうやら自分が人との関わりを求めて誘った依頼であんな目に合わせてしまった事に負い目を感じているらしい。」

「いやいや、確かにちよつと怖かったけどケガなんてしてないし空を飛ぶなんて貴重な体験もできたしね!?それに…ほ、ほら、今回の照明らかにすごい異常だったし値上げも期待出来るから…。えーつと、とにかく気にしてないから大丈夫!」

「それを言うのなら俺が話しかけたことと無理やり引つ張ってしまった事が原因だ。事の責任は俺にある。すまなかった」

「そんな!ジークさんじゃなくてこんな私が誘ったのが…!」

「フォローの言葉をかけるも中々ゆんゆんは納得しない。どうしたものかと頭を悩ませると前を進んでいたアストルフオがいつの間にか輪に入ってきていた。」

「ねえねえ、ボクはよく分かんないんだけどさ。アレって結構すごいらしいんでしょ?えーつと、ゆんゆんって言ったっけ?変な名前だね」

「確かにそうなんです!これは紅魔族のセンスの問題であつて…!」

「ゆんゆん、君は自分が誘ったことでみんなが危ない目にあつた事に責任を感じているんだよね?逆に考えるんだよ。ここにいたのが君たちで良かったのさ、とね」

「私達でよかつた…?」

「アストルフオの言葉の意味が分からないのか、首を傾げる。」

「そ。君、街じゃトップクラスの魔術師でしょ。君くらのレベルでもかなり危なかつたんだから他の人だったら全滅もあり得ただろう。あの森にはクエストで来てたんだよね?なら『自分達が受けたから、無駄な犠牲を出さなかつた』そういう見方もあるよね。何よりマスターがいたからボクも向かえたわけだし、それに…」

「それに?」

「友達がやったことなんだから、その位笑って許してくれるさ」  
「…え？…友、達…？誰が？」

これはだめだ。

その反応に、一同は思わずやれやれと頭に手を当てる。

「はあ…そりや君たち三人に決まってるじゃないか」

「え？え、え？ええええええつ!?」

「あの、その、友達じゃなくて…」

「あれ、違うのか。ボクにはてつきりそう見えただけど」

ニヤリ、そうとしか形容できない顔をしたリーンは大袈裟に手を腰に当てると大きな声で言った。

「酷いわ。私はもう友達だと思ってたのに、ゆんゆんさんはそうじゃなかったのねー」

かなり棒読みだがその手の話に限っては恐ろしいほど鈍いのがこのゆんゆんである。分かりやすく狼狽え、ブツブツと何かを呟き始めた。リーンが次はお前だとばかりに目配せする。

「あ、ああ。俺もてつきりそう思ったのだが…すまなかった。俺の勝手な勘違いだった様だな」

「えっ、…あつ、はい…すいませんでした…」

落ち込んでしまった。何故だ？

「もーっ！なんでそんな追いつめるふうに言うかな!?ほら、大丈夫よゆんゆんさん。ジークくんは言い方が悪いだけで怒ってないから」

ここまでお膳立てされておきながら上手く行かなかったのはゆんゆんの捉え方か、それとも生涯闘病生活だったが故の弊害か。

何が悪いのか分からずフオローしようにも出来ない状態が続く。

「まったく、マスターは妙なところで不器用だね」

「俺は確かに自分が不器用だとは自覚しているが…」

「あー、違う違う。そういうことじゃなくてね…。仕方ない、ボクが、きっかけを作っただけだよ」

自信満々に言い切るその姿はまるで最終決戦時のようで、何故だが失敗するようには見えない。やるといったら間違っているもやりきる。そういう人物だと、誰よりも己が身を持って知っている。

「ああ、頼む。俺は友人をつくる才がないらしい」

「いや、それは普通に言えばいいんだけど…。まあいいさ！このボクを誰だと思ってるんだい！シャルルマーニュ十二勇士が一人、アストルフオだぜ！勿論他の十二勇士ともみんな友達さー！」

アストルフオはそう言い残すと未だに落ち込むゆんゆんの目の前に立つと手を差し伸べ、目を合わせる。

「やあゆんゆん、詳しい話は聞かせてもらったよ。君がどうしても納得いかないってんならボク達は何も言わないさ。でも君は納得いかないんだろう？」

ゆんゆんは顔をあげコクンと頷く

「だから、迷惑かけた分だけ、こっちの頼みを聞いてほしいんだ」「なっ!？」

「は、はい！私に出来る事なら何でもします！」

「言ったね？二言はないよ」

リーンが文句を言おうとするも、アストルフオを信頼しているジークは悪いようにはならないと言い、何とか引き止める。

そしてアストルフオの頼みとは…これだ。

「それじゃ、ボクと友達になってよ。これで助けたのはチャラってことで」

「え？そんなの全然…」

「ほら、君たちも言いなよ」  
なるほど。

その意図を理解すると、リーンも分かったようで、自然と顔を見合わせる様な形になる。

「じゃあ私もゆんゆんが友達になってくれたら許すかなー」

「俺もだ。いや、許す許さないとかではないのだが…。こちらから頼んででも友人になりたいんだ」

「ゆんゆん、私（俺）と友達になってくれる（か）？」

「ふえ……、あ、あばばばばば」

ゆんゆんは鳩がエクスプロージョン食らった様な顔をし、小刻みに振動する。

「あれ？ちよ、ゆんゆん!？」

暫く振動すると目の焦点があい正気に戻る。

「はっ?!い、意識が……」

「……えーつと、で、返事はどう？友達になつてくれる?」

再度問いかける。思い出したのかゆんゆんは顔を赤くしまた震えそうになるが……。ぐつと手を握りしめ、返答する。

「ふ、不束か者ですが、よ、よ……よろしくお願いしまああすつ!!」

それは臨時パーティーを組んだ時と同じセリフであった。

こうして彼らは友達になった。今では何気ない会話を楽しんでいく。他者からしてみれば何の益にもならない言葉。しかし本人には分からない楽しみがある。

笑い話、夢、噂、気分……話題は無数にあるのだ。

——これが、普通の友人関係というやつか。

夜空を眺めてジークは思う。思い返せば彼にこういった普通の友人はいなかった。近いので言うならジャンヌ、アストルフオ、カウレス辺りだろうか。

しかし彼らはそれぞれの意思をもって戦争に参加せし者達。一時の日常を共に分かち合うことこそあれゆんゆんやリーンの様な一般的な感性ではない。何処かがズレているのだろう。1%にも満たない差であれ、そこが最も決定的な部分なのだ。

——俺の本体は未だに彼女を待ち続けているのだろう。

こうしているとんだかホームシックになったように思える。

(俺は、この世界でも人間として歩んでいるよ)

誰に言うでもないその思いは、ジークの胸にそっと仕舞われた。

——そういえば、まさかアストルフオがあのような手段を用いるとはな

らしくない、いわば騙しや引っ掛け。それもきちんと場や使い方を



弁えていた。普段の彼ならもっと単純なのだが…。  
そう思った所でその疑問はあっさり解決する。

——ああ

暗い宙の海に煌く星星、その景色はいつもとは何かが違うのだ。

——今日は新月だったな。

「うわあっ！グ、グリフォン!?!」

「あーっ、違う違う、ヒポグリフだってば」

……取り敢えず、誤解を解こう。

## 報酬金と魔王軍幹部？

「――なるほど、んー、まあそりゃあ確かに異常だな」

早朝、ジークは彼の住まいである共同墓地を訪れていた。

理由は勿論、先日感じた違和感――宝具使用時の魔力――について話していた。

「これは天草四郎には伝えたのか？」

「いや、まだだが…伝えた方が良かったか？」

獅子却は、んー、と唸り述べる。

「いや、別に必ずって程じゃあ無いんだが、最近の魔術についてならともかく、純粹な魔術なら向こうのアサシン。サーヴァントについてなら60年調べ尽くし、実際に大聖杯にまで触れたヤツだ。アイツに分らんなら、それこそあのシステムを構築したマキリやアインツベルン、トーサカにでも分かんたらうさ」

それは獅子却では分からないと言う事のようにも聞こえて、少し落ち込み、そして本場の魔術師（獅子却は魔術使いだが）にすらそう評価される程の天草四郎の執念に思いを馳せる。

「そう、か。すまない。邪魔をした」

「悪いな。詫びとこっちやなんだがこれをやろう」

渡されたのは青い宝石をあしらったペンダント。中々魔力も籠もっている。

「これは…」

「魔力よけのアミュレット。サーヴァント相手じゃ気休めにもならないがここじゃそれなりに通じそうだからな。お前さん、セイバーにならないんじや魔術対策ができてねえだろ」

手渡されたそのの質量を確かめる様に強く握りしめ、懐に仕舞う。

「ああ、ありがとう。大切に使用してもらおう」

「なんだそりゃ…身につけてくだけでいいんだからな？ああ、ついでにコレもだ。片方は天草四郎に届けてくれ」

それは骨で造られた書見台のようなものとそれに付属したアームのようなもののセットだった。

(これは…zeroで遠坂時臣が使っていたアレと似ている…という事は)

「これはだな―「連絡用の限定礼装。だろう?」…なんだ、知ってるのなら話は早い。こつちじや便利な電子機器が使い物にならんからな。直接言うほどでもない事や伝言にも使える」

二セット渡されたが、獅子劫の手にあるソレを見つめ、受け取るのを躊躇する。それは彼の魔術特性と、それを構築する材料からだつた。

怪訝に思つた獅子劫はジークの何とも言えないような表情を見て納得する。

「ああ、これは近くにいた吸血鬼の骨だから心配するな」

「吸血鬼…という黒のランサーか死徒の様な?」

霊体化していたジークフリートが口を出す。突然現れた巨躰に眉を上げるが、それだけだ。

「何だ、いたのか?吸血鬼つつつてもこの世界のだな。向こうの死徒程化け物じみては無かつたがな。オレの自慢のサーヴァント様にかればあつという間つて訊だ。こつちは堂々と魔性の者がいるからな!人間よりも良質な上に人の死体なんぞよりよつぽど手に入りやすい。死霊術師としてはやりやすいつたらありやしないぜ」

そう言つてニヒルに笑う彼は成るほど、魔術使いに向いている。

「ありがとう。ではまた」

「またな」

地下を出ると、堂々と寝そべっていたタイガー号が寄ってくる。ポケットの中のものがお目当てらしい。

「これはクコの実というのだが…食べたいのか?」

クコの実を差し出すと直ぐに平らげてしまった。しかしこれだけでは足りないらしい。

「すまない、俺はこれ以上持っていないのだ。次に訪れるときに用意しておく」

獣に人の言葉は分からない。だがこいつは目を閉じて、元の位置に座り直した。きつと伝わっているのだろう。そう信じてアクセルの

街へと帰って行った。

……

「ええ、勿論知っていますが」

「本当か！」

協会前の広場、そこに天草はいた。

天草四郎はいち早くこれに気づいており、独自に検証してみたという。

「はい、異常というものでも無い。サーヴァントにとっては、まあ一般的な事ですよ」

まずそのサーヴァントという存在自体が一般的なことでなく超常の者なのだが、そこは一旦無視する。

「ホムンクルスのあなたも知っているでしょう。事の原因は『魂喰い』、あるいはそれに限りなく近いものです」

「それ、は……」

浮かぶ情景、濃霧に潜む悲しき幼い殺人鬼。

言い淀むジークを尻目に淡々と語る。

「聖杯戦争において、英霊の魔力は基本的にマスターより供給されるが、中には人の魂を喰うことで満たす者も存在する。……ですが、今回に至っては貴方の心配するような事はありません」

「何？」

堂々と言い切るからには根拠がある筈だ。それを問うと懐から名刺程の大きさのカードを取り出した。

それはジークも所持している冒険者カード。

天草は冒険者カードの討伐欄を指し、「思い出して見なさい」という。

カードを貰った時、冒険者カードの説明では、身分証明にもなる。レベルが上がると強くなる。ポイントを使ってスキルという異能を習得できる。そしてレベル上げの為の経験値は生き物の魂を何らかの形で吸収しているということ……。

「あ」

「はい、今考えている事こそがそのままの答えでしょう。この世界では殺害、捕食により魂の一部を自動的に自らの肉体に蓄積させている。そうして吸収された魂の一部を使用している。と、そういう事です」

確かに：これなら効率は落ちるがその分ただの人間よりも質のいい上に量もあるため気にならない。冬木のキャスターの様に死なないように絞り取る必要もないのだ。

「つまり、無害で益のあるものだと？」

「ええ、今の所害らしい害は無いので、そう気に留める程も無いでしょう」

連絡用礼装を受け取った天草四郎はギルドへ足を進める。

「どこへ行く気だ」

「先日の報酬が出るのでしょうか？あまり混まない内に貰っておこうかと思っただけだ」

報酬といえば：あのキャベツか。確かに、大勢参加していた為、少々時間も掛かりそうだ。

部屋に残っているライダーとバーサーカーにも念話で伝え、ギルドで集合とする。

そうして気を抜いた直後、背後から液体が滴り落ちる。

「っー」

「…はあ…はあ…はっー」

咄嗟に地に転がり回避することが出来た。先程まで立っていた場所の石の道が融けている。もしも触れていたかと思うとゾツとする。そしてその下手人、赤セのアサミシミスは納得したような顔で佇んでいる。

そこへ霊体化していたジークフリートが庇うように俺の前に立つ。

「何のつもりだ、アサシン」

ジークフリートの剣呑な視線は生半可な幻想種ですら襲うのを躊躇う程だったが、相對する相手も只者ではない。

その視線すらそよ風の如く流し告げた。

「そう睨むな、今のは試しただけよ。先の反応速度、うむ。ホムンクルス、貴様はあの時の様な一時的な強化ではなく、恒常的にその力を発揮出来るとな…。これも竜種の恩恵か？」

天草を見るが、首を竦め目を閉じる。どうやらこれはアサシンの独断らしい。

「試したのは分かった。だがこういうのは止めてくれ。今度からは一言告げてから行ってくれ」

「は？」

何処かズレた指摘をするジークに思わず声が漏れる。

これにはジークフリートも天草四郎も同感のようで、目を丸くする。

「フ、フフフ、フハハハハハ。ふん、此度は我の気まぐれだが、中々面白い事を聞いた。我がマスター同様、貴様もおかしな性質をしているものだ。そうだな…。愉快な事を聞いた褒美と先の謝罪代わりに、これでもくれよう」

投げ渡されたのは小瓶に詰まった液体。

「これは…？」

「かの大英雄すら死に至らしめたヒュドラの毒。その劣化品よ。売るなり使うなり好きにするがいい。所詮は本物に及ばない物故な」

そう言い残すと霊体化し、気配も感じられなくなった。それと同時に、何か空間の違和感が消えた。どうやら認識阻害の結果を張っていたらしい。解除するまで気づかれないとは恐るべき魔術の腕だ。

「セミラミスがすみません。…さて、ギルドに向かいますか」

そう締めくくられ、共にギルドに向かうことになった。

…

「はい、こちらが賞金になります」

あれから少し後、無事混みいる前に賞金を受け取る事が出来た。

俺が40万、フランとアストルフオが53万ずつ。ジークフリートは100万だ。

どうやらキャベツに混ざっていたレタスはキャベツより遥かに安

いらしい。そして俺が捕まえていたのはキャベツとレタスが6対4だった。

「よお、稼いでるか？」

ギルド併設の酒場で待っていると獅子刼界離が話しかけてきた。

「ああ、稼がせて貰っている。仕事とはこんなに楽しいのだな」

「…それは少し違うと思う」

ジークフリートはそう呟いたが、ジークの耳には入っていない。

「それで、どれ位だ？」

素直に計246万エリスだと告げる。

「何だ、お前さんらにしては低い気もするが…まあ、キャベツだしな」

ジークフリートとフランケンシュタインは取りこぼしたもや他の冒険者の手助けをメインに行い、アストルフオは途中からキャベツで遊んでいた為、この位で済んでいた。

「おや、モードレッドの姿が無いが…」

「あいつは外に行ってるよ。何でも魔王軍の幹部とやらを倒しに行くとかでな。もらい次第直ぐに出てつちまったよ」

魔王軍の幹部…。確か少し前から噂されていて、郊外の廃城にいるというやつか。モードレッドなら心配はいらないだろうが…。

果たしてどのようなモンスターなのだろう…。



「よつと、…あそこが魔王軍幹部がいる城か」

獅子刼達の会話から暫くして、モードレッドは遠くに見える廃城を眺めていた。

何を隠そう、その城こそ魔王軍幹部の住まいし城。実はもう一つ廃城はあったのだがモードレッドはこちらにしていると踏んでいた。直感スキルとは便利なものである。

「へっへっへ、どこのどいつだか知らねえが報酬金はオレのモンだ」

表情、笑い方、内容、三つ全てが盗賊の物言いだ、構図だけは凶悪な魔王軍幹部に独りで挑む勇敢な騎士なのだから笑えない。

「うし、あと一キロ位か。そうだな…この辺でちつとだけ休むか。『騎士たるもの、剣の手入れは我が魂の研鑽と思え』か。お固い奴だったが、忠誠心だけは本物だったな。…アツくん。…プツ」

苦手だった騎士に思いを馳せるも、f g Oユーザーのあだ名が何とも痛快で思わず吹き出してしまった。

「フ、フフ…！ハッハッハッハッハッハッハッハッ！あー！腹いてえ！アツくん…。あいつがアツくんなんてタマかよ！クフフ！…ふー、笑った笑った！んじや、そろそろカチコミだ！」

よいしよと身を起こし、丘の上の廃城へと向かっていった。

…

「へえ、近くで見ると中々デケエ城だな。ま、キャメロットと比べればO R Tと元5位、ゼルレツチとウエイバーだな！」

今さり気なく時計塔のカリスマ☆プロフェッサーが貶められたが気にしない。

「へーえ？下からも気配がするな…。成るほど、徐々に攻め込むってことか。ゲームみたいで分かりやすくいい。…へっ、首でも洗って待ってやがれ！この俺がT A S以上の速度でクリアしてやるぜ!!」

「んじや行くッ!?チッ！」

今まさに突撃しようとした瞬間、直感スキルが警鐘を鳴らした。それは英霊ですらキズを負う程の魔力の高まり。

廃城を中心に大規模な魔法陣が出現する。

既に加速し始めていたモードレッドは急には止まれず、また止まったとしてもその何かに巻き込まれるのは分かりきっていた。

もはや一刻の猶予もない。仕方が無いためこのまま突っ切った。そしてそれは発現する。

一筋の閃光が走る。鼓膜に損害を与える爆音が轟く。廃城は衝撃波と共に爆裂した。

そして、崖の淵に立っていたモードレッド。崖の端で何とか止まっていたが、これ程の爆発ともなればその土地も無事では済まず…。

ガラッ

「あ？…ヌオオオオオッ!!」



当然、先端部分は脆いためモードレッド共々崩れ落ちた。

(チツ…どうする？今からでも丘の上にはいけるが…)

落下しながらも、冷静な考えは止めない。しかし脳裏に浮かぶのは先程の一撃。見てからでも十分に避けられる速度ではあるが、それでも範囲といい厄介だ。

(先に術者を潰す！)

当然、あれ程の魔力。発生源が分からないはずも無く、場所は見据えている。

「ドラアツ!!」

落ちる岩を足場とし、赤雷纏いし音速の砲弾が射出された。



『『エクスプロージョン』 ツツツ!』

「おお…やっぱり爆裂魔法はすげえな…。…威力だけは」

魔王軍幹部のせいで簡単なクエストが無くなってしまい、やることも無くなった俺は、めぐみんの日課、一日一爆裂に付き合う為にアクセルの街から離れていた。

そして丁度良さそうな廃城を見つけて爆裂魔法を放ったのだ。

めぐみんは全魔力を使い果たした為倒れ伏し、その回収係が俺だ。

「よし、帰るか。ほら、おぶさってやるからもうちよつと姿勢何とかしろ」

「いえ、無理です。指一本動きません。全魔力を使っただすよ?」

さも当然の様に語るめぐみんに一瞬置いていこうかと考えたが、止めた。付き合うと言ったのは俺だ。

めぐみんを背負い、さあ帰ろうかとした途端、めぐみんが何かを見つけた。

「あれ、カズマ。赤い光がこっちに向かって——」

「ん?何だア——」

言い切る前に、凶星は墜ちる。

轟音と共に堕ちたそれは木々を枯らし、地を抉り、途轍もない衝撃波を生み出した。

「――」

先程の轟音とは全くの逆、静寂が訪れた。

砂煙の立ち込める中、目の前に人影が浮かぶ。が、めぐみんでは無い。めぐみんは俺が背負っているのだ。そして何より、殺意というのが明確に感じられる。素人だがはつきりと分かる。

徐々に砂煙は晴れ、姿が見える。

――赤い意匠をあしらった白銀の鎧、貌の見えないフルフェイスの兜からは悪魔の様な角が生えている。体から放出される赤い稲妻がより一層迫力に拍車をかける。そして伸びている剣は俺の首の前、紙一枚程の隙間もない場所で止められている。

肌が粟立つ。全身の毛穴という毛穴から汗が噴き出す。ビリビりと形の無い電撃が走る。寒い。俺の生存本能が全力で訴えかける。それと同時に本能で理解する。

(これが……魔王軍幹部……！)

――これは戦ってはいけないものだ。

(そりゃあ、チート持ちでも一向に魔王が倒せない訳だ。生物としての格が違う)

もはや背中のみぐみんの事を気にかける余裕など無い。

(あ、死んだわ)

ただ淡々と、自らが死にゆく事だけを理解した。

「あ？何だ、テメエ等かよ」

――その声が聞こえるまでは。

今まで掛かっていた殺意は霧のように消え失せ、聞こえた声には大変聞き覚えがあり……。

ガシヨンガシヨンガシヨンッ！

平常時であれば目を輝かせ興奮する様なカツコイイギミックが働き、その素顔が目に入る。

「モ、モードレッドさん……？」

「おう、モードレッドだ。お前ら、こんなところで何やってんだ？」

舌が乾いてうまく喋れない。それをどう解釈したのか、背負っているめぐみんを見てしたり顔で頷く。

「ハハアーン、お前らもあの城をやるうって算段か。そのソイツがさっきの魔術、いや魔法の使い手だろ？…そこに俺が入り込んだって事か…」

納得したように頷くと、訝しんだように尋ねてくる。

「おい、サトウカズマ。どうして立たない？」

「……………腰が抜けた」

「……………」

情けない一言にモードレッドが同情の目で見てきた。

お、俺だって抜かしたくて抜かしたわけじゃないわい！

この鍛錬と遭遇に祝福を！

「オラオラアッ！しゃんとしねえと飛ぶのはテメエの首だぜ！」

「ゴフツ……！」

「うう……」

人気の無い広場、ジークと俺は地に伏し、これを為した一人の人物に目を向けていた。

「いいか！テメエらは剣士じゃねえ！だがな、最低限身を守る術くらい持つときやがれ！」

そう言いながら放たれる剣閃。ギリギリ目に追えるほどの速度で放たれたそれを咄嗟に首を傾け、避ける。

石畳で出来ているはずの地面は容易く破壊され、食らったが最後、俺の体は紙のように千切れるのだろう。

二転三転しながら立ち上がり、剣を構える。

「待て待て待て待ていっ！ちよっ！タンマッ！マジで!!ひいっ!？」

またもや襲い来る斬撃を必死の形相で右に避け、左に避け、時には転がり回避する。それが幾ばくか続き、疲れ切った体はフラリと前に倒れかかる。

転んだ事への配慮か、振るわれる速度はかなり落ちた。

(このまま行くぞっ！)

昨日修得しておいた自動回避のスキルが発動する。無茶な姿勢にはなるが、この一振りは頭上を通り過ぎる。前に倒れかかった勢いそのままに懐に潜り込み…持っている剣を振りかぶる。

「隙ありいいいいいっ!!」

決まった。相手の剣はもう振り抜いてる。今から戻すことは出来ない筈。全力で振りかぶった俺の剣は胴へと吸い込まれ――

「甘めえっ！」

振り抜いた右手とは反対の手は、俺の頭に猛烈な勢いで落ちてきた。た。

(剣術なのに拳使うってズルくね?)

そう思った所で視界は暗転する。

「おーい、カズマ。起きてるか？頭は大丈夫か？」

目を開けると俺が気絶した元凶、モードレッドが立っていた。

「あー、はい。カズマです。お陰様でジンジン痛いんだよ！加減を知らねえのかお前!!ほら見ろよ！大分くつきりコブあるじゃん！」

「おう、男前になったんじゃないか？」

「ふぎけん！名誉の負傷とかなら分からなくも無いが、ただでかいだけのコブだぞ！」

自分をこうした相手に恐れ知らずかとは思うだろうけど、この一週間でそれも不要だと思いい知らされた。

「なあジーク。お前もそう思うだろ？」

一緒にいたジークに同意を求めるが返事が無い。

「あ、抜いといてくれ」

「抜いといて…？」

その言葉に違和感を感じ、背後を見ると、地面から給仕服を来た胴体と足が生えていた。

「ジーーーークウウウウウツツ!!」

ジークを引き抜き抜きながら考える。そもそも、何でこうなったのか。

それは一週間前に遡る――

――それは爆裂散歩初日、モードレッドに殺されかけた時。腰が抜けた俺は魔力切れのめぐみんと一緒に担がれてアクセルまで帰った。

誤解とはいえ攻撃しようとしたからか、剣を見繕った事もあって剣術を鍛えてくれるという。

俺はこれに飛びついた。仲間が駄女神、ノーコンドM騎士、爆裂狂の三人。少しでも俺が戦えたほうが良いからってのと剣術に憧れたって理由がある。が、正直今は後悔してる。

元々ジークは鍛えるつもりだったらしく、俺はそのついでとか。

そうして爆裂散歩が終わったあとに始まったのは剣術稽古。

だがこれがかなりのスパルタだった。今の自分にギリギリ目に見える程度の速度で振るい、実際に当ててくるのだ。そのせいで常に防戦一方を強いられ、いつも体力が尽きるか、ドジ踏んで倒れるか。とにかく、限界まで鍛錬させられるのだ。サボらないように後に響かないくらいの力で追い込み、簡単に気絶させないように手加減した一撃を与えられる。

……うん、逃げようと思った。つか逃げたけどさ。普通に捕まるんだよ。

何なのコイツ。いくらイギリスが騎士の国だからってこうはならないだろ。チートだチート、それも一番厄介な天然チートだ。

そして絶妙な手加減の半殺し鍛錬は続き、回復ポーションを最大限活用し、鍛錬で傷ついてはまた癒やし、疲れ果ててはまた癒やしと、限界以上の鍛錬を平気でやってくる。

その挙げ句、いつも一方的にボロボロにされる為強くなっている実感が無い。

そんな一週間程度で上手くなるはずも無いけど、ファンタジーな異世界なんだからその位期待したっていいだろ!?

まあ、そんな感じでゴロゴロする暇も無かったとだけ言っておく。地面には散々転がったがな!

ジークを引き抜くと、眺めていた獅子刳がシユワシユワを持ってきた。

「よっ、お疲れさん。今日は中々いいセンいつてたじゃねえか?」

クリエイトウォーターで汗や汚れを落とし、タオルでふく。その後は反省会だ。

「まあな。……全然通じなかつたけど」

軽く喉を潤すと、モードレッドもいつの間にかこちら側に座っていた。

「おう、そのとおりだな。あれは二刀流だったり軽い武器、そして相手が耐えたらそこで終わり。無理な体制だから決まったとしてもボコられる。精々が一对一でかつ、一発で決めれる自信がある時だな」

自分でもわかってたけど、一週間の集大成をこうも冷静にダメ出しされると胸に来るぜ。

「まあ、最初に比べると心技はかなり上達してると思うぜ？前は情けない声上げて逃げるだけだったのに加えて、思い込みで気絶してたかな。後は体だが……まあ、体はレベルアップで補ってくれや」

今遠回しに貧弱って言われたんだが。そうだよ、所詮魔法職に力で負ける商人向きのステータスだよコンチクショー！

「そんでジークだが、毎度言ってるが、ジークフリートの剣術に引っぱられ過ぎだな。思い描く動きに体が追いつかねえつてのに、しつかり技自体は見えてる。その感覚のズレが違和感に繋がってるんだと思うが、どうだ？そこまでの外れじゃあないだろ」

ジークは心当たりがあるのか、俯くが、またもや立ち上がりモードレッドに挑む。……よくもまあそんな体力あるな……。俺はもう一歩も動けないのに。

獅子劫と共にスキルや魔法の練習をしながら、打ち合う二人を尻目に思う。

（なんだかんだ、この雰囲気結構いいなっ思うんだよな。痛いからめっちゃ嫌だけど。これぞ異世界ー！って感じの修行でさ。痛いから嫌だけど）

あ、ジークがまた埋められた。

……

そこから一時間弱が立った頃、キャベツの時にも聞いたアラームがけたたましく鳴り響いた。

『緊急！ 緊急！ 全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってくださいっ！』

そのアナウンスに俺達も汗を拭い、剣を手に取り正門へと向かう。街の正門前には、俺達と同じアナウンスを聞いたからか、既に多くの冒険者が集まっていた。

キャベツの時のような大群も巨大な影も無い。

そこには、首無しの馬に跨がる大きな威圧感を放つ黒鎧の騎士がいた。

当然、そんな化生を乗りこなす者等余程の手練か、魔に連なる者だと相場は決まっている。

「…デユラハン」

——誰かが呟いた。

——それは、人々に死の宣告を行い、生きる者に絶望を与える不死身の首無し騎士。

不死となり、生前を凌駕する力、生命力、剣技の三つを手に入れたその漆黒の騎士は、脇に己の首を抱えていた。

街中の冒険者達が静かに眺める中、デユラハンは左手に抱える首を前に差し出した。

何が起こるのか固唾を飲んで見ていると、差し出した首がプルプルと小刻みに震え出し……………

「ま、ままま、毎日毎日毎日毎日っ!! おお、俺の城に、毎日欠かさず爆裂魔法撃ち込んでく大馬鹿者は、誰だあああああーっ!!」

「……………」

それはそれはお怒りの魔王軍幹部の言葉は、もう心当たりしかないものなのであった。



## この変態に痛撃を！（前編）

突如激昂したデュラハンに、冒険者達は困惑したように視線を彷徨わせる。

「爆裂魔法？」

「爆裂魔法と叫びたら……」

自然と、視線は一斉にめぐみんへと向き、フイと視線を反らし隣の魔法使いを見る。すると、冒険者の視線もそちらに向き……

「ええっ!? あ、あたしっ!? 何であたしが見られてんのっ!? ば、爆裂魔法なんて使えないよ!? ま、まだまだ駆け出しだしっ、い、家には弟と妹がいるのにつ! うわあああんっ!」

濡れ衣を着せられ慌てる魔法使い。当然、こんなもので騙されるはずも無く、めぐみんはため息をつき一步前に踏み出した。

一応、心配なので着いていく。

「お前が……! お前が、毎日毎日俺の城に爆裂魔法ぶち込んで来た犯人か! 俺が魔王軍幹部だと知っていて喧嘩を売っているなら、堂々と城に攻めてくるがいい! その気が無いのなら、街で震えているがいい! 何故こんな陰湿な嫌がらせをする! この街には低レベルの冒険者しか居ない事は我々も知っている! 雑魚ばかりと見逃してやっていれば、調子に乗って毎日毎日ポンポン爆裂魔法を撃ち込みにきおって……っ!! 頭おかしいんじゃないのか、貴様っ! しまいには剣まで投げ込んできおって……! わざわざ来たのならそのまま入れよかろうっ! 爆裂魔法で城にしか被害が無いと見るや、慌てている隙に剣で中の部下を殺すとは……! 貴様には人の心は無いのかっ!?!」

余程の鬱憤が溜まっているらしく、ここまでの長台詞を一気にまくしたてる。というか、爆裂魔法はともかくとして、後半の方は知らないんだが……。

めぐみんは、若干怯んだ様子を見せたが、特に意味もなくマントをバサツとして名乗りを挙げる。

「我が名はめぐみん。アークウイザードにして、爆裂魔法を操る者

……」

「……バカにしてんのか？」

「ちっ、違わい！」

冷静な声で突っ込まれるも、気を取り直しためぐみん。

「我は紅魔族の者にして、そしてこの街随一の魔法使い。我が爆裂魔法を放ち続けていたのは、こうして魔王軍幹部である貴方をおびき出す為の作戦……！ まんまとこの街に、一人でノコノコ出て来たのが運の尽き！」

杖を突きつけ、宣言するめぐみん。その後ろで合流したジーク達と仲間とヒソヒソと囁いた。

「なるほど、確かに拠点を攻撃し続けるのは有効的だ……」

「んな訳無いだろ。あれは毎日爆裂魔法撃たなきや死ぬとか駄々こねてたから、仕方なくあの城の近くまで毎日連れてってやってたのに。いつの間に作戦になったんだ」

「うむ、しかもこの街随一の魔法使いとか言い張ってるな」

「しーっ！そこは黙っておいてあげなさい！今日はまだ爆裂魔法使ってないし、後ろに冒険者の大群が控えてくれるから強気なのよ。今良い所なんだから見守るのよ！」

それが聞こえていたのか、杖を突きつけた姿勢のまま顔を仄かに赤く染め、ぷるぷると震えだす。

「第一、本当に作戦ならこの後がどうしようもねえな。アイツ、この街の冒険者が総出でかかってても一蹴されるぞ。向こうは手え出す気は無かったようだが、これは無駄に犠牲者を増やすだけじゃねえのか？」

それもそうだ。俺もこの街に勝てる冒険者がいるとは思えない。めぐみんやアクア等の特化しているならともかく、初心者と呼ばれるアクセルを巻き込むメリットなど殆ど無い。

その間にも会話は続き、爆裂魔法を撃たないと死ぬとかいう話になった。……あほくさ

デュラハンは片手に首を乗せながら、やれやれと肩をすくませた。「どうあっても、爆裂魔法を止める気は無いと？ 俺は魔に身を落と

した者ではあるが、元は騎士だ。弱者に手を出す趣味は無い。だが、これ以上城の近辺であの迷惑行為をするのなら、こちらにも考えがあるぞ?」

剣呑な気配を漂わせてきたデュラハンには流石のめぐみんも後退り、そのまま振り返ってアクアに目をやる。

「迷惑なのは我々の方です!あなたがあの城に居座ってる所為で、我々はロクに仕事もできないんですよ!余裕ぶっついてられるのも今の内です!こちらには、対アンデッドのスペシャリストがいるのだから!さあ先生、お願いします!」

あいつ……アクアに丸投げしやがった。

「ふふん、しょうがないわね! 魔王軍の幹部だか何だか知らないけど、この街にこの私が居たのは運が悪かったわね。アンデッドの癖に力が弱まるこんな昼間にノコノコ出てきちゃって、浄化して下さいって言うてる様なもんだわ! あんたの所為で、受けたクエストの報酬がずっと棚上げされてんのよ! さあ、覚悟はいいかし「ちよつと黙つとけ」らつっ!」

このままアクアに任せるとロクな事にならないと踏んだ俺は鞘で頭を叩いて、めぐみんの前に立つ。

「ちよつと!何すんのよヒキニート!この私の麗しき体を叩きつけるなんて!信じられないんですけどー!」

「む、お前は?」

アクアが何か言っているが無視だ無視。前に出たことで注意が俺に向く。

「あー、俺はこいつのこのパーティーリーダーなんだが、俺たちのせいでそつちに迷惑がかかったってんなら謝る」

「ほう……中々話の分かるやつもいるではないか」

デュラハンに興味深そうに俺を眺める。

「うわー、やっぱ怖……。でも、今は敵意も無いからこの程度で済んでるのか……」

「俺たちは本当に魔王軍幹部がいるなんて知らなかったんだよ、廃城

ならもう一つあるから、そっちにいるもんだと思つてたんだ。剣も、俺達はホントに知らない。第一俺達は遠巻きに撃つてただけでそんなに近くまでは行つたことないからな。……まあ、そんな感じで俺達には敵意がないのは伝わつたと思う。いくら冒険者が集まつたつつてもアンタには勝てる気がしない」

嘘だ。さつきもぶつちやけめぐみんやアクアは決まればワンチャンある。予想だと、最低でもモードレッドはあのデュラハンと同格だろう。

そんな心情は預かり知らぬデュラハンは「ふむ……」と顎をつまむ。「分かった。お前は嘘をついていないようだ……お前の謝罪に免じて今回は見逃してやる。だが次は無いぞ！ 撃ち込むならそのもう一つの廃城とやらにするがいい！」

撃つていいのか…、普通は撃つとかただけど……意外としつかりしてるんじゃないのか、コイツ。見逃してくれたし。アンデッドには話しが分かるやつなんていないって言つたの誰だよ。アクアだ。やつはアイツ適当こいてやがつたな…。

「ではさらばだ。剣を投げてくるやつも探さねばならなくなったからな……」

そう言い、首無し馬に乗って踵を返し…

「そっちは俺が投げたやつだな」

「は…」

剽軽な声で慌てて振り返る。

「…その白銀の刀身に赤いラインの両手剣……部下の報告と一致しているな…」

デュラハンは何事かブツブツと呟き何かを考え込んでいる。

「よし、決めた。俺はもう戦うという気分ではない、故にこの場を去つてやろう。……だが、このままでは俺も幹部としての面子がたたんだからその女！ 貴様も一端を担っていたらしいな。ふん、あのまま何も言わずにおけば無事だったものを…」

何やら不穏な空気を醸し出す。ヤツの指先に魔力が集まる。

「おい、モードレッド！ なんかヤバそうだぞ！」

「呪い系統か……こっちの魔術は耐魔力で防げたが、呪いも防げるのか  
ねえ！」

モードレッドはどこ吹く風といった様子で、よけようともしない。  
「汝に死の宣告を！お前は一週間後に死ぬであろう！」

## この変態に痛撃を！（後編）

「汝に死の宣告を！お前は一週間後に死ぬであろう！」

真つ直ぐに向かう光線に、勝ち気な顔を崩さないモードレッド。しかしそこに割り込む者がいた。

「なっ、ダクネス!？」

叫ぶと同時、ダクネスの体を暗い光が覆う。

「ダクネス！大丈夫か!？」

慌てて聞くと、ダクネスは体を見回したり手を握ったり閉じたりを繰り返す。

「ふむ、なんともないが…」

ダクネスはそう言うが、そんな筈は無い。たしかに死の宣告と言ったのだ。それに一週間後に死ぬと。そこから導き出せる答えとは

「その呪いは、今は何とも無い。本来はこの女に当てるつもりだったが、これもまたよかろう。このままではそのクルセイダーは一週間後に死ぬ。ククツ、それまでその女騎士は己の死の恐怖に怯え、苦しむ事となるのだ。その娘よ。一週間のあいだ、仲間の苦しむ様を見て、自分の行いを悔いるがいい。俺の城にちよつかいをかけなければ何事もなく平穏に過ごせたというのになあ！」

勝ち誇ったように宣言するデュラハンに、青褪めた表情で眺めるめぐみん。きつと俺も傍から見れば相当顔色が悪いだろう。アクアは……土を捏ねて……何やってんだ？

そんな中、呪いをかけられた原因のモードレッドと、当人のダクネスはというと、

「ようするに、テメエを倒「な、なんて事だ！　つまり貴様は、この私に死の呪いを掛け、呪いを解いて欲しくば俺の言う事を聞けと！　つまりはそう言う事なのか！」

「えっ」

デュラハンが驚きのあまり素で返した。

ああ、頭が痛い…。何を言ってるんだコイツ。理解出来ない、したくない。それは人の言葉を遮ってまで言うことか？

「おい、俺の言葉にかぶせる「くっ……！ や、止めろお……！ 呪いぐらいではこの私は屈しはしない……！ 屈しはしないが……っ！ ど、どうしようカズマ！ 見るがいい、あのデュラハンの兜の下のいやらしい目を！ あれは私をこのまま城へと連れて帰り、呪いを解いて欲しくば黙って言う事を聞けど、凄まじいハードコアプレイをする変質者の目だっ！」

大衆の前で、突然変態呼ばわりされた可哀想なデュラハンがぼつりと言った。

「……えっ」

ああ……気の毒に。

「この私の体は好きに出来ても、心までは好きに出来っ!!？」

「え」

「え」

「え」

いきなり倒れたダクネスに、順番に返した。

そしてその下手人、モードレッドが剣を振り下ろした姿勢で立っていた。

「モ、モードレッド！何やってんだお前えーっ！」

「そうだぞ！よりにもよって自らを庇い呪いを身に受けた仲間だぞ！それを切り捨てるなど……貴様それでも人間か！」

この時、俺達とデュラハンの心は一つだった。それはあまりに予想外の事で、何だかあっちが敵の様な気がしてくる。

「あ？あー、アレだよ、アレ。峰打ちだ」

「両刃の剣で出来るかー!!」

「平打ちにも見えなかったぞ貴様！」

と、こんな風につっこんでいるが、ダクネスには切り傷等無く、ただ気絶しているだけという事が分かった。何だかんだ言っても、手加減はしてくれた様だ……してくれたよな……？してなくてこれなら俺はダクネスを人間として見れなくなるんだが……。

「御託はいい！要はテメエを殺せば呪いは解けるんだろ？なら手っ取り早い方法を取るまでだ！」

「…ほう、貴様は魔王軍であるこのベルディアに勝とうというのか」  
途端、恐ろしいほどに圧が膨れ上がる。今までの態度ではそうは思わなかったが、今までに人類を脅かしてきた魔王軍幹部。流石にワケが違う。

両者が対峙し、一触即発の空気が漂う。

「フフフ…貴様はどうせ死ぬのだから最後にいい夢を見させてやろう。一発だ。一発だけ、先手を譲る。それで格の違いを思い知るがいい！」

「砕けろ！」

「ごぶうあああつ!!」

ものすごい勢いで蹴りをかましたモードレッド。そして悲鳴を上げながらもものすごい勢いで吹っ飛ばされるデュラハン、いや、ベルディア。

その体は地を削りながら転がっていく。

「は？」

予想だにしないその光景に誰もが口をぽかんと空けている。

実力を知っていた者達はさも当然の様に振る舞っているが、蹴りを入れるとは思っていなかった様だ。

視線の先で、ヨロヨロとベルディアが起き上がる。

「ク、ククク…。一発だけ先手を譲るとは言った。この鎧は吸光鉄で出来た神聖属性への耐性に比重を置いた鎧なのだが…。魔族でも名うての鍛冶師が造った物。当然、通常の攻撃、ましてや初心者への蹴りなど効かぬのだが…。な、なあお前。お前は今何レベルなのだ？ 駆け出しか？ 駆け出しが集まる所だろう、この街は？」

思いの外効いたようで、壊れた鎧部分を抑えるベルディア。

この時点でいけんるじゃね？という考えが巡る。

丁度吹き飛ばされた先にいた首無し馬にそそくさと乗ったベルディアはふうつと一息つく。

「と、とにかく！ これに懲りたら俺の城に爆裂魔法を放つのは止める！ そして、そのクルセイダーの呪いを解いて欲しくば、俺の城に来るがいい！ 城の最上階の俺の部屋まで来る事が出来たなら、そ



の呪いを解いてやろう！ ……だが、城には俺の配下のリビングアー  
マーやゴーレム達がひしめいている。ひよつ子冒険者のお前達に、果  
たして俺の所まで辿り着けるかな？ ククククツ、クハハハハハ  
ハッ！」

デュラハンはそう宣言すると、哄笑を上げながら城へと去って行っ  
た……。

◆◆◆◆◆

予想外の連続で、呆けた顔で立ち尽くす冒険者達。

そんな中、めぐみんは青い顔で外へ出ようと歩きだす。

「おい、どこ行く気だ、何しようってんだよ」

俺がめぐみんのマントを引っ張ると、めぐみんはそれに力を込めて  
抵抗しながら、振り向きもせずに言ってきた。

「今回の事は私の責任です。ちよつと城まで行って、あのデュラハン  
に直接爆裂魔法ぶち込んで来ます」

めぐみん一人で行った所で、どうなる物でもないだろうに。  
というか。

「俺も行くに決まってるだろうが。お前一人じゃ最初の雑魚相手に魔  
法使って、それで終わっちゃうだろ。そもそも、あの城に魔法撃ち込  
めってそそのかしたのは俺だしな。…まあ、それならもう一人重大な  
責任を負うべきなのがいるんだが…」

視線を向けるが、モードレッドは特に気にしない様子だった。

「おい、モードレッドもついて来てくれ。元々はお前も原因の一つだ  
ろ。それに大きな戦力は必要だしな……頼むよ。まだ日は浅いけ  
ど、ダクネスは大切な仲間なんだ。そりゃ、変な態度とかマゾな行動  
は引くし面倒だが、それでも、大切な仲間なんだ。可愛い弟子の頼み  
だと思ってくれ。…何なら、今は無理だが金も払う。……一緒に来て  
くれないか？」

必死の懇願に、まじまじとこちらを見つめてくる。ふつと笑うや、  
こう問いかけてくる。

「そんなにコイツが大切なのか？ 助けたいと思うのか？ それは仲間だ  
からという責任感だけじゃ無いと断言出来るか？」

その切れのある言葉にむぐ、と詰まる。

「…確かに、仲間だからっていう責任云々つてのものもある。さつきも言ったし、それも事実だ。だけど、それ以上に助けたい。一人の人間として、ダクネスを助けたいんだ!」

我ながら、恥ずかしいがこれも真実だ。俺は、ダクネスを助けたい。ここで死なせて溜まるかってんだ。

「だってよ。ダクネスさんとやら」

「へ?」

モードレッドが声をかけた先。そこには、頬を染めて立っているダクネスの姿があった。

「い、いやー、まさかそこまで思っていてくれたとは…。…少し、恥ずかしいな。いや、勿論嬉しいし、私もお前の本音が分かって満足なのだが…」

「あ、ああ、あああ…」

さつきは必死で言っていたが、今思い返すとかなり恥ずかしい事を口走っていた。…それも、本人、よく接する仲間が聞こえている所で。

「…うむ、わ、私もお前と同じ気持ちだ。だから、これからも大切な仲間として接してくれ」

「あああああああああああつっつっつ!!!わす、忘れろおおおお!!!」

こうして、ひとまずの危機は去った。カスマだとかクスマだとかいう噂が流れていたが、今回の件でその印象は塗り替えられたのだが、その代わりに精神的なダメージを受けたのだった。

## ある墮天使の受難Ⅰ

「なあ、お前知ってるか？最近、夜になればゴーストが出るらしいんだよな」

ベルディアの襲来から三日後の早朝、冒険者ギルドの酒場にて、厳つい戦士風の男が言った。

「いやいや、夜になったらアンデッドが出るのは当たり前だろ」

それを聞いた仲間と思われる盗賊風の男はそれを笑いながら否定する。しかし戦士風の男はそうじゃないと笑う男に言い返す。

「違う違う。出るのはこの街だって話だ」

「まさか。この街にいるんならもつと騒ぎになってるだろ」

「いや、夜は夜でもみんな寝静まった深夜に出るらしいんだよ。実際遅くまで仕事してる奴の殆どが見たってよ。そいつによると、なんでも、あの貧乏店主のウイズさんとアークプリーストの嬢ちゃんが祓って回ってるらしいぜ」

「ふーん。ま、ある程度でゴースト達も危険な場所だって分かるか」

ガハハと笑いながら酒を煽る二人。もう興味を失ったらしく、他の噂話や愚痴をつらつらと並べ立てていく。

そしてその近く、それを注意深く聞いている人物がいた。

その人物は二人にやや高圧的に声をかける。

「おい、今ウイズといったな」

「ん？ああ、言ったけどよ…。ああ、ウイズさんに何か用か？魔道具店の場所ならあの角をこう曲がってだな……」

ほろ酔い気分の男はウイズへの客だと思いすんなりと教える。

その人物は聞くやいなやギルドを飛び出しウイズ魔道具店へと駆けていった。

「あ…でもなんか今は店に居ないって…あー、行っちゃったか」



『俺の名はデューク。お前に会うために遙か遠い地からやって来た者だ……。何年もの間らお前の事を調べ続け、お前の事だけを考え続けた』

『俺は、ただひたすらに自らを鍛え続けた。それが何故だが分かるか？』

『わ、分かりません…』

『お前を襲うために決まっているだろう！』

『ひっ…『テレポート』！』

…

(あのような場で襲ったのは早まったな…人目の無い路地を選んだがテレポートを使ってまで逃げられるとは…)

(ベルディアに合わせてゴーストを使ったのは早計だったか…！嫌嫌アンデッドを使ったが浄化されるのなら意味は無いか…)

魔道具店への道を歩きながらその人物は考える。その人物はゴーストを使ったと言ったが、ネクロマンサーではない。そして勿論アンデッドでもない。むしろそれらに嫌悪感を抱いている。

名はデューク。魔王軍所属の墮天使である。

フードの中は中性的な顔立ちイケメンで、背には墮天使の象徴である黒い翼が生えている。

デュークはベルディアの派遣に同行してアクセルの街へと来ていた。

ベルディアは大きな光が舞い降りたと魔王城の預言者が言い出した為、その調査だったが、デュークは『ベルディアの部下にいない魔法職である事と、大きな光と言う事で神聖属性に精通している墮天使である自分も行くべきだ』といい、着いてきたのである。

暫く歩いているとウィズ魔道具店と描かれている看板が見えてくる。今の時間は閉まっているらしいがその方が都合がいい。

(ようやくだ…俺は必ずウィズを超え、魔王軍幹部へと成り上がるのだ…！)

「ウィズ！今度こそ俺と戦って貰うぞ！」

来ていたローブを脱ぎ捨て、勢いよくドアを開けて店へと押し入れる。

「む、すまない。ウィズは暫くこの街から出ていくと言っていた。用件なら俺が伝えよう」

カウンターには一人の男がいるのみで、ウイズの影など見るべくもない。

「お前、何者だ」

圧を強めて言うと、カウンターを拭く手を止める。男はこちらを品定めするように眺め、淡々と応える。

「俺はウイズが居ない間の店番を任せられている者だ。そちらこそ、ウイズへの用件は何だ。魔王軍であることと関係するのか」

「っ！貴様！」

直ぐ様ナイフを抜き喉元へと突きつけ――

「…すまない。どうやら怒らせてしまったらしいな」

「な…!?!」

信じられない光景が広がっていた。喉元まで突きつけたと思ったナイフは3本の指で摘まれ、そこで止められていた。そして――

（――動かせん！）

即座にナイフから手を放し、後ろへ下がる。

今の速度は低レベルの冒険者程度に見切られるものではない。ましてや指で摘む等余程の格差が無い限り出来るはずもない。

「フツ…：そうか。仮にも幹部、信の置ける部下位はいるか…!」

「?…：待て、何か勘違いをしている。俺はウイズの部下でも魔王軍でもない。今の俺はただの店番を任された。一日店長だ」

…は？

「ッ…そんな訳が、無いだろう！そこまでの実力を持ちながらただの店番だと!?馬鹿にしているのか!」

っもういい！元々俺は魔法が得意、ナイフの比ではない！

「『インフェー——ガッ!』」

「それは困る。ここには取り扱い注意の物が多い」

魔法を唱えようとした瞬間、目にも止まらぬ速さで掴まれ、外へ連れ出される。

店外へ飛び出し、空を跳ね、あつという間にアクセルの街を飛び越える。

向かった先は共同墓地。

地面に激突する前に何とか翼で衝撃を緩和する。反面、男は勢いよく着地するも何の痛痒も受けていないようで、その目は戦意すら読み取れない。

「ハアツ……ハアツ……『インフェルノ』！」

起き上がり間際の奇襲。今度は事前に防がれることも無く、得意の獄炎は男の体を包み込む。

俺の得意とする上級魔法は炎系統で、それに限るならばあのウイズにも勝るといふ自負がある。全力を出したら、少なくとも幹部候補程度なら大ダメージは免れない。人間なら余程の高レベル冒険者が完全に対策をしていないと骨すら残らない……その筈だった。

轟々と燃え盛る炎の中には人影、しかしそのシルエットはいつまで経っても消えない。

シルエットが剣を振るった動作を見ると、インフェルノはあっさり霧散し、そこには火傷一つない騎士がいた。

「……バ……かな!? 貴様! 何故生きている!?! いや、それはいい! 何故傷一つついていない!」

信じられなかった。防御行動すらなくまともに直撃した筈だ。流石の魔王もノーガードならダメージを受ける筈だ。いや、受けなければおかしい。宝島こと玄武やデストロイヤーでも無い限りありえない。何故、こんな人間が……!

俺の動揺から来た言葉を男は律儀に返す。

「どうやら、その魔法では俺の鎧を貫けなかったようだ」

鎧……? その胸元の空いている奇妙な鎧か? だがそのデザインではまともに防げまい。……まさか!

「その鎧……神器か! お前、神から送られた日本人か!」

「いや違うが」

にべもなく切り捨てられる。

「これは神に与えられた物でなく、自らの力で手に入れた物だ」

「巫山戯るな! やはり貴様、格下だと思って馬鹿にしているだろう!

喰らえ『ラーヴァ・スワンプ』!」

「これは……!?!」

男の足元を溶岩へと変える。本来ならこの時点で耐性の無い生物は悶苦しむが、やはりこの男には通じない。だが、少しでもそちらに注意を惹かせればそれでいい。

『インフェルノ！』『クリムゾン・レーザー！』『エナジー・イグニッション！』『インフェルノ！』『インフェルノ！』『インフェルノ！』『インフェルノ！』『インフェルノ！』『インフェルノ！』『インフェルノ！』『インフェルノ！』『インフェルノ！！』

息をつく暇も無いほどの魔法の連続行使。自分でもここまでの威力を保ったまま連続で魔法を使ったのは初めてだ。

そんな絶好調の中、いわばゾーンに入った状態でまともに受けたら、いくらかかなりの防御力を誇る男といえど無事では済まないだろう。

冬も間近だというのにこの場合は熱気に包まれ、陽炎がゆらゆらと揺れる。直接接触した訳でもないのに木は発火し、地面は硝子状になる。

「ハアツ……ハアツ……フ、フフ。フフハハハハハハ！俺は壁を超えた！力が湧き上がる……この力……ウイズすら敵ではない！ハハハハハハハハハハハハ！」

実際に、先程からデュークの身には変化が起きていた。デュークは、墮天する前の位階は大天使だったが、今の体は権天使の物。

即ち、序列の昇格が行われたのだ。

「……ふう、それにしても何故コイツは俺が魔王軍だと分かったのだろうか？……まあ、どうせ死んだのだ。問題あるまい」

この付近の始末をどうつけようか……。そう考え、今だ燃え盛る炎に背を向けると、ゴウ、という音と共に突風が吹き荒れる。

「何だとツ!!？」

「——何故魔王軍と分かったか。胸元のエンブレム、それはウイズに魔王軍の証だと聞いている。それに加えて人外の気配がしてな。よって魔王軍と思ったのだ」

そうか、店に入る際にローブを脱ぎ捨てたからか……。いや、そんなことよりも……

「……有り得ん……何故、何故……！」

男は、尚も無傷のままであった。硬いなんて次元じゃない。いくら

神器でも有り得ない！

神器のスペックはある程度は知っている。だが、あの攻撃に無傷なんてものは有り得ない。あの聖鎧アイギスならば魔法を防ぐのは分かる。だがアイギスは未だに所在不明。形状も一致しない！

「無傷な訳が……無傷な……筈が……！」

「俺は戦うつもりは無い。……ウイズへの伝言ならば聞こう」

まただ……。コイツは戦意すら目に乗せない。まるで敵とすら見なさない様で……！そしてそんな無防備な相手にすら傷を加えられない。

俺の中の何かが、ピシリと音を立てヒビ割れる。

ズンズンと迫ってくる男の目は、多少の警戒こそあるものの敵意の欠片も無い。なのに、何故か足が竦む。

「大丈夫だ。ウイズを訪ねてきたのだろうか？一般人に被害を出さない限りだが、俺はお前を攻撃する気は無い」

それは舐められているようにも取れ、しかし本心から言っているのが分かる。

「朝っぱらからウツセえぞコラアツ!!」

瞬きを一度しただけ。だというのに今までいなかった女がすぐ近くに現れる。男を見ると、顔を喜色に歪め、切っ先を向ける。

「ジークフリート。お前がここに連れてきたせいって事でいいんだよな?」

「あ、ああ。……だが、被害を避ける為にはこうするしか無いのでな」

「まあ、そうだな。……だがよ、現に俺とマスターに迷惑がかかってんだろ?」

そう言うと、申し訳なさそうな顔をし謝罪する男。

「ああ、それは本当にすまない。俺にできることなら何でもしよう」

その言葉に、待ってましたとばかりに飛びつく女。目は爛々とした戦意に満ち、莫大なオーラを隠しもしない。

傍目で見ている俺ですら分かるのだ。男が気が付かない筈も無く

「そらよー」

赤い残光と共に振るわれた剣は男に防がれる。

そう、防がれた。その上で男の肉体からは血が垂れる。その傷は如



何なる方法か一瞬で塞がれるが、それでも傷をつけた。防御した上でそれを貫いたのだ。

「ちつとは本気で体動かしかかねえとなっ!!」

「そうか…。ならば俺も応えねばな!」

そして二人は俺のこと等眼中に無いかの様に戦い出す。

既にプライドなんてズタズタだった。俺の絶対の自信である魔法はそよ風のように受け流され、ただの剣戟で優に超えられる剣士。

そしてかなり離れていてもロクに見えない俺。これで、ただの試合。差があるなんてものじゃない。ただのネズミが人間に歯向かうようなものだ。いや、噛めば傷や病気を与えられる分、ネズミの方がマシか。

もう、戦う気すら起きない。駄目だ。折れてしまった。心の底で認めてしまった。俺は所詮、墮天使で魔王軍の幹部候補になったというだけで浮かれていた、井の中の蛙だったという事だ。

「あ——『テレポート』」

テレポートを唱えたのは何故だろうか。もう、生きる気力すらもないのに。魔王軍の幹部になんてなりたくない。あんなものに追われるくらいならば、惨めに暮らした方が幸せだ。

もう、帰ろう。ベルディアの補佐なんてやっていたら殺されてしまう。

瞬殺だ。文字通り、虫の様に潰れてひしゃげて千切れ、擦り潰され焼き尽くされ消し飛ばされ斬り捨てられ血霧になってしまう。

テレポートは成功した。だが、さつきも見た場所だ。

「ここは…魔道具店か」

逃げなければ。逃げなければ逃げなければ逃げなければ。

今ので分かっている。ここへ来るのに時間などかからない。店番をしているとも言っていた。ならばあの男は程々に切り上げるだろう。今すぐに詠唱を…。どこか、人目につかないところへ…!

「あの…大丈夫ですか? 顔色が優れない様ですが…?」

…誰だ?

## ある墮天使の受難2

「あーあなたは……あの、本当にどうされたのですか……？まるで死人みたいですよ……あ！いい、いえ、今の言葉に他意はありません！ただ、本当に顔色が悪くて……」

あたふたと弁明するその人物。そうだ。これはウイズだ。俺が越えようと努力した、魔王軍幹部だ。

ふと、理解し難い感情が湧き上がり、言葉を零す。

「俺は……俺は、長い間、お前の事を探し続けたんだ。この街で魔道具店をやっていると聞いたときには、……耳を、疑った。だが、遙かな遠方の地よりお前に、会いに来た」

「はい？……え、ええっ!?そ、そんなに遠くから……」

突然話し出され、困惑するウイズ。そうだろう。これは俺が言いたいだけだ。

「俺は、お前の事だけを考え続け、ただひたすらにこの身を鍛え続けた……」

「い、いきなりそんな事を言われても！そ、それに昼間からあんな行為に及ぼうとするのは良くないと思います！」

デュークは声を絞り出す。それはさながら罪を懺悔する罪人の様で……

「人目がどうかじゃありません！そ、そういうのはお互いをよく知った上で、もつと時間をかけてですね……」

「……そう、だな。俺は、あまりにも知らなすぎた。もつと時間をかけて探るべきだった……」

デュークは思う。はたしてどれだけの時間をかければアレを何とか出来るだろうか。否、所詮下級墮天使。まともにやってあの領域へは踏み出せまい。

「俺は、炎系魔法を得意としている。お前とは、正反対、だな」

「わ、私達の相性が悪いことを隠そうともしないんですね。誠実なのは好感が持てますが……でも、そんな事まで調べたんですか……」

デュークは、ただポツポツと壊れた機械の様に語るだけだ。反し

て、ウイズはその一言ずつに様々な表情を覗かせる。

「……当然だ。お前がまだ人間だった頃、氷の魔女と呼ばれていた頃も知っているからな……」

「わ、私が人間じゃないことも知っているんですか!？」

ウイズはギョツとなる。まさか人間じゃないことを知られているとは思わなかったからだ。

そんなウイズを置いてけぼりにデュークの独白は続く。

「お前の事はなんだって知っている。…いわば、俺はこの世でお前のことを最も理解している者だと言ってもいい」

「ままま、待つて下さい!そんなグイグイこられても、心の準備が!つ、つまりあなたは、私がアンデッドだと知っても尚、怖がりもせずにごうしてやってきたというんですか?」

どういう意味で捉えているのか、ウイズはタジタジとなり後退る。

「ふっ……リッチー、リッチーか。リッチー程度恐るに足らん」

あれはアンデッドなどでは無い。つまりあれはまだ人間の範疇なのだ。それに比べればただのリッチーなど中途半端で、浄化魔法もよく効くのだ。あの人間とリッチー、どちらかと戦えと言われたら、迷いなくリッチーと戦う方を選ぶだろう。

「そ、そんな……!そ、そこまで言われると……」

「俺は、お前に勝負を仕掛けるつもりだった……」

「ええっ!?何故そんな話しに!?そ、それにもりだったとは……?」

話が理解できなかったウイズが尋ねる。

「そのままの意味だ……。お前に俺の力を示し、今の仕事を辞めてもらうため。……だったのだ」

「わわ、私に家庭に入れと……!いい、いえ、だった……とは?」

ウイズはアンデッドだというのに顔を上気させ、まだ冷静な部分で問いをかける。

デュークは頭を抱え、泣いたような声音で絞り出す。

「お前も分かっているだろう……!単純だ。俺には無理だと理解した。してしまっただけ!身の程が違いすぎる。俺ごときでは……到底(あの男達の)足元にも及ばない……!」

「えっ、ええっ！そ、そんな事無いですよ！そういった事には詳しくないですが、貴方が卑下する事なんてありません！」

「だが、現に俺は…見向きもされない…！何も効果が無いのだ…！全身全霊で向かってでも響くどころか気を向けやしない!!」

「そ、それは…！確かにテレポートで逃げたのはアレですが…！」

「お前も、そう思っているのだろうか？…：他ならぬ俺の心が折れてしまった。ここまで恐ろしい等と知らなかったのだ…！」

「わ、私、そんなに思っているだなんて…、知らなくて」

「それだけでなく、（実力が）遥かに近い者もいた」

「い、いえ！カズマさんやカイリさんとはそんな関係でなくて…！」

勿論、よく聞けば違和感を覚える台詞だが、二人は気付かない、いや、気づけない。

「俺では、あの男には勝てない。それをマジマジと見せつけられた。…：俺など、眼中に無いのだ」

「そんなこと…：これから頑張っていけばいいですよ！」

ギリツと歯を噛みしめるデュークを必死でフォローするも、今のデュークには届かない。

「正直、死のうと思つた。こんなことならばもういつそと思つた。だが、気付けばここに戻ってきていた。…：何故、死を選ばなかったのか」

「だ、駄目です！死ぬのは絶対に止めてください！たった一つの大切な命。それを自ら落とすなんて仰らないで下さい！」

ウイズは耐えられないとばかりに否定する。今言つた事は本心だし、自分のせいで命を絶たせる等あつてはいけない。…：そ、それに、自分の事を好いている人なのだから…。

「だが…：俺が納得いかないのだ。仮に、このままうまく行つたとしても、俺はそれになんの感動も覚えないだろう。常に不安に駆られ、生き恥を晒すだけだ」

苦痛に歪んだ顔で告げるデューク。端正な顔はくしゃくしゃで涙すら浮かんでいる。

そんなデュークを見て、ウイズはその手を優しく握る。

「あ……」

「なら……なら……せめて自分の中で区切りをつけてください！完全にはいかないでしょう。ですが、今のままよりは前に進める筈です！そんな簡単に死ぬ等、生きていればそれを忘れるほどの幸福に出会えるかも知れません！……私も、嘗ては仲間の為に死のうと死のうと思っていました。アンデッドが生きているだなんておかしい話ですけど、これでも今の生活が楽しいんですよ？……大丈夫です。ほら、私は知っての通り不死者ですので、いつまでも待ちますから」

そう言い優しく微笑むウイズ。

その笑みを見たデュークの心には確かな変化が訪れた。

(な、何だ……!?この感情は……)

「あわわ、す、すみません！」

ウイズは手を握っていることに気づき、慌てて離す。ウイズも意識的に行っていた訳ではないようで、元々赤い顔を更に赤くして俯く。

「……………」

「……………」

お互い無言の気まずい空気が漂う。ウイズはどうするべきかと言葉を探していると、デュークは尋ねる。

「………思うのか」

「はい？」

「俺が、相応しくなれるとお前は思うのか」

一瞬、間が空いた。

デュークは泣く寸前の子供の様な酷い様相で顔を上げた。

「…はいっ！他の方に敵わないなんて事は誰もが通る道です。ですが、諦めたらそこで終わってしまいます！今敵わないなら自分を磨く。それでも駄目ならより鍛える。………そうして、皆さんは生きているのです。だから、大丈夫ですよ。私だって、まだまだ未熟ですから！」

「……………」

ウイズが語ったことはただの理想論だ。努力をしても実らず腐る者、劣等感を抱える者など山程いる。挫折を味わい諦めるものの方が

遥かに多い。そんなことが出来ているのなら誰も苦労しない。

そう、ただの理想論だったのだが……。

「俺は…結局諦めてしまうかもだぞ」

「別にそれでもいいんです。さつきは偉そうな事を言いましたが、それでも何かしら生きがいを見つけれればいいんですよ」

逃げの言葉を出す、優しく否定する。

「どれだけの努力をしても、足りないかも知れない」

「それは…あるかもしれませんが、勝つことが全てではないと思いますよ。何か胸を張って自慢出来る事があれば、それだけで魅力的ですから」

「……たとえ、たとえそう思うことが出来たとしてもっ！俺には務まらないに決まっている！」

「二人では出来ないのなら、誰かに助けを求めてもいいんですよ？

……私も、昔は一人で思いつめて、ただがむしゃらになっていた時もありました。…その時は、結局一人では何も出来ませんでしたけどね」

「何…？」

デュークはその言葉に驚く。デュークにとって、ウイズとはベルディアを追い詰めた凄腕のアークウイザードであり、死の宣告を受け、自らをアンデッドへ化した幹部だった。

この苦労は、当時その場にいたある魔王軍幹部の大悪魔しか知らず、彼は誰にも話していない。

つまり、魔王軍にとつてのウイズとは、単身魔王城に突撃してきたヤベーヤツでありながら、中立を保つ幹部であり、決してこのような苦悩など無いと思っていた。

「リッチーになったのは、死の宣告から逃れる為。けれどこれも私一人ではとても考えつきませんでした。なので、一人でやって根が詰まった時は、誰かに頼ってください。それに、あなたは一人でやるという前提で話していますが、私にだって意地があります。その時がきたら、二人で頑張っていきましょう！」

あまりに眩しい笑顔。デュークはアンデッドを嫌う身でありなが

ら、その笑顔から目を離せない。その感覚はまるで、初めて（まともな）最高神の姿を拝見したときにも近しく、それを超えていた。

その瞬間、今までの修練が蘇る。

（そうだ、俺は、あの時とは比べ物にならないほど強くなった……！ならば、あの時の倍……いや、十倍は努力をすれば……或いは……！）

「ふふっ……元気は出ましたか？」

目に光が戻り、その身に生気が溢れているのを見たウイズは仄かに笑う。

「ああ、答えは得た。大丈夫だ、ウイズ。俺は、これから頑張っていく。……まず手始めに、紅魔の里で鍛えるところでしょう」

「まあ……それはいいと思います！あそこは私も唸る程の所ばかりですよ！」

暗い雰囲気とは一転、いいムードが漂う。デュークはこれからに夢想し、ウイズは我が事のように喜ぶ。

「ふっ、そうか。俄然楽しみだ。……では、またな。いつかお前の隣に並ぶに相応しくなってみせよう！」

そう言うと、黒い翼を広げ、遙か彼方の大空へと羽ばたいた。

勿論、墮天使だという事に気づいていなかったウイズはポカンと口を開け、デュークの消えた空を仰ぐ。

「え、ええええええええええっつ!!」

目はぐるぐると回り、あまりに驚いて大声をあげる。

朝っぱらからそんな声をあげたせいで、付近の住民からの奇異の視線と怒りの籠もった視線が刺さる。

流石にそれは応えたのか、そそくさと店内に戻る。

「え、え？……デュークさんが墮天使様……？わ、私はアンデッドで……！デュークさんは墮天使で……？そ、そんな方とわ、私が……？き、禁断の……」

ボンツと湯気を吹き出しながらゴロゴロと転がり続けるリッチー。彼女、戦闘関係以外は基本ポンコツなのだ。

ういず は しょうきにもどった！

一方デュークは、空を飛びながら考える。

(ウイズの顔を思い出すたび、胸が熱くなる。……クソツ、俺は一体どうしたんだ：!?)

胸のうちに抱える感情を理解できず、混乱している。それでも、やるべきことは理解している。

彼の体は真っ直ぐに紅魔の里へと向かっていく。

いずれこの感情と向かい合う時が来るのか？

それは幸運の女神にすら推し量れないだろう。